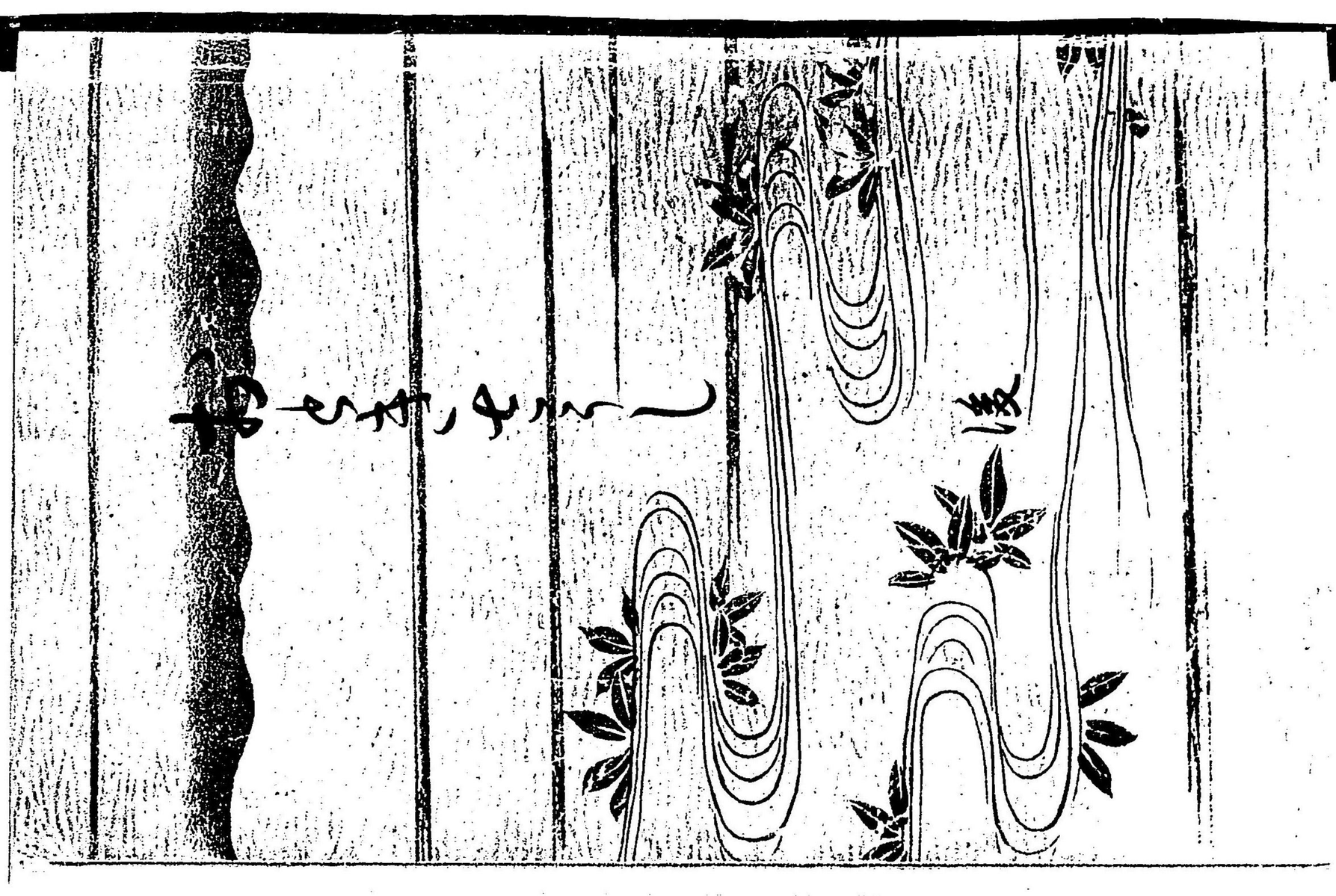


سورة الرحمن

913.490 I

さゞれいし

神武天皇より十二代成務天皇と申し奉るは。限ふくめでたき御世ふり。此帝に男みこ。姫みや三十八人の御子おはしけり。卅八人めは。姫みやにてわたらせ給ふ。かずも志らぬほどの。御子たちの御末ふればさて。その御名をさゞれ石の宮とぞ申しける。御容貌世にすぐれてめでたくおはしければ。數多の御中にも超えて。御寵愛斜ふらずいつきかしづき給ひけり。さるほどに御年十四にて攝政殿の北の政所に。うつしまゐらせたまふ。めでたき御おぼえ一天四海のうちに上こす人こそふかりけれ

さゞれ石の宮。世けんの有爲轉變のことわりを。つくづくおぼしめしよりて。それ佛道を願ふに。淨土は十方にありときけども。中にもめでたき淨土は。東方志やうるり世界に若くはふしごおぼしとりて。つねに怠らず。藥師の御名號。南無藥師瑠

さゝれいし

国立国会図書館 29.7.22
337019

璃光如來と唱へ給ふ。ある夕ぐれのことふるに。月の出づる山の端打ちふがめたまひ。わが生れん淨土は。そふたぞとおぼしめし。獨たゝずみ給ふに。御前に虛空より黃金の天冠を額にあてたるくわんにん一人まゐり。さゞれ石の宮に。瑠璃の壺を捧げ申しければ。藥師如來の御つかはしめ。こんひら大しやうふりとぞ申しける

此つぼに妙藥あり。これすふはち不老不死の藥ふり。これをきこしめされば。御年もよりたまはず。わづらはしき御心ちもふく。いつもかはらぬ御姿にて。御命の終もふく。いつまでもめでたく榮え給はんとて。かき消すやうに失せにけり。さゞれ石の宮。此つぼをうけとらせ給ひ。あらありがたや。年月願ひ奉る志るしかふとて。三度ライし。

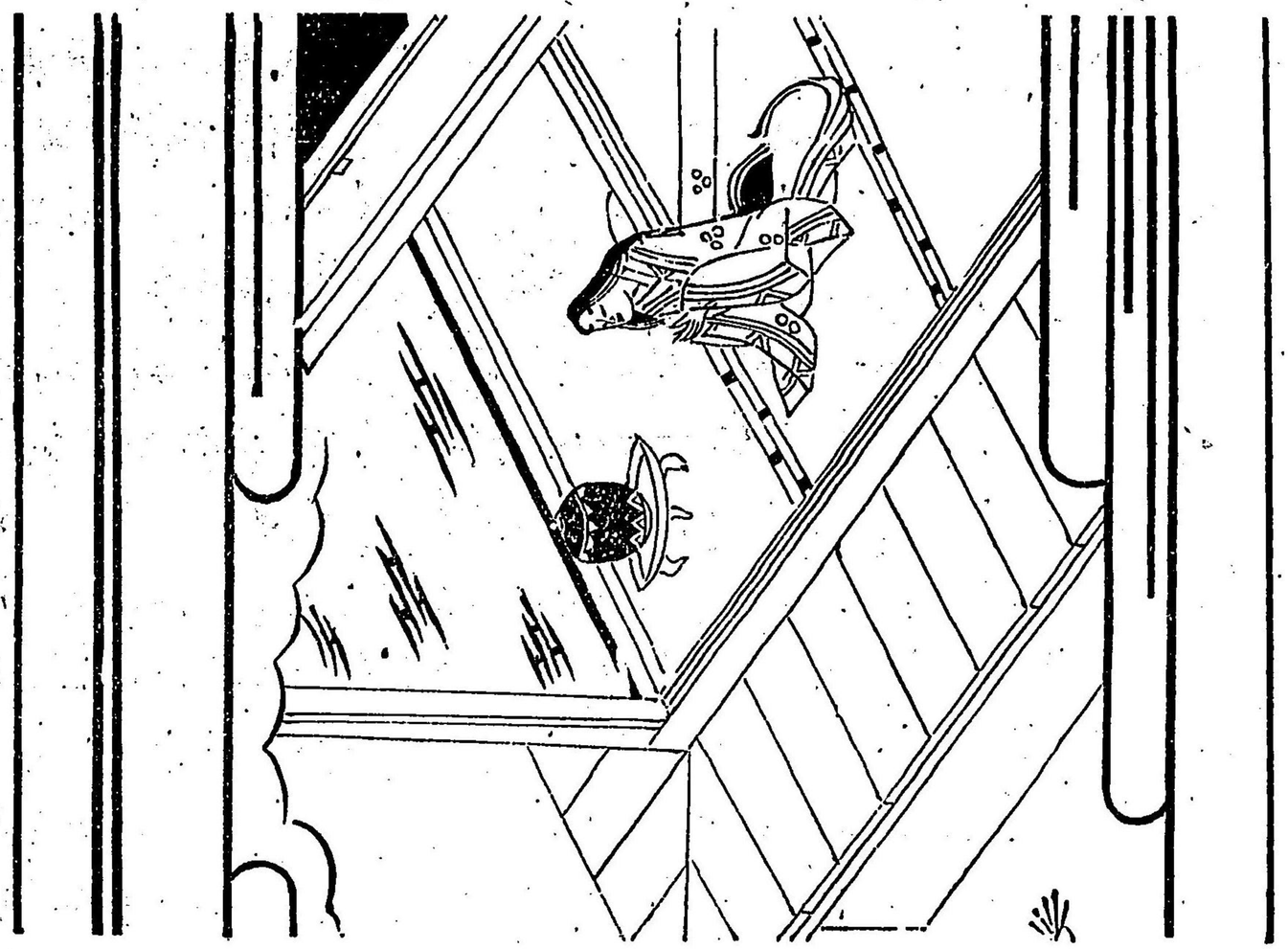
瓦藥

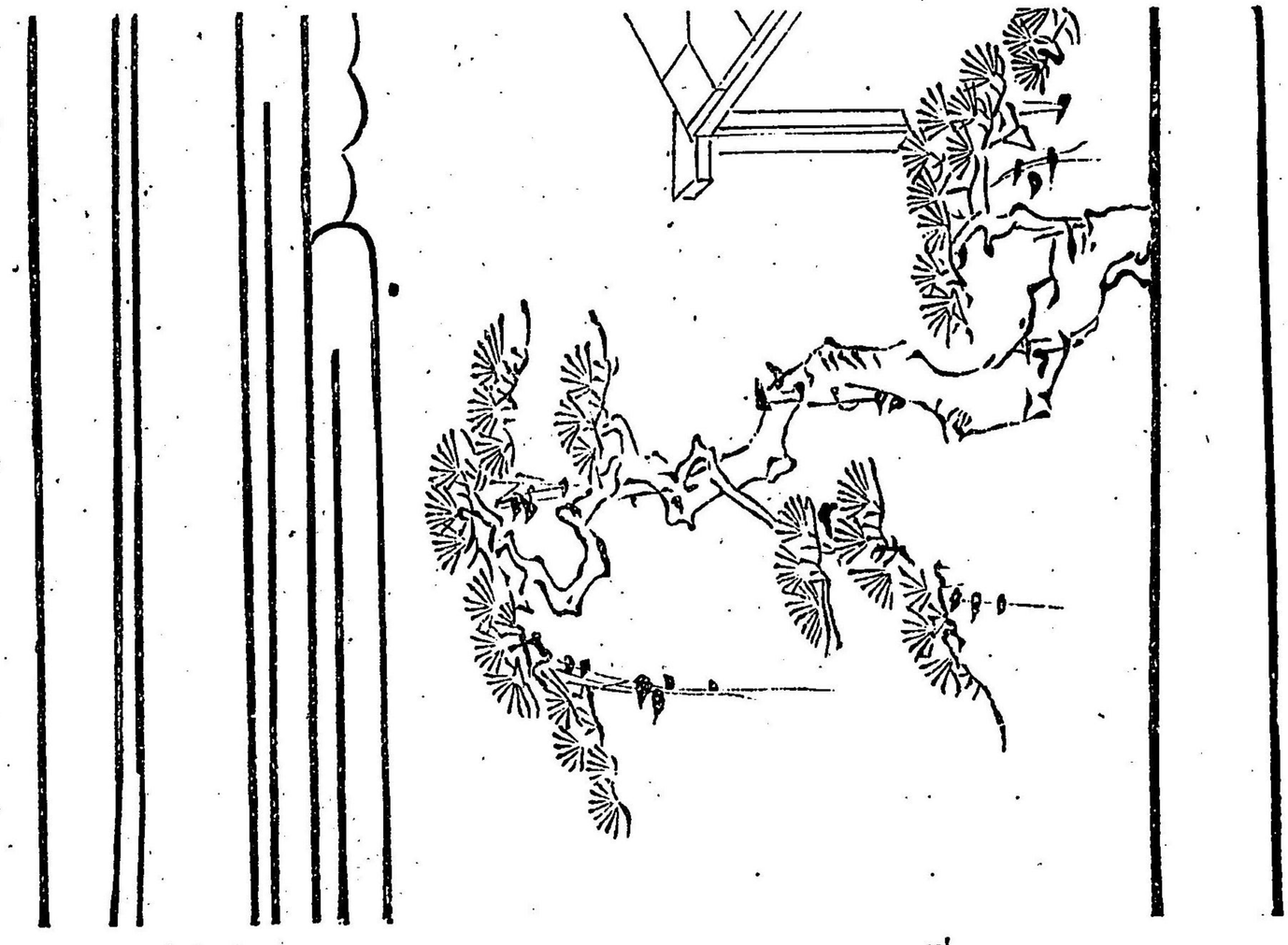
らうやく嘗め給ふに。あまたあぢはひいふばかりふし。青きつぼに白きもゝあり。よみて御覽ずれば。歌ふり

君が代はちよにやちよにさゞれいしのいはほとふりてこけのむすまで

とあり。これすふはち藥師如來の御詠歌ふるべし。それより御名を引きかへて。いはほの宮とぞ申しける

其後年月を送り給ふに。聊もの〻悲しき事もふく。いつも。常磐の御姿にて。榮花にほこり給ふ。御命長く渡らせ給ふことは。すべて八百餘歲ふり。成務天皇　仲哀天皇　神功皇后　應神天皇　仁德天皇　履仲天皇　反正天皇　允恭天皇　安康天皇　雄略天皇　清寧天皇　十一代のあひだ。いつもかはらぬ御姿にて。榮えさせ給ふふり。さゞれ石の宮。あるよもすがらともし火を掲げ。藥師志んごんをねんゝじたはしけるに。かたじけふくもやゝくし如來。いとも貴き御姿にて。いはほの宮に對ひのたまふは。汝はいつまで此世界にあらん。人間の樂は。わづかのことふり。それ淨瑠璃世界の地は。すふはち瑠璃ふり。汝をうつさん淨土は。七寶の蓮花の上に玉の寶殿を立てこがねの扉をふらべ。珠のすだれをかけ。床には錦の志とれを敷き。綾羅志やうごんを以て身を飾りたり。數千人の女くわん。時々刻々に守護を加へ。百味の御食をさゝぐる事ひまもふし。此世界にて契深き人は。目





の前に並居つゝ。何事も心のまゝの極樂ふれば。さのみはいかで八苦の世界にあらんとて。岩ほの宮を東方じやうるり世界に導き給ふ。其身なもかへずして。成佛し給ふこと。きたい不思議のためしとかや。上代も末代も。かゝるめでたきためしふし。今は末世のこと。か程にこそはおはせずとも。神や佛を念ずる人は。やはり其志るしのふかるべき。南無藥師瑠璃光如來〳〵。おんころ〳〵せんだりまとうきそわか〳〵

337010

帖のもくろく

の前に並居つゝ。何事も心のまゝの極樂ふれば。さのみはいかで八苦の世界にあらんとて。岩ほの宮を東方じやうるり世界に導き給ふ。其身をもかへずして。成佛し給ふこと。きたい不思議のためしとかや。上代も末代も。かゝるめでたきためしふし。今は末世のこと。か程にこそはおはせずとも。神や佛を念ずる人は。やはり其志るしのふかるべき。南無藥師瑠璃光如來〜。おんころ〜せんだりまとうきそわか〜

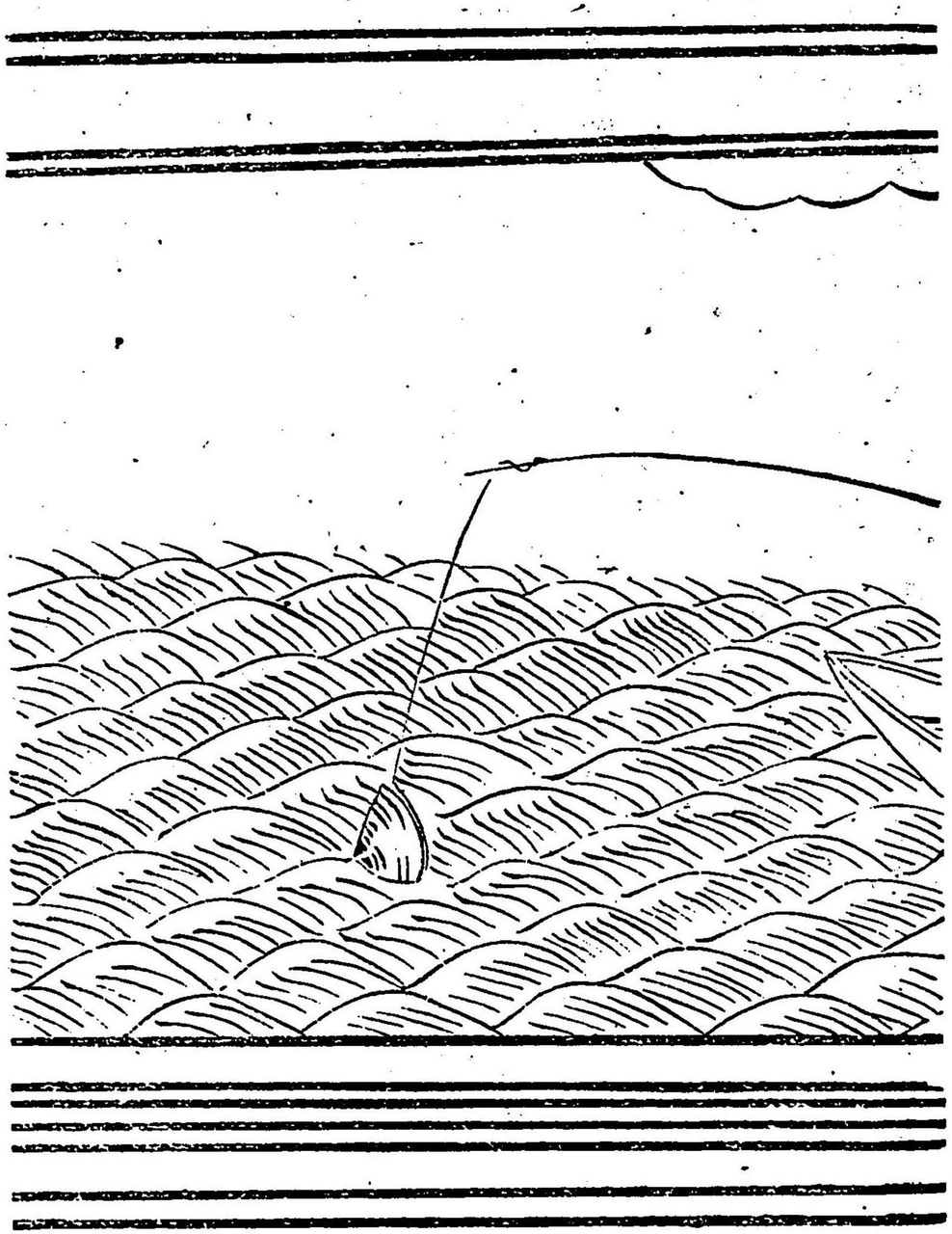
337010

怪のもくろく

蛤の草紙

天竺摩迦多國の傍に。志ぐらと申す人あり。世にすぐれてまづしき人にておはしけり。父には早くはふれて。母おや一人もち給ひけるが。其頃天竺ことのほか飢饉(貧)やきて。人つかれて死ぬる事かぎりふし。志ぐら母を養ひかねて。よろづのいとぶみをして母をすごさんために。天に仰ぎ地に俯して營めども。更に其かひふかりけり。こゝに思ひいだしたる事ありとて。浦回に出でゝつりをして。うろくず(鱗)をとりて母をすごさんとて。うらへ出でゝ小舟に乘り。沖中へ漕きいだし鈎をたれ給へり。色々の魚をつりて。毎日はゝを養ひけり。されば志ぐらは是をうれしき事に思ひけるが。ある時又うらへ出でゝ釣を垂れ給ひしが。其日もはやくれがたにふりけれ共。魚ひとつもつりえざりき。志ぐら心におもふやう。此ほどいくらのせつし(殺生)やうをして。母を養ひたるむくいにや。更に魚つられざりけるとて。志ぐら心に思ふやう。いかに母の我をまち

かねさせ給ふらん。今まで物をまねらずして。さぞ御心つかれ給はんとて。釣する心もそばにふりて。母の事をのみ案じぬたりしが。釣竿も心のありけるにや。すは魚こそかゝりたるらめと思ひ。ひそかにつりあげてみければ。うつくしき蛤ひとつつりあげたり。志ぐら心に思ひけるは是はいかふる事やらん。何のやくにたつべきとて。海へ投げ入れたり。さてここにはうをふしとて。西の海へ舟こぎて行き。つりたれしかば。又以前の南の海にてつりあげたりし蛤ふり。志ぐら心に思ふやう。あら〳〵ふしぎのことやとて。又こりはふして海へふげいれたり。それよりまた。北の海へ漕ぎ行きて。つりをたれし所に。又西の海にてつり上げし蛤あがりけり。その時志ぐら思ふやう。是はきたいふしぎのことふり。一度ふらず二ごふらず。三度までつりあげたり。たゞかりそめふがらも三世の契をえたる物かふとて。此たびはこりあげて舟のうちへふげ入れて。又つりをたれければ。彼の蛤俄に大きにふりけり。あらふしぎのことやとて。志ぐら。とりて海へいれんとする所に。この蛤のうちより。こんゞ(金色)きのひかり三筋さしけり。是はいかふる事ぞやとて。目を驚ろかし。きもをけし。おそれをふしてこほゞかりける。此蛤がひふたつに開け。其中より。容顔美麗ふる女房の。年のよはひ十七八ばかりふるがいでたり。志ぐらこれをみて。潮をむすび(手水)てうづをつかひつゝ申しけるは。是ほどいつくしき女房のすがたをみれば春の花。かたちをみれば秋の月。ゞつはら十のゆびまでも。瑠璃をのべたるごとくふる女房の。海よりあがらせたまふ事のふしぎさよ。若も龍女ふゞこゝ申す。人にてはしまし候か。此志づの男の舟に上り給ふ事。冥加もふき事ふり。たゞ御すみかへ歸り給へゞと申す。其ゞき女房仰せけるは。われは來たるかたも志らず。又ゆくすゑも知らずさふらへば。そふたの宿へつれて御ゆき候へ。たがひのいとふみをして。うき世をわたらんとのたまへば。志ぐら申すやう。あらおそろしや。思ひもよらぬ事ふり。われはは四十にふり候へども。いまだ女房ももたず候。其いはれは。六十に餘りたる母を一人もち候へば。もしわれ女房をもち候はゞ。心もそばにふりて。母を無沙汰にあつかひ申さん事もや候はんとおもひ。母の氣をそむくゞ存



じ候へば。妻をもつ事おもひもよらぬ事やとて。けしからず聞えければ。此女房仰せげるは。ふさけふき人かな。物のゆくへをよくきく給へ。袖のふり合せもたしやうの縁と聞くぞかし。たとへば鳥類ふぜだにも。えんある枝に羽をやすむるぞかし。ましてや是までそふたをたのみまゐらせて。此舟にもとづきしかひもなく。かへれと仰せ候ことのあさましさよとて。誠に思ひ入りたるけしきにて。涙にむせび給へば。ふぐら是をみてつら〳〵思ふやう。さらばせめてをかへれろさんとて。いそぎ舟を漕ぎ。みぎはにつきて舟よりいそぎおろしまゐらせて申しけるは。われは是までさらせ申すこゝにて候。さらは御暇申さんとてかへらんと志ければ。此女房袖にすがりふげかせ給ふやう。せめてそふたの宿まで御つれ候へ。一夜をあかさせてたび給へ。あけぬはいづかたへも。足にまかせてゆき候はんとのたまひけり。ふぐら申されけるは。われ〳〵が家と申すは。たゞよのつねの家にてもなく。誠に志づのをのねやのありさま。めもあてられぬ所なれば。おき奉らん所更になく候。常のざしきに置きまゐらせん事は。みやうがもなき事にて候へば。家をつくりまゐらせて置き奉らん。御まち候へと申せば女房のたまひけるは。いかなる金銀瑠璃志やこ瑪瑙をもつてつくりたる家なりとも。他所よそへは更にまゐりたくもなし。そふたのすみかへなられば。行き候はんとのたまへば。さらはすこし御まち候へ。先われ〳〵宿にゆきて。母に伺ひ申して御むかひに參り候はんとて。志ぐらはすみかにかへりて。母に此よし申しければ。母おのめふらずよろこび給ひて。いそぎ座敷を清め。こふたへむかへ申さんとのたまひければ。志ぐらよろこびていそぎ海のはたへ御むかひにそまゐりける。此女房まちかね給ひてわたりける。みちのほとりにてゆきあひ奉りける。志ぐら申しけるは。御はだしにては御足いたく候はんほどに。此いやしき志づのをが。うしろにおはれ給へと申せば。よろこび給ひておはれさせ給ひける。さてわがやどへ行きつきおろしければ。やがてはゝ出であひみたてまつりて。あらみやうがもなや。是そ天人と申す人なるぞとて。わがゐる所にはいかゞとて俄にたふをかき。われよりたかく置き奉りて。あがめさせ給ふ事かぎりなし。

其時志ぶらが母の申す。みやうがもふき申し事にて候へども。ふご志ぶらが妻にふらせ給ふ人にてはしまし候はずや。志ぶらもはや四十にふりまゐらせ候が。いまだ妻ももたず。子の一人も候はぬこそ。あけくれわびまゐらせ候ひつれ。我身はやはや六十にあまり。明日をも志らぬ身の。此事をのみあんじさふらふ。あはれ〳〵似あはしき妻もがふさてふけきければ。女房仰せけるやうは。われはこれ來りしかたも知らず。もとよりやくへも志らぬ身ふれば。いかやうにも志ぶらとおかせ給へ。われ人志らぬいとふみをもして。もろともにうき世をわたり候はんとのたまひければ。母ふのめによろこび給ひて。さらばといひて。志ぶらに此よしいひければ。もとよりおや孝行の人ふれば。ともかくも母の御はからひと御返事申されければ。天竺も人の心のはふはだしきところふれば。みふ〳〵人申しけるは。志ぶらの所にこそふしぎのふり人わたり給へ。いざやまゐりをがまんとて。道俗男女にいたるまで。くましれをつゝみふゝでてまゐりけり。さるほどに白米三石六斗。日のうちによりたり。其時まゐりたる女房にのたまひけるは。われはさだかふるものふれば。学と申す物あらばくれよと仰せければ。そのつきの日は学をもちてまゐりけり。志ぶら心にめでたき事のありて。まへの日よりまゐらせ候米にて。母をすごし候はん事のうれしさよとてよろこびけり。また此女房は。学をこしらへてひそかにし給ふほどに。いつうませ給ふとはみえねども。おびたゞしくうませ給ひけり。さる程に。つむといふ物ほしき由のたまへば。志ぶらやがてたづね求めてまゐらせけり。此をつむぎ給ひしおこそ面白く聞えければ。よく〳〵きて文字にうつしてみれば。やるてには南無ぢやうぢう佛とひゝき。引きいれよれるてには。ふむぢやうぢうほふとひゝき。まき給ふときは。あのくたら三みやく三菩提と巻きをさめ給ふ。又てがひと申す物をとり給ふ時は南無妙とひゝき。つむがせ給ひけるほどに。二十五月と申すにつむぎ出だし給ひて。さて機のぐそくほしとおほせければ。さらばとてこしらへみんとするを。御らんじてのたまひけるは。よのつねのはたのぐそくにてはわろく候。われ〳〵が。はたのぐそく

は。つねのにかはり候さて。ほんをいだし給へば。御このみのやうにこしらへて參らせければ。此女房よろこび給ひて。何ごとしてまきたてみんと宣ひける所に。じげん神通力者はやがて心えさせ給ひ。くわうしやちはうべん(方便)の說ふれば。いかでかわろかるべきぞや。一度も見ぬ人二人來りて。一夜の宿をかりたまふ。此はたをともにまき給へり。是をはじめて志ぐらの母ふしぎのことかぎりなし。いよ〳〵あがめさせ給ふことかぎりなし。志ぐらは此はたたちて。母のふくさまれ候事のうれしさよ。いつよりも心やすくすぎやかれ。又いとふみのわざをし。此ほどは志んらう(心勞)ともおぼえず。是ほど天竺の飢饉世にすぐれけれども。我々心やすく候事こそにうれしけれさて。母の御足をわが額の上におきてねさせまゐらせけり

其時志ぐらがそばにねさせ給ひたる。女房志ぐらにたづね給ふやうは。何さてふき給ひ候ぞと仰せければ。若き時御ふさり候ころは御足をひたひにねさせ申すにおもくおはしまし候ひしが。はや御年もより給へば。次第に身もほそらせ給ひて。ことの外に輕く候程に。ふくよりほかの事はふく候と語り給へば。女房聞き給ひてのたまふやう。誠にうらやましの志ぐらの心や。いかふる佛の御めぐみもふごかあらざらん。か程におや孝行の人は。世にめづらしき事やさて。やがて物がたりをそ志給ひける。たとへばあつてう南枝にすをかくるつばさも。おやのはごくみをおもひすをたてられてもろともにたつごとき。志てうのわかれさて。はゝ子のわかれを志らぬまう志うの雲にへだられ共。親かう〳〵の鳥は。うまれたる木の枝に百日が間。日に一度づゝ來りて羽をやすむるを。母の鳥。さては是こそ我子よさてよろこびけるさて。やがて志ぐらをふぐくさめ給ひける。孝行の鳥の奇特は。何ごとならばやさてあみをかけぬれども。さらるまゝきぶり。ここに鷹わしふごにもさらるまゝきぶり。まして人間と生をうけて。おやに志たがはぬ人。この世にては禍をうけ。七ふんあやまちにあひて。その身おもふ事叶ひ難し。おや孝行の人には。天より福を與へ。七難則滅七福則生さて。何事も思ふ事の日のうちに叶ひ。志ゆにんあいきやう(愛敬)ありて。おのづから今生に

ては。上ぐう菩提の道にゆきぞ。安穏快樂の氣をうけ。九品(ほん)れんだいの座をさして。東方藥師の淨土。西方阿彌陀の淨土にて。諸佛の上のゞやうぐにもこづき。おのづからゞげんゞんづうりきの身とふりて。れびかんおんとふへさせん事。疑ふしとかたり給ひける。いきのこほひはいきやう薫ゞて。まん〳〵ごみち〳〵て。夜晝のさかひもふし。いぞ機をおらんとて。志ぐらにのたまひけるは。此家はたばりせばくておらるまゞく候。そばにはたやをつくりてたび給へとのたまへば。志ぐらにはかにくろ木をとりて。はたやをつくりてまゐらせけり

其時女房仰せけるは。かまへて此はたおりみんほゞ。此方へ人を入るまゞと仰せければ。志ぐら心得候ふとて。母に此よし語りけり。夕ぐれに若き女一人いづくよりとも志らず來りて。宿をかり給ふ。志ぐらの女房やがて此はたやをかしけり。志ぐらの母仰せけるは。此はたやへ人をいるまゞと仰せ候が。何とて宿を御かし候やと仰せければ。此人はくるしからぬとて。二人してはたを織り給ふ音こそめづらしけれ妙法蓮華經。くわんぜおんぼさつ。ふもんほんだい二十五のぼさつ。たまの御はたを織り給ふ。誠にほけきやうの。一の巻より八の巻に至るまで。二十八品ことゞく織り入れ給ふ御こゝろ。耳に聞えてありがたく。よるひるのさかひも志らずして。十二月の間におり出だし給ひて。女房仰せけるは。今おりいだし候とて。こばんのごとくに。あつさ六寸ばかり。ひろさ二尺四方にたゝみ給ひて。志ぐらに仰せけるは。あすまかだとくろくやおんの市にもちて行き。御うり候へとのたまひければ。志ぐら代はいか程と申し候はん。金錢三千貫に御うり候へとおほせければ。あらふしぎや。此ほどうりかひ候ぬのは。よのつねやすく候が。是はあまりにおびたゞしく候とて。をかしげに申しければ。女房仰せけるは。たゞよのつねの布にて候はず。われ〳〵が織る布は。定めてろくやおんの市にてみ志る人もあるべし。代はかぎるべからず候。はや〳〵市へ入もたつらんやき給へとおほせければ。志ぐら持ちてゆき。ろくやおんの市にて。是はいかふる物にて候とてわらひ。又はふしんさうにみる人もあり。一

日もちてまはれども。たれにても取りて見る人だにもふし。志ぐら心に思ふやう。さればこそ志らぬ事をして。かゝる物を市へ出だし。人のわらひぐさにふる事の無念さよとて。持ちてかへらんとする所に。みちにて年のよはひ六十に餘りたる老人の。びん鬚いかにも白く。其身は人にすぐれ。あしげの馬にのり。こもの人三十三人あるに。行きあひたり。此馬にのり給ひたる老人仰せけるは。汝はいづくのものぞとこはせ給へば。われは志ぐらと申すものにて候が。ろくやおんへ布を賣りにまかりて候が。かひ主ふくして持ちて歸り候と申す。汝は聞きおよびたる者ぞ。其布みんなのたまひ候ほどに。馬の上へさしあげたり。三十三人の人々。此布をひろげければ。ふがゝ三十三ひろぶり。ちか頃めづらしき布かな。われかはん。代はいかほどゝ仰せければ。金錢三千ぐわんにうり候はんと申しければ。あらやすの布やとて。さらばわれ〳〵が所へとて。志ぐらも誘ひ給うて。それより南の方へさして行く。くわうゑんまん〳〵として。雲に聳えてもんあり。みれば玻璃の礎に水晶の珠を柱とし。ろりのたるき。志やこめふうにてうはぶきし。ふか〳〵目をおどろかすばかりぶり。門のうちへ入りてみれば。いきやうくんじて花降り。音樂のこゑ天にみち〳〵て。心もわかくよはひも久しくある心ちして。かへらんことをわすれたり。此馬にのり給ふ老人。えんのきは近のりつけておりさせ給ひ。うちへ入りて金錢三千貫三人してもちて出でたり。あらかゝるちからのつよき人もあるやと。志ぐらおそろしく思ひけり。扨いまの布賣なに。こゝたへよべとてさしきに呼びあげ給ふ。志ぐらあしふるひて心もみだれ。身のおき所もふく思ひゐる。餘りによび給ふほどに。きだはしをあがり。大ゐかにあがる。心はさふがら薄氷をふむがごとくにてのぼりけり。さて老人のたまふは。其七德ほうしゆのさけ。のませよとのたまへば。もとより志ぐら上戸にて一はいのみてみれば。中々かんろのあぢはひみち〳〵て。ごんごえこらへぬ酒ぶり。いかほどものむべけれども。老人おほせけるは。七はいよりおほくのむべからずとのおほせふれば。七はいのませけり

さて金錢三千ぐわんをば。是より送り候はんとて。おそろしげふる人。三人よび出だされけり。名をば志やうもんじんさくごさや。びしやもんじんさくごしや。ばらもんじんさくごさやと申す。此三人におほせつけさせたまひて。三千貫の金錢を。たゞ一度に志ぐらがやごへきたりければ。其時志ぐら御いとま申さんといひければ。老人おほせけるは。今のみたる七さくほうしゆの酒は。觀音のごやうごにある酒ふり一はいのめば一千年のよはひをたもつふり。ましてやふんぢは。七はいのむ間。七千年の齡あるべし。此後は物をくはずともほしくもあるまじく。物をきずともさむくあるまじきふり。是ぞ親孝行の志るしよとて。御立ちまし〳〵て雲の上にのりて行き給へば。五色のひかりさして。南の天にあがり給ふと思へば。志ぐら我やごへ歸るふり。女房にとくかたらんと志ければ。其時のありさまをいはぬさきに。すこしもたがはず女房かたりたまへば。志ぐら心に思ふやう。おそろしのことや。是はどんづうをさとるけしんぞやと思ふ所に。此女ばう仰せけるは。さらばわれ〳〵は御いとま申し候はんとのたまへば。母きこてうたてしき御ことかな。此ほどは思ひのほかふる人をむかへまゐらせて。志ぐらともにうれしく思ひまゐらせ。ふにうたごへんかなも候はねに。かやうに仰せ候事。あら情ふやさて。天に仰ぎ地に俯して。ふげき給ふ事はかぎりふし。女房仰せけるは。かやうに永々しく居候はんづる事ふらば。いかふることをもかせぎ出だし候て。後のかたみにもみせまゐらせ。又すぎにしかたのことをも。御わすれ候やうにと思ひ候へども。われ〳〵がわざには此ぬのおり出だし候て。金錢三千貫にうりまゐらせ候ておき候事も。ことふるごとくおぼしめすまじく候。是にて一世を御すぎ候はんふり。是ひとへに志ぐらおやかう〳〵ふる志るしふり。ふんばうふだらくせかいの觀音のごやうごより。御つかひとしてまゐり候。今はふにをかつゝむべき。われはごうふんごう女身といふ。觀音に仕へ奉つるものふり。布貫にはせし所は。ふんばうふだらくせかいの觀音のごやごふり。これよりのちは七千年のよはひふり。これは七さくほうしゆの酒七はいのみ給ふゆゑふり。此のちはい

よ〳〵ふつきはんじゃうにて。ふつしん三ぼうの加護あるべし。かの酒まぬり候ときき。三人出でて志やくごり候ひしこそ。我々とかたをふらべたる人にて候。名をば志うもんじんとくごしや。一人はびしやもんどんとくごしや。一人はばらもんじんとくごしやと申すふり。これもひごへに親孝行の徳により。かくのごとくあはれみ給ふ事まぎれふし。さらばさいひて。志ぐらが宿をたち出でゝ門にていとまごひさせ給ふ事。志でうのわかれのごとくふり。ふごりをしやさて。南の空にあがらせ給ふかとみれば。白雲にのり給うて。あがらせ給うふり。こくうに音樂ひゞきて。いきやう四方にくんじ。花ふり。もろ〳〵の菩薩たちむかへにまゐらせ給ふ。さても志ぐらはあきれたゞずみけるが。何と思ふこもかされて逢ふべき事ふらねば。思ひきりつゝ親子わがやごへ歸りける。それよりして富貴繁昌しておやを心やすく養ひ給ふ。さて志ぐらはおのづから成佛とくだうのえんをうけ。佛の位とふり。七千年と申すに天にあがり給ふ。其時紫雲たゞびきて。いきやう四方にみち〳〵て花ふり。不老不死の風ふきて。音樂のごとひまもふく。廿五の菩薩。三十三のごう〻。廿八ぶしや三千佛みふいろめき。十六のてんごう。四天五大そん。みふ〳〵こくうにみち〳〵給ふ。是ひごへに。親孝行の志るしふり。後々ごてもこの見給うて。親孝行に候はゞかくのごとくにこそかえてけん。たう二世のねがひ。たちごころに叶ふべし。まづげんせにては。七ふん即滅し。さはりもふく。しやにん愛敬ありて。すゑはんじゃうふるべし。後の世にては。必佛果を得へき事疑ふし。偏におやかう〳〵にして。此さうしを人にも御よみきかせあるべし〳〵

小敦堂

子敦盛

備も敦盛の北の御方は。都にし山の傍に深く忍び給ひけるが。敦盛の討たれさせ給ひぬるこ聞しめし。夢かうつゝか。こはいかふることぞと伏し沈み泣き給ふ。世の常のことならねば。叫べど聲も出でざりけり。身に餘り悲しく思しめし。きぬ引(衣)きかつぎふしたまふ。いたはしや敦盛。源氏謀反を企てゝ。みづからはいかふらんあづま男に見馴れ給ひて。あつもりがことをば忘れこそ候はんずらめと。たはふれたまひけり。又御身はたぐふらぬ身ぞかし。男子にてあるふらば。これを記念にとゞめさせよとて。金づくりの太刀。女子にてあるふらば。十一面觀音をとゞめさせよとて。取出だし止め給ふ。かやうに色々あり。又何につけてもあはれさを。これにたとへんかたもふし。さて月日を送りたまふ程に。御産の紐をぞ解き給ふ。見ればいつくしき若君にてましますぞかし。さる程にいかふる所にもあづけたき。紀念に見ばやと思しめ

せども。平家の末をば。堅く探し出だし。十歳以後は首を切り。二歳三歳をば水に入れ。七歳八歳をばさし殺す。人のうへさへ悲しく思ひけるに。みづから此若君をさられ。憂き目を見んことも悲しきやと思しめして。袷にさし巻きて。えんたんづかの刀を添へて。ふく〳〵さがり松にぞ捨てたまふ。折節ほうねん上人。御弟子十餘人を引きつれて。賀茂の大明神へ御参りありけるが。さがり松にて幼き者の泣くこゑを聞しめして。立ちより御覧ずれば。いつくしき若君にてましますぞり。ほうねん上人御覧ずて。不思議や刀を添へ。きぬに巻きて捨てけるやうは。直人にてはあるべからず。いか様これは賀茂の大明神の。御利生ぞりと喜びて。拾ひ給ひ。御下向ありて乳母を添へ。いつきかしづき育て給ふ。さる程に成人ましまして學問人に優れ。一字を二字ご悟り給ふ。或る時熊谷入道。此小人を見申し。備も人多しとは申せども。一の谷の合戦に討たれさせ給ふ。あつもりに。此ちごすこしも違ひ給はぬ不思議さよとて。常に涙を流したまふ。さて此ちごのたまふ様。われはちゝ母も無き孤子にて有りけるを。上人とりあげさせ給ひて候と申されければ。近づく法師この事を咎めばやと思へども。今更命失ふに及ばずして。酖酌ぞけり。扨若君涙をふがし仰せけるは。世の小人にはちゝ母をもち給ふが。みづからばいかふらん。父はゝともにふかりけるぞとて泣き給ふが。上人の御前へまねられて。備もみづからはいかふらん。ちゝ母とてもふかりけるとて。伏し沈み泣き給ふ。上人ともに涙をふがし。むざんや汝は。父母といふ人もふし。みふし子にて有りしを。この愚僧がいま迄育でおきぬるぞ。かやうにいふことのはを。汝がちゝ母どもにもふべしとぞのたまひける。若君聞し召し。あらちゝ母こひしやと伏し沈み。湯水をさへ呑み給はず。煩はせ給ふ事。七日にぞ成り給ふ。上人仰せ有りけるは。もし面々の中に。あやしきことを見出だしたる人も有るかと。御尋ねありける。さる程に御うちの熊谷入道申すやう。六歳の年 説法の御時 年の齢はたちばかりの上臈の。容顔美麗に御わたり候が。十二ひとへに出で立ちたる御方の。此小人を召

して愛し侍りけるが。人目繁ければ。さらぬやうにもてなして歸らせ給ひけるを。見まゐらせてこそ候へと申しければ。上人聞しめし。さらば明日より說法をのぶへしとあり。必その中に此ちごの母とおぼしき人有るべしと思しめして。御說法をそのべ給ふ。其時しやうにんやがて涙を流し。御衣の袖をぬらし給ふ。やゝありてのたまふやう。此ふかの聽聞の人々聞しめせ。一とせ賀茂の大明神へまゐり候とき。さがり松にて幼き者を拾ひ。乳母を添へ育てゝ候が。七歲にまかり成り候が。此程何とやらんちゝ母をこひて。けふ七日が間物をも喰はず。湯水をさへのみ給はず。はや存命不定にて候。この聽聞の中に。行方を志ろしめされたる人や御入り候。幼き者にゆくへを知らせて給はらば。何かはくるしかるべき。明日にふり。六波羅へ聞え。平家の末ふれば。さて。ころし給ふとても苦しからず。行方を知らせて心やすくころして。たび給へと仰せもあへず。御ころもの袖をぬらしたまふ。見る人聞く人。共に涙を流し給ふふり。その時左の方より。十二ひとへに出でたちたる

女房の。參りたまふが。此人の御姿を見れば。青黛のまゆずみ。丹花の唇にほやかに。あやめの姿にて。太液の芙蓉のくれふね。湄陽の柳の絲。まゆずみ匂ひきて。はくゞゆつのはだへ。蘭麝のにほひ。容顏美麗にして。心もこゝろふらず。いつくしき女房の參り給ひて。此小人を見まゐらせ給ひて。そのまゝ膝の上にのせ。愛し給ふが。幼き人は。はや。目も塞かり消え入り給ふやうに見えければ。容顏美麗の女房も。流淨こがれ給ひけり。上人も椅子より轉び落ち。りうていこがれたまひけり。其時女房仰せける樣は。みづからをばいかゝるものとか思しめす。御はづかしふがら。大將の入道。信西の爲には孫のつぼねの妹。ふらのふいでんとはみづからが事ふり。敦盛は十三。みづから十の年より。便のふみを取りかはし。夫婦の中と成りしに。果ふくも。元暦元年一の谷のがせん（合戰）に討たれさせ給ひし時。みづからたゞふらずありしを。男子にて有るふらば。これを記念に取らせよとて。その刀をおかせたまふ。また女子にてあらばとて。十一面觀音を。くれふいのほろに包み給

ひて止めたまふ。かやうに色々あり。さてやう〳〵産の紐を解きしかば。見れば敦盛にすこしも違ひ給はぬ男子ふれば。いづくにも隠し置き。記念にみばやと思へども。平家の末をば。かたく探しとり出だし。をさふしきをば首を切り。幼ふきをば水に入れ。二たび物を思はする。歎きの中のよろこびふり。さる程に若君。母の名殘のこゑを聞しめし。佛神三寶の加護とおぼしくて。ふみがへり給ふかと。愛きにも涙。嬉しきにも涙。さきだつものはふみだふり。

さる程に。其後。若君人目を御包みあり。賀茂の太明神へ御まゐりありて。祈誓申しあるやうこそあはれふれ。願はくば父の敦盛に。今一度合はせたび給へと。肝膽をぞ碎き給ふ。滿ずる曉。年の齡八十ばかりの老僧。かせ杖にすがり。彼のちごの枕がみに立ち。仰せ有りけるは。あはれや汝。いまだ見ぬ父をかほどにおもひけるか。これより末津の國こやの生田と尋ねよとの御夢想ありけりさるほどに小人は起きあがり。斜ならず喜び。あくればやがて下向申す。足にまかせて行くほどに。都を出で、十餘日と申すには。津の國一の谷にぞつき給ふ。折ふし雨はふる。かみふり電繁ければ。心ぼそさは限ふし。磯うつ浪のこゑ。かれを聞きこれをみるに。いとゞつらきは恨ふし。それより行くすゑを見給へば。小さき堂あり。燈火かすかふり。いかふる天魔々焔の者の火か。または人もあらばとうれしくて行きて見給へば。うす化粧に眉つくりたる氣色にて。いかにも花やかに出で立ちたる人の。えんぎやうだうしておはしまふり。若君ほと〳〵こたゝき。物申さんとありければ。たゞやこの。人も住まぬ所に。物申さんといふはいかふる者ぞとありければ。小人泣く〳〵のたまふやう。これは都の者にて候が。父の行方を尋ねて。此十餘日と申すに。足にまかせて來り候が。雨はふる。闇きはくらし。行くべき方もふし。今宵一夜の御宿を。御かし候へとのたまふ。さて父はいかふる者ぞとのたまふ時。小人仰せけるは。父にて候人は。平家の一門修理の大夫。經盛の御子。無官の大夫敦盛と申す人ふり。一の谷のかせんに討たれさせ給ひ候を。みづから

戀しく思ひ申し。賀茂の大明神へまゐり。百日祈りければ。靈夢を蒙り。足にまかせて迷ひ申すふりこそのたまふ。敦盛聞しめして。やがて倒れふし泣き給ふ。やゝありて起きあがりて。泣く〳〵小人の手を執り引きよせて。めしたる物の雨に濡れたるを。脱ぎかへさせ給ひて。ほとゝぎす抱き附かせ給ふ。敦盛仰せ有りけるやうは。むざんや汝は。いまだ見ぬ父を。かほどに思ひけるこそあはれふれ。汝胎内にして七月と申すに。一の谷のかせんに出で。熊谷が手に掛り。十六の歳討たれて。此八年が間。多少の苦限申すばかりふし。まことに汝心ざしあらば。せんこんをして。敦盛が後世に得さすべしとぞのたまふ。其時若君。さては我が父にてましますかとて。斜ならず喜びてゝり附き給ふ。其後敦盛のたまふやう。我がことをかほどに思ひ給ふべからず。汝肝膽を碎き。祈り申す心ざしを。賀茂の大明神あはれに思しめして。閻魔王に仰せありて。刹那の暇をこひて。今汝に見せるぞ。かまへて今より後。わがことをかほどに思ふべからずとのたまふ。若君仰せけるは閻魔王に仰せありて。みづから御前に參るべし。父は是より都へ御登りありて。みづからが母に。今一たび見えさせ給へと申されければ。敦盛御涙を流しのたまふやう。あらむざんやな。生れてよりしてこの道は。さふさだに名殘惜しきふらひぞとて。髪掻き撫でゝ涙を流しの給ふやう。若君は。さてこれより都へはのぼるまゝきぞ。流涕こがれ給ひけり。敦盛思しめしけるは。心弱くて叶ふまゝ。ここに時うつりいかゞせんと思しめしけり。若君はいまだ習はぬ旅の疲勞に。敦盛の膝を枕として。すこしまどろみ給ふ。さる程に敦盛名殘の惜しさは恨ふしさは思へども。よき序と思しめして。心づよくふして。腰よりやたてを取り出だし。若君の左の袖に一首の歌を遊ばして。さて行きては歸り。歸りては行き。名殘をぞ惜しみ給ふ。さてあるべきにあらざれば。かき消すやうに失せにけり。やゝありて若君起きあがり給ひ。父にいだきつかんとし給へば。ありつる堂ふり。夜もやう〳〵明ければ。やもめ鳥もつげ渡る。こはいかふるぞ。ふしぎや。父の膝を枕として。臥したり

と思ひしが。五寸ばかりの膝の骨の。苔生したるを見つけて。さてはわが父の骨にて有るよと思しめして。天に仰ぎ地に伏して。流涕こがれ。いかふる事ぞとて悲しみ給ふ。たゞわれをも連れて死出の山。三途の川の御供申すべしとて。こゝろも惜しまず泣き給ふ。さて有るべきにあらざれば。爲ん方もなく力及ばず。父の膝の骨を首に掛けて。泣く〳〵涙を志るべに行き給ふ。さて左の袖より一首の歌を遊はしける

何ふげく。こやの生田の草枕露と消えにしわれなおもひそ

此歌を顔にあて。伏し沈み歎き給ふ。暫くありて蘇生し給ひけり。かくて有るべきにあらざればとて。御歌と膝の骨とを首に掛け。泣く〳〵都へぞのぼりける。さて御歌を母御前にまゐらせられ給へば。敦盛の日ごろ遊ばしたる御手ずり。わかれの時の御面影。今見るやうにおもはれて。二たび物を思はする。歎きの中の喜びふり。さにかくにいかにもふらばやと思しめすが。まて志ばしわが心。みづから空しくふるふらば。若君何とかふるべきぞ。またなほ憂き人の後世をも。たれか吊ふべきと思召し。思ひ返してとゞまりたまふ。さるほどに北の御方は。よく〳〵物を案じたまふに。いたづらに月日を送らんよりも。いかふる所にも堂を立て。敦盛の御あとを吊らばやと思しめし。都あたりに柴の庵を結び。わが身は二たび憂き世にかへることかたし。まことや此世にて。敦盛に逢ひ奉らん事は及びがたしと。流涕こがれ給へば。共に若君も天に仰ぎ地に伏して悲しみ給ふなり。北の御方思しめしけるは。釋迦ほとけの御教に。後世を願ひて極樂に參れば。同じ蓮に生るゝと說かせたまふとうけ給はる。是を菩提の種として。御身を引きかへて。花の袂を墨染の袖とふし。若君をば記念に見たくは思へども。見れば中々ものうきに。法然上人へ返さばやと思しめし。うきことにまた憂きことを思ひつゞけて。泣く〳〵こそわかれたまひけれ。かくて今はこやわが身ひとつに成り給ひ。いつまで物を思ふべき。いか成る淵瀬へも身を投げばやと思へども。柴の庵を結び。敦盛の菩提を吊ひ。

おん骨をさめ。水を手向け花を折り。おこふひすまして。終に往生を遂げ給ふ。い
よ〳〵是を見る人々。よく〳〵後生肝要ふるべきふり。

千代春

れん骨をさめ。水を手向け花を折り。むこふひすまして。終に往生を遂げ給ふ。い
よ〳〵是を見る人々。よく〳〵後生肝要ふるべきふり。

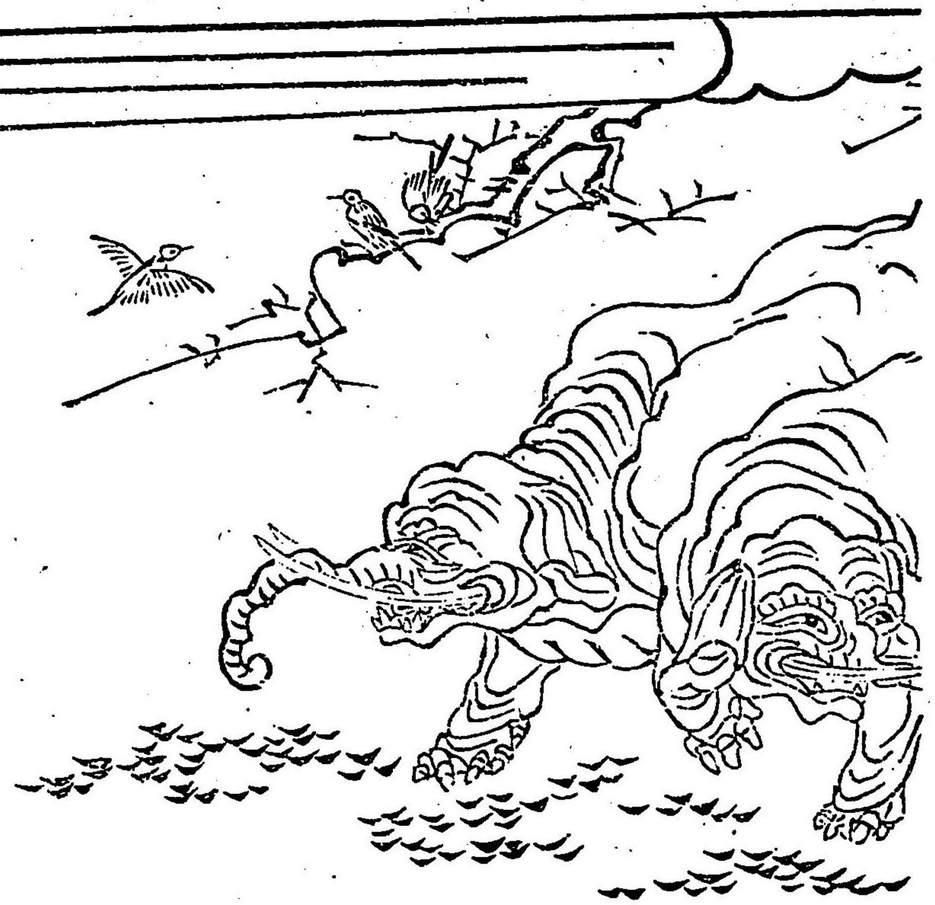
二十四孝

二十四孝

大舜

隊々耕レ春象　紛々耘レ草禽　嗣レ堯登二寶位一　孝感動二天心一

大舜は至つて孝行ふる人ふり。父の名は。瞽叟といへり。一だんかたくなにして。母はかだましき人ふり。弟はおほいに傲りて。いたづら人ふり。然れども大舜は。ひたすら孝行をいたせり。ある時暦山といふ所に。耕作をけるに。かれが孝行を感じて。大象が來つて。田をたがへし。又鳥飛び來つて田の草をくさぎり。耕作のたすけをふしたるふり。扨其時天下の御あるじをば。堯王と申し奉れり。ひめ君まします。姉をば嫁皇と申し。妹は女英と申し侍り。堯王すふはち舜の孝行ふることをきこしめし及ばれ。御娘を后にそふへ。終に天下をゆづり給へり。これひとへに孝行の深き心ふりおこれり



漢文帝

仁孝望天下　巍々冠百王　漢庭事賢母　湯藥必親嘗

漢の文帝は。漢の高祖の御子ぶり。いとけなき御名をば。恒とぞ申ち侍りし。母薄太后に孝行ぶり。よろづの食事を參らせらるゝ時は。まづみづからきこしめし試み給へり。きやうだいも數多ましましけれども。此帝ほど。仁義を行ひ孝行ぶるはふかりけり。此故に。陳平周勃ぶごいひける。臣下等。王にふし參らせけり。それより漢の文帝と申し侍りき。然に孝行の道は。上一人より下万民まで。あるべき事ぶりと志るといへども。身に行ひ。心に思ひ入ることはぶりがたきを。かたじけなくも。四百餘州の天子の御身として。かくのごとき御ことわざは。尊かりし御こゝろざしとぞ。さる程に。世もゆたかに民もやすくすみけりとぶり。

丁蘭

刻木爲父母　形容在日新　寄言諸子姪　聞早孝其親

丁蘭は。河内の野王といふ所の人ぶり。十五のとし母におくれ。永くわかれをかぶしみ。母のかたちを木像につくり。生る人につかふるごとくせり。丁蘭が妻。ある夜のことぶるに。火をもつて木像のおもてをこがしければ。かさのごとくにはれいで。うみ血ぶがれて。二日を過しぬれば。つまの頭の髮が。刀にて切りたる樣にぶりて落ちたる程に。驚きてわびごとをする間。丁蘭もきごくに思ひ。木像を大道へうつしおき。妻に三年わびごとをさせたれば。一夜の内に雨風の音して。木像はみづから内へ歸りたるぶり。それよりしてかりそのことをも。木像のけしきをうかゞひたりとぶり。かやうに不思議ぶる事のあるほどに。孝行をぶしたるは。たぐひすくぶき事ぶるべし。

孟宗　字恭武或は子恭

泪滴朔風寒　蕭々竹數竿　須臾春筍出　天意報平安

孟宗は。いとけなくして父におくれ。獨の母をやしぶへり。母年老いてつねに病み

いたはり。食の味もたびごとにかはりければ。よしなき物を望めり。冬のことなるに。竹子をほしくれもへり。すなはち孟宗 竹林に行き求むれども。雪ふかき折ふれば。ふどかたやすく得べき。ひとへに天道の。御あはれみをたのみ奉るとて。祈をかけて大きに悲しみ。竹によりそひける所に。俄に大地ひらけて。竹の子あまた生ひ出でけり。大によろこび。則とりてかへり。あつものにつくり。母にあたへければ。はゝ是を食して其まゝ病もいえて。齢をのべけり。是ひとへに。孝行のふかき心を感じて。天道より與へ給へり

閔子騫

閔氏有賢郎　何曾怨晩娘　尊前留母在　三子免風霜

びんしけん。いとけなくして母をうしなへり。父また妻をもとめて。二人の子をもてり。彼の妻。我子をふかく愛して。まゝ子を惡み。寒き冬もあしの穂を取りて。着る物に入れて著せ侍るあひだ。身も冷えて。堪へかねたるを見て。ちゝ。後の妻を去らんと云ければ。閔子騫がいふやうには。彼のつまを去りたらば。三たりの子寒かるべし。今われ一人寒きをこらへたらば。弟のふたりはあたゝかふべるしとて。父を諫めたるゆゑに。これを感じて繼母も。のちにはへだてなく愛しみ。もとのはゝとおなじくふれり。只人のよしあしは。みづからの心にありと。古人のいひ侍りけるも。ことわりとこそおもひ侍れ

曾參

母指纔方齧　兒心痛不禁　負薪歸來晩　骨肉至情深

曾參ある時。山中へ薪を取りに行き侍り。母留主にぬたりけるに。志たしき友來れり。これをもてなしたくおもへども。そう志んはうちにあらず。もとより家まゞしければかふはず。曾參がかへれかしとて。みづから指をかめり。曾參山に薪を拾ひぬたるが。俄に胸さわぎしけるほどに。急ぎ家にかへりたれば。はゝありすがたを曲に語り侍り。かくの如く指を齧みたるが。遠きにこたへたるは。ふだん孝行にして。親子のふ

とけふかき志るしふり。そうゞて曾參のことは。人にかはりて心と心のうへのことをいへり。おくぶかきことわりあるべし

王祥

繼母人間有　王祥天下無　至今河水上　一斤臥氷摸

王祥は。いとけふくして母をうしふへり。父また妻をもとむ。其名を朱氏といひ侍り。繼母のくせふれば。父子の中をあしくいひふして。惡ませ侍れども恐とせずして。繼母にもよく孝行をいたしけり。かやうの人ふる程に。本の母。冬の極めて寒き折ふし。ふま魚をほしく思ひける故に。肇府といふ所の河へ。もとめに行き侍り。されども冬の事ふれば。こほりとぢていをみえず。すふはち衣をぬぎてはだかにふり。こほりの上にふし。いを無きことを悲しみ居たれば。かの氷すこしとけて。いを二つをどり出でたり。則取りて歸り。母にあたへ侍り。是ひとへに孝行のゆゑに。その所には。毎年人の臥したるかたち。こほりのうへにありとふり

老萊子

戲舞學嬌癡　春風動綵衣　雙親開口笑　喜色滿庭園

ろうらいしは。二人のおやにつかへたる人ふり。されば老萊子七十にして。身にいつくしき衣を著て。幼きものゝかたちにふり。舞ひ戲れ。又おやの爲に給仕をすることて。わざとけつまづきてころび。いとけふきものゝふくやうにふきけり。この心は。七十にふりければ。年よりて。かたち美しからざるほどに。ここそこのかたちを。おやの見給はゞ。わが身の年よりたるを。悲しくおもひ給はんことを恐れ。また親のとしよりたること。おもはれざるやうにとの爲に。かやうのふるまひをふしたりとふり

姜詩

舍側甘泉出　一朝雙鯉魚　子能知事母　婦更孝於姑

きやうしは母に孝行ふる人ふり。母つねに江の水を飲みたくおもひ。またふまいをの鯉をほしくおもへり。すふはち姜詩妻をして。六七里の道をへだてたる。江の水

を汲ましめ。又いをの鮓をよく志たしめてあたへ。夫婦ともにつねによくつかへり。或時きやうしが家の傍に。忽に江のごとくして。水わきいで。あさごとに水中に鯉あり。すふはちこれをとりて母にあたへ侍り。かやうのふしぎふることのありけるは。ひとへに姜詩夫婦の孝行をかんじて。天道より與へたまふふるべし

唐夫人

孝敬崔家婦　乳姑晨盥梳　此恩無以報　願得子孫如

唐夫人は。志うとめ長孫夫人。さしたげ。よろづ食事。齒に叶はざれば。つねに乳をふくめ。あるひは朝ごとに髪をけづり。其外よく仕へて。數年やしふひ侍り。ある時長孫夫人わづらひつきて。このたび死ぬんと思ひ。一門一家を集めていふ事は。わが唐夫人の數年の恩を報せずして。今死ぬん事殘りおほし。わが子孫唐夫人の孝義をまねてあるならば。必ずあも繁昌すべしといひ侍り。かやうに志うとめに孝行ふるは。古今まれふりにて。人みふこれをほめたりと。されはやがて酬ありて。

すあ繁昌する事きはまりふくありたるふり

楊香

深山逢白額　努力轉精風　父子俱無恙　脫身纔甲中

楊香はひとりの父をもてり。ある時父と共に山中へゆきしに。忽あらき虎にあへり。楊香。父の命を失はんことを恐れて。虎を追ひ去らしめんとし侍りけれども。叶はざる程に。天の御あはれみをたのみ。こひねがはくば。わが命を虎にあたへ。父を助けて給へと。心ざし深くして。祈りければ。さすがに天も哀とおもひ給ひけるにや。今までだけきかたちにて。執りくらはんとせしに。虎俄に尾をすべてにげ退きければ。父子ともに虎口の難をまぬがれ。つゝがふく家に歸り侍りとふり。これひとへに孝行の心ざしふかきゆゑに。かやうの奇特をあらはせるふるべし

董永

葬父貸方香　天姫泊上迎　織絹償債生　孝感盡知名

董永は。いとけなき時に母にはなれ。家まづしくして。常に人にやとはれ。農作をし。賃をとりて日を送りたり。父さて足もたざれば。小車を作り。父を乗せて。田のあぜにおいて養ひたり。ある時父におくれ。葬禮をとゝのへたく思ひ侍れども。もとよりまづしければ叶はず。されば料足十貫に身をうり。葬禮を營み侍り。偖かの錢主の許へ行きけるが。道にて一人の美女にあへり。かの董永が妻にふるべしとて。ともに行きて。一月にかとりの絹。三百疋織りて主のかたへ返したれば。主もこれを感じて。董永が身をゆるしたり。其後婦人董永にいふ様は。我は天上の織女ふるが汝が孝をかんじて。我を降して瓦債をつぐなはせたるなりとて。天へぞあがりける

黄香

冬月温レ衾煖　夏天扇レ枕涼　児童知二子職一　千古一黄香

黄香は。安陵といふ所の人なり。九歳の時母におくれ。父に能く仕へて力を盡せり。されば夏の極めて暑き折には。枕や座を扇いですゞしめて。また冬の至つて寒き時には。ふすまのつめたきことをかなしんで。わが身をもつて暖めてあたへたり。かやうに孝行なりとて。太守劉灌といひし人。ふだをたてゝ。彼が孝行をほめたるほどに。それよりして人みな黄香こそ。孝行第一の人なれと知りたりとなり。

王褒

慈母怕レ聞レ雷　氷魂宿二夜臺一　阿香時一震　到レ墓遶千廻

王褒は營院といふ所の人なり。父の王義。不慮の事によりて。帝王より法度にておこなはれ。死にけるを恨みて。一期のあひだその方へは向うて。座せざりしなり。父の墓所にゐて。ひざまづき禮拜して。柏の木に取り付きて泣きかなしむ程に。涙かゝりて木も枯れたりとなり。母は平生かみなりをおそれたる人なりければ。母むなしくなれる後にも。雷電の志ける折には。急ぎ母の墓所へゆき。王褒これにありとて。墓をめぐり。志にたる母に力を添へたり。かやうに死にて後まで。孝行をなしけるを以て。いける時の孝行までおしはかられて。有りがたき事どもなり

郭巨

貧乏思供給　埋児願母存　黄金天所賜　光頼照寒門

郭巨は。河内といふ所の人ぶり。家貧うして母を養へり。妻一子を生みて。三歳にぶれり。郭巨が老母。彼の孫をいつくしみ。わが食事を分け與へけり。或時。郭巨まさに語る樣は。貧しければ。母の食事だに心に不足と思へるに。其内を分けて孫に賜へば乏しかるべし。是偏にわが子の有る故ぶり。所詮汝と夫婦たらば子は一度有るべし。母は二度有るべからず。とかく此子を埋みて母を能く養ひたく思ふぶりと云ひければ。妻もさすがに悲しく思へども。夫の命に違はず。彼の三歳ぶる兒を引きつれて。埋みに行き侍る。則郭巨涙を押へて。すこし堀りたれば。黄金のかまを堀り出だせり。其釜にふしぎの文字すわれり。其文に曰く。天賜孝子郭巨不得奪民不得取と云々。此心は。天道より郭巨に給ふ程に。余人取るべからずとぶり。則其釜をうて喜び。兒をも埋まず。ともに歸り。母に彌孝行をつくせりとぶり

朱壽昌

七歳生離母　參商五十年　一朝相見面　喜氣動皇天

朱壽昌は。七歳の時。父その母を去りけり。されば母をよく知らざりければ。此ことを歎き侍れども。つひに逢はざること五十年に及べり。ある時壽昌官人ぶりといへども。官錄をもすて。妻子をもすてゝ。秦といふ所へ尋ねに行き。母にあはせて給へとて。みづから身より血を出だして。經をかきて天道へ祈りをかけて尋ねたれば。こゝろざしの深きゆゑに。つひにたづねあへりとぶり

剡子

老親思鹿乳　身掛褐毛衣　若不高聲語　山中帯矢飯

剡子は親のために。命を捨てんと志ける程の。孝行ぶる人ぶり。其故は。父母老いて共に兩眼を煩ひし程に。眼の藥ぶりとて。鹿の乳を望めり。剡子もとより孝

ふる者ふれば。おやの望をかふへたく思ひ。すふはち鹿の皮を著て。數多むらがりたる鹿の中へまぎれ入り待れば。獵人これをみて。實の鹿ぞと心得て。弓にて射んとたけり。其時刻子是は實の鹿にはあらず。刻子といふ者ふるが。親の望をかふへたく思ひ。偽りて鹿の形とふれりと。聲をあげていひければ。獵人驚きて其故を問へば。ありすがたを語る。されば。孝行の志深き故に。矢をのがれて返りたり。狩人として鹿の乳を求ればとて。いかでか得さすべき。されども思ひ入りたる孝行の。おもひやられてあはれふり

蔡順

黒椹奉二親闇一　啼レ飢淚滿レ衣　赤眉知二孝順一　午米贈レ君歸

蔡順は汝南といふ所の人ふり。王莽といひし人の時分の末に。天下大に亂れ。又飢饉して。食事に乏しければ。母のために。桑の實を拾ひけるが。熟したると熟せざるとを分けたり。このとき世の亂により。人を殺し。剝き取りふとする者ども

來りて。蔡順に問ふ樣は。ふにとてふた色に拾ひ分けたるぞといひければ。蔡順ひとりの母をもてるが。此熟たたるは母にあたへ。いまだ熟せざるは。我がためふりと語りければ。心づよき不道の者ふれども。かれが孝を感じて。米二斗と。牛の足一つとをあたへて去りけり。その米とうしのもつとを。母にあたへ。またみづからも常に食すれども。一期の間盡きずしてありたりとふり。これ孝行の志るしふり

庾黔婁

到レ縣未二旬日一　椿庭搆二病深一　願持レ身代レ死　北望啓二憂心一

庾黔婁は。南亭の時の人ふり。孱陵といふ所の官人にふりて。すふはち孱陵縣へ至りけるが。いまだ十日にもふらざるに。忽にむふさわぎ志けるほどに。ちゝの病み給ふかとおもひ。官を捨てゝ歸りければ。案の如く大にやめり。黔婁。醫師によしあしを問ひければ。醫師病者の糞をふめてみるに。甘く苦からばよかるべしとかたりければ。黔婁やすき事ふりとて。嘗めてみければ。味よからざりける程に。死ふんこと

を悲しみ。北斗の星に祈をかけて。身がはりにたゝんことをいのりたりことふり

吳猛

夏夜無二帷帳一、蚊多不二敢揮一、恣二梁膏血一飽、免レ使レ入二親闈一

吳猛は。八歳にして孝ある人ふり。家まづしくして。よろづ心に足らざりけり。されば。夏にふりけれども。帷帳もふし。吳猛みづから思へり。わがこゝろもなぐさて親に著せ。わが身はあらはにして蚊に喰はせたらば。蚊もわが身を喰ひ親をたすけんとおもひ。すふはちいつも。ふもすがら裸体にふり。わが身を蚊にくはせて。親のかたへ。蚊の行かぬやうにして仕へたりことふり。いとけふきものゝかやうの孝行は。ふしぎふりしことゝもふり

張孝　張禮

偶値二綠林兒一、代レ烹云一瘦肥一、人皆有二兄弟一、張氏古今稀

張孝張禮は兄弟ふり。世間饑饉の時に。八十餘の母を養へり。木實を拾ひに行きたれば。一人の民つかれたる者來つて。張禮を殺して喰はんと云ふ。張禮云ふ様は。われ老いたる母をもてり。けふはいまだ食事を參らせざりつる程に。すこしの暇を賜はれ。母に食物を參らせて。やがて參らん。もし此約束をたがへば。家に來て。一族までを殺し給へと立ちて歸り。さて母に食事を進めて。約束の如くに。彼の者の所へ至りけり。兄の張孝是を聞きて。又跡より行きて。盜人にいふ様は。我は張禮より肥えたる程に。食するによかるべし。我を殺して。張禮を扶けよと云ふ。又張禮は。我はじめよりの約束ふりとて。死を爭ひければ。彼の無道ふる者も。兄弟の孝義を感じて。共に死を免し。かやうの兄弟古今稀ふりとて。米二石。鹽一駄とをあたへたり。是を取りて歸り。いよ〳〵孝道をふせりことふり

田眞　田廣　田慶

海庭紫珊瑚　群方總不レ知　春風花滿レ樹　兄弟復同レ后

此三人はきやうだいふり。親におくれてのち。親の財寶を三つにわけてこれるが。

庭前に紫荆樹にて。枝葉榮え花も咲き亂れたる木一本あり。これをも三つにわけて取るべしとて。終夜三人詮義しけるが。夜の旣に明けゝれば。木を切らんとて。木のもとへ至りければ。昨日まで榮えたるが。俄に枯れたり。田真これを見て。草木ごゝろありて。きりわかたんといへるを聞いて枯れたり。まことに人として。これをわきまへざるべしやとて。わかたずしておきたれば。またふたゝびもとの如く榮えたりとぶり

山谷

貴顯聞二天下一平生孝事レ親 汲二泉涓一瀋レ器 婢妾豈無レ人

山谷は。宋の代の詩人ぶり。今にいたりて。詩人の祖師といはるゝ人ぶり。あまたつかひ人もあり。また妻も有れども。みづから。母の大小便のうつはものをとり扱ひて。けがれだるときは。手づからこれを洗ひて母にあたへ。朝夕よく仕へて。怠る事ふし。さらば一を以て。万を知るふれば。其外の孝行推しはかられたりとて。此人の孝義。天下にあらはれたりとぶり。この山谷のことは。世の人にかはりて。名の高き人ぶり

陸績 字公記

孝悌皆天性 人間六歲兒 袖中懷二綠橘一 送レ母報二合餡一

陸績。六歲の時。袁術といふ人の所へ行き侍り。袁術 陸績がために。菓子に橘を出だせり。陸績これを三つ取りて。袖に入れて歸るとて。袁術に禮をいたすとて。袂より落せり。袁術これを見て。陸績どのは。幼き人に似あはぬことゝ。いひ侍りけるが。あまりに見ごとふるほどに。家にかへり。母にあたへん爲めぶりと申し侍り。袁術これを聞きて。幼き心にて。かやうのこゝろづけ。古今 希ぶりと。ほめたりとぶり。さてこそ天下の人。かれが孝行ふることを知りたれとぶり

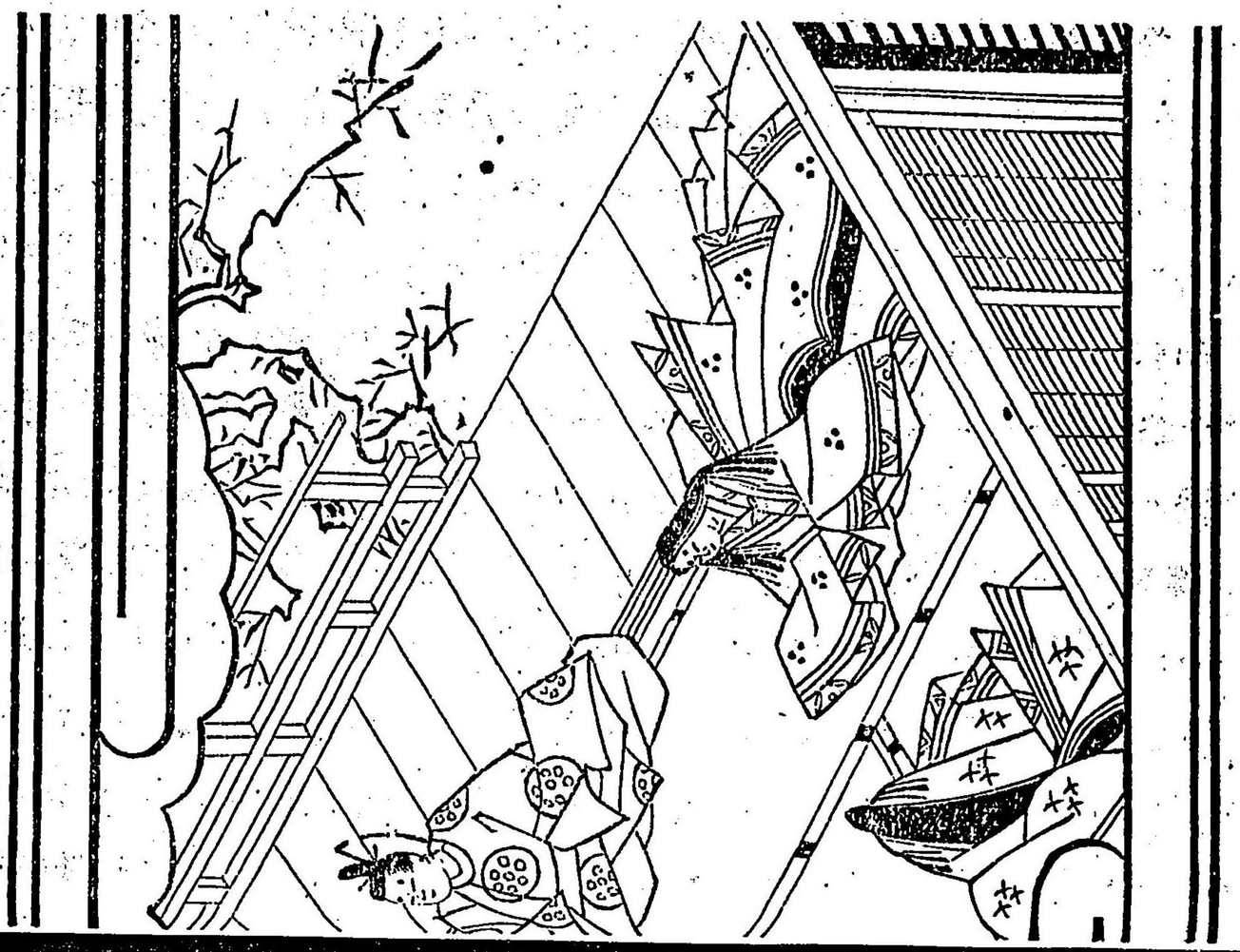
梵王國

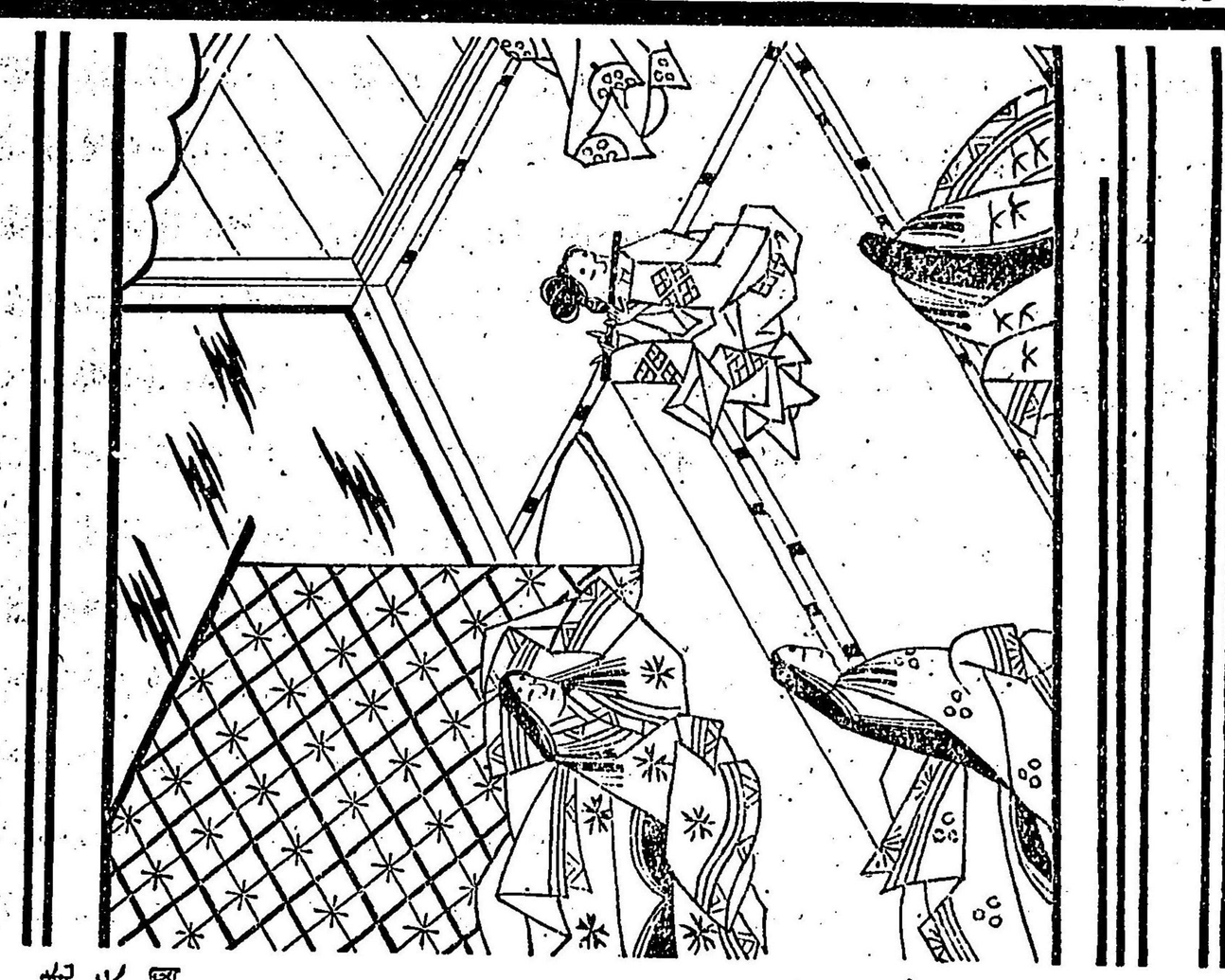
梵天國

淳和天皇の御代に。五條の右大臣たかうぢとて。おはしけるが。容顔美麗に。才覺いみじきのみならず。四方に四万の藏をたて。とぼしき事ましまさず。年月を送り給へども。一人の孝子を持ち給はで。明くれ歎き給ふ。或時つくづくと案じ思しめしけるは。われさきの世に。何ふる罪をつくりてか。一人の子をもたぬ。七十八十のよはひをたもつとも。つひに止まらるべきにあらず。亡からん跡をたれかとふべき。むかしより今に至るまで。かみ佛に申すこと叶へばこそ。萬の人も申すらめと。夫婦諸共に。清水に參り。五體を地に投げ。三千三百卅三度のらいはいを參らせて。願はくは。一人の孝子を與へ給へと。種々の願を立て給ひけるこぐわん。成就せば。八花形の御ちやうだいを。こがね志ろがねにて。三十三枚づ。月ごとにかけて參らすべし。又毎日滿堂を。三年照して。百人の僧にて。法花

三昧の不斷經を。三年讀ませて參らすべし。こんでいの觀音經。三千三百三番（金泥）書かせて參らすべしと。祈られける程に。七日と申す曉。いと氣高き御こゑにて。こぶたへと召されけるが。寶殿ふる所に。かうのころもに。同じ袈裟かけて。いとかうばしき高僧おはします。彼のしやうめう。うしろのはうちやうのまる。三万六千のやかを並べけるも。思ひ知られて。いとたつとくて。いづくに立ち寄るべきこもおぼえず。高僧重ねて。それへ〳〵と召されければ。御前に畏まり給へば。いかに汝が申す所の。きやうしふるべしとて。みがける玉を取り出だし。すふはち大臣の。左の袖に移させ給ふと御覽じて。夢さめぬ。其後下向ありて。程ふく北の御方。懷妊有り。若君一人生み給ひ。やがて玉若殿とて喜び給ふ。日に增して成人ぶ給ふにつけて。光るやうにぞおはしける。父の大臣。一時も御身をはふさずかしづき給ふ。二歳と申す時。內裏へ參內有りけるにも。具足し給ふ。天皇聞しめして。いまだ例も無きことかな。七歳の童。てんでやうと申す事はあれども。二歳のてんでやう

は珍しき事ぶり。たかふぢが子のことふれば。四位の待從にぶし給ひて。くぎやうの座へぞ召されける。しやうでんのはじめに。出るしふくではいかゞとて。丹後但馬兩國を給はりける。大臣斜ふらず。御喜びありて。いよ〳〵いつきかしづき給ひける程に。やう〳〵七歳にもふり給へば。ことにすぐれて笛をぞ吹き給ひける。さる程に。北の御方は。無常の風にさそはれて。あしたの露と消え給ふ。大臣殿は。此若君にのみ慰みて。明し暮し給ひけるに。十三と申す春の頃。大臣殿も空しくふり給ふ。待從の御歎き申すばかりもふかりけり。父の御けうやうには。笛を吹き。梵天帝釋までも。おもしろく。ごうがうたいのうへに手向け給ひける。七日と申す午の時ばかりに。紫の雲一村あまくだりけるをみれば。天女と童子十六人。玉のかぶり。こがねのこしをかたぶけて。やさしきくわんにん一人天くだり。待從に向ひ御涙を流して。汝七日の間吹き給ふ笛。則梵天國へ通じ。孝行の心ざし二つともふかきなり。上品上生。下界の。りうじんまでも。納受出たまふぶり。我一人





の姫をもてり。來十八日に床を清め。形を忌つめて待ち給へ。姫を御身に參せん。われこそ梵てん王にて侍れとて。紫の雲たち上りぬ。待從は夢ども。現ともわきまへず。床ふりおり給ひて。御經を讀誦志給ひて父母の御菩提の爲と回向したまふ。さるほどに約束の日にもふりしかば。まことしからぬことふれども。床を清め。香を焚き。形をいつめて笛を吹き給ふ。十八日の月漸々澄み昇り。千里万里にあきらかふり。いと芳しき風吹きて。花ふり。いきやう薫ずるうちよりも。十六人の童子。玉のかぶりを戴きて。こがねの輿をさしよせ。十四五ばかりの姫君。額には天冠をあて。身には玉のやうらくを垂れ。こがねのひつかうを穿き。くれふぬの袴ふみくゝみ。すべてあだふる言の葉あでは。ありぬべしとも覺えず。待從こふたへこのたまへば。經の前に錦の褥の上に居給へり。互に見えつ見えられつ。鴛鴦比翼のかたらひも。淺からずこそ聞えける。かゝるめでたき折ふしに。みかど此よしきこしめし。我十善の位を受け。一天四海を。たゞこゝろにまかすといへども。梵天王の壻にはふらぬこと。御歎きあり。或時待從は中將にふり給ふ。中將急きまゐれとて召されけるが。天皇よりの宣旨には。汝が夫妻七日内裏へまゐらせよ。それが叶はずば。かれうびんこと。孔雀の鳥をめしよせて。七日内裏にてまはせてみせよ。まるが心をふぐさめん。それにも叶はずば。日本國には。叶ふまゝとの宣旨ふり。うけたまはると申し。急ぎやかたへ歸られける。姫君を近づけ。此由かくこと語らせ給へば。それこそみづからが父の。内裏にいか程も候ぞ。よびよせて舞はせ候はんとて。南おもてに出でゝかれうびんの御こゝろにて。梵天國の鳥をそめされける。刹那が間に參りける。姫君斜に思召し。中將殿に奉れば。みかどへつれて參内有り。みかど叡覽ましく〳〵て。ことのたとへにこそ。かれうびんのこゝろは申しつたへたれ。おもしろくさへづりて。ふたつの鳥が。入り亂れて舞ふ程に。ものによく〳〵たとふれば。かの極樂の七寶淨土の御池そこ。煩惱の眠りをさまし。おの〳〵感涙を流して御覽じける

かくて七日も過ぎければ。かき消すやうに失せにける。漸く廿日も過ぎたるに。中將殿を召されて。鬼が娘の十郎姫をよびよせて。七日内裏へ參らせよ。それが叶はぬ物ならば。汝が夫妻を召さるべしとの宣旨ふり。うけ給はつて歸られける。面目無きことにて候へども。かゝる次第と申されける。姫君うち笑ひ。それこそやすき事ふれ。わらはが父の召し仕ふ。はしたの物にて候へば。みづから召し候はんに。參らぬ事はあらじとて。南面へ立ち出で。十郎姫とて召されける。刹那が程に參りたり。葦原こくの御門。あまりに御心敏ごうにて。十郎姫が姿が。見たきよし宣旨ふり。急ぎ内裏へ參り。七日あそび參らせよ。七日も過ぎば。御暇申せとのたまひて。中將殿に奉れば。連れて參内まし〳〵ける。みかど叡覽まし〳〵て。公家大臣集まりて。十郎姫を見給へば。いづくにて。著かへたるとは みえねども。七日の間。七度衣裳を著かへ。色々の御遊ども。心ことの葉も及ばれず。一つも洩したるこゝろかりけり。七日も過ぎければ。かき消すやうに失せにけり。天皇御心に思しめしけるは。たゞこゝにこそ聞きつるに。十郎姫を始めて見る。彼をはしたのものに仕ふふる。梵天王の姫君は。さこそこゝこそ思しめし。いよ〳〵戀しく思はれ。叶はぬ事をいひかけて。震旦鬼海へも。中將を流罪して。姫君をこらんとこそ思し召しけれ。さて中將を召して。鬼が娘の十郎姫を見たれば。猶々戀しく覺もるふり。思ふが中をさくるふる。あまのふる雷をよびくだして。七日内裏へ參らせて。鳴らせて見せよ。まるが戀の心を慰さまんとの宣旨ふり。中將殿長まつて候とて。わが御所へ歸り給ひ。叶ひがたき事ふれば。さうふく姫君にものたまはず。姫君立ち寄りて。又何事か宣旨ぞ。みづからに仰せられ候へとのたまへば。ありのまゝに仰せける。それこそいとやすく候はめ。天のふる雷と葦原國には申せども。梵天國のうふしの。下つかひにて候ふり。やすき程の事とて緣に立ち出で。扇ほと〳〵と打ちふらし。ふんだ龍王。はつふんだ龍王。おかつら龍王。おやきつ龍王。ごくしやか龍王。あふはたつ龍王。まふし龍王。うはつら龍王。八龍王達とぞ召されける。いづくより

ことはみえねども。傘ほどの黒雲。愛宕の嶽に飛び來り。姫君の御前に舞ひさがる。いかに龍王たち聞き給へ。葦原國のみかど。あまりに御心さうにて。ふる神内裏へ參らせて。七日鳴らせよこの宣旨ふり。急ぎ内裏へ參り。七日鳴りて御目にかけよこと。實にうらめしげにそのたまひける。八龍王。各御暇申す。すふはち雨かせさふりて。内裏の御殿に飛びうつりけり。中將殿も參り給ひぬ。姫君かぶり取りいだし。これをめされよ。中將どの。さして神ふらば。みふのこもぬけ。稲びかりまふこを取るべしとて奉り給ひける。さる程に。はじめはかみふり。一つ二つ鳴りまはる。それだに膳を消しつるに。四つ五つどもふりしかば。傘ほどの光もの。一つふたつこそ飛びちがひ。のちは一二千こそひかりけれ

雷いふづまのみふらず。國土の岸をうがちける事。にがにがしく。をんふ童部。若きくぎやう殿上。でんじやう人は。わうすねをはき。たふれ伏し。半死半生の人數を忘らず。天皇ばかりこそ。いんせん汗の如く。七日をばまつべしと。御心に思しめせども。

みふのこもぬけ。御心もまどひて。すべて忘んさふやましく。御命も危ふく。御衣をかつぎて。ふし給ひける。中將殿の耳には。更に聞えずして。大事もふし。さのみわうじをふやまし奉るべきふられば。龍王たち。鎮まり給へと。中將どののたまへば。すふはちかみふり鎮まりけり。さる程に黒雲消え。絲の雲にふりけり。中將殿も。わが御所へ歸り給ひて。其後中納言に成り給ふ。かくて五十日ばかりありて。内裏へ中納言をめして。かれうびん孔雀。鬼が娘の十郎姫。雷電にいたるまで。たゞ事とも覺えず。ありがたきまるが宣旨にそたがふ事。神妙ふり。然りといへども。梵天王の。自記の御判をさりてたべとぞ宣旨ふる。かしこまつて候とて。御所へ歸り。姫君にぞ申させ給ひける。姫君聞き給ひて。涙を流して。誠に是はたやすからぬことふり。みづから葦原國に契り有るによつて。そばし人間にて候間。又ぼんでんへ上らん事。たやすからず。又中納言殿。はるゝの道ふれば。梵天國へおはしませんほどの。わかれいかゞ有るべきとて。伏し沈み泣き給ふ。中納言聞し召し。御身内裏

へ參り給はずば。震旦百濟に流されて。一たびは失せぬべし。たゞ內裏へまゐらせ給へと。泣く〳〵のたまへば。姫君。それ日本葦原をば。ぬす人國と申して。人の心が人間にあらず。梵天國のふらひにて。人に契を結び。又と契叶はず。ふさけふくも。かゝる仰せを承るこそむろかふれ。虎ふす野邊。火の中。水の底までも。むくれ奉るまゝきふり。さりふがら。みづからが申さんやうにおはしませ。今日より七日。精進に身を清め。七度のこりをかき給へ。其後愛宕山の嶽にあがりて。御覽せよ。乾の方へほそ道あり。七里ばかり行きて。大木一本あるべし。その木の本に。馬三疋有るべし。中にも。やせたる馬を率きておはしませと。仰せければ。中納言教の如く行きて見給へば。實にも六つの道あり。いぬゐの道を。七里程歩みゆきて。大木あり。葦毛の馬。月毛の馬。かげのうま。三疋あり。あしげ馬のやせたるを率きて歸り。姫君に此よし仰せければ。秣ふくてはいかゞすべきとのたまへば。中納言。いかふる草の入り候ぞと宣へば。こがね三千兩入るべしと申させ給へば。やすき程の事と

て。北の倉ふる。色々よき金。三千兩とり出だし。大豆三石三斗にさせて。此馬に飼はせ給ひける。喰ひはてゝ。水のみて。三度身ぶるひして立ちければ。志まの如くにふりにけり。此馬。明日の卯の刻に。東向にひき立てゝめさるべし。志ばし有りて此うま身ぶるひして。あしがきせば。兩眼を強く塞き給へ。あふかしこ。道にて御めをばし開き給ふふ。此馬取りつきて。身ぶるひせん時。御めを開てき御覽せよと。こまぐ〳〵と仰せければ。教の如く。兩眼をつよく塞ぎて鞭を志とゝあてられけるとき。馬は虛空へあがりける

やゝありて。ろくぐちさこれぼしき所にて。身ぶるひを三度志たりける時。兩眼を開きて御覽ずれば。滿々たる砂の地にぞ著き給ふ。此馬三度いばえて。人ふらば。暇を乞ふと思しくて。虛空に行きぬ。さて何とふく。細みちを志るべに。たゞり〳〵とあゆみ給ふ程に。人に逢ひて。此國をばいづくと申すぞとゝひ給へば。梵天國とそうたへける。さてぼんてんこくの內裏はいづくにて候ぞと問ひ給へば。是ふるみち

を南へ行きて御覽せよ。すふはち内裏ふるべしと答へける。嬉しく思しめして。行き給ふ程に。野にてもふく。山にてもふく。滿々平々として。又さともふく。限ほこりもふし。次第々々にいさごの色を見れば。皆こがねの如くふり。ところがねの門をたて。こがねの門をたて。見れば金のいさご。一町ばかり敷きみてり。その内に。きりの柱瑪瑙の石。七寶しやうごんのすべて。極樂世界を音に聞きしに違はず。歩み入りて御覽ずれば。玉のきざはし。玉の床。玉のうてな。玉のすだれあり。やうやうありて。三十ばかりふる天女。やうらくを垂れて來り。南へ指をさし給ひける程に。扨は參れと御をしへありと思し召して。南へめぐり御覽ずれば。日本の内裏。紫宸殿いでんとおぼしくて。きりの柱。二三本立てたる御殿あり。玉のゆか。數を知らずありけるが其むかひふる座敷の中に。中納言居給ひけり。又廿四五ばかりふる天女。金の折敷に瑠璃の盃をすゑて來り。又三十ばかりの天女。金の瓶子。ところがねの銚子を持ちて出で。うちおきて何ども物をもいはで歸りける

中納言心に思はれけるは。ぼんでんのふらひに。かゝるくひ物さけ。更に呑めども醉はざるふり。欲しき程は呑むと聞く物を。呑まばやと思ひのむふり。折敷に入りたる物を。嘗めて御覽ずるに。芳ばしく甘き物ふり。扨又後に。二十四五ばかりの天女瑠璃のごきに。ふかさ一尺有るよねの白く美くしき。飯を備へて來りたり。御前におきぬ。中納言まゐらんとする所に。傍ふる間を御覽ずれば。骸骨のやうふる物あり。人にもあらず。また鬼にもあらず。かれの鎖にて。八方へつふがれて居たり。彼の飯を見て。あら羨ましあれ一口給はり候へかし。わがごきもつにうゑて。既に存命極まりぬ。ところばしが程の命を。助かり候はんと歎きけり。中納言。もとより大慈悲ふかき人ふれば。すふはち日本にて。こが有る者を。牢に入れたるがごとし。さこそごきにかつえて。悲しかるらんと憐みて。汝舌をさし出だせこの給へば。斜ふらず喜びて。鎖をゆすり。舌を出だしたるを御覽ずれば。長さ一尺ばかりふり。あふ恐ろしや。この者のありさま。せいにも似ずして。舌の大きさよ。いかさまたゞ者ふ

らじと。身の毛もよだちて。此はんをすくひ投げ給へば。立所にて。忽。八方の鎖を皆々引き切り。くろがねの格子を蹈み破り。殘りのほんをも攫んで打ち喰ひ。さしも玉の如くふる。内裏をふみやぶり。おほ風おほ雨をふらせて。こくうをさして飛び出でにけり。有りつる天女。あはてゝ來り。あふあさましや。さても果報少き御事と。恨めしげに云ひすてゝ歸りけり。

中納言むね打ちさわぎ。居たまへる所に。梵天王玉のかぶりをめされ。威光たゞしくて出で給ふ。玉の御座にぞおはします。汝これまで來ること。姫と一所に有るうへは。返すゞも嬉しけれど。爰に一つのせうしあり。唯今のこんしやこそ。らせつ國のはくもん王といふ者ぞ。姫が七歳の年よりも奪ひとりて。一の后にそふへんと。窺ふよしを聞きて。四天王をかたらひ。天地を逃ぐるを追ひつめ。戒め置く。此國のぶらひにて。千日をすごして八裂にして捨つるぞ。さても只今供へつるはんは。たゞ世のつねの飯にてはふし。是より南。七寶淨土の池のほとりに。作りたるよれふり。是を一粒服すれば。千人のちからつき。千年の齡をたもつぞ。大事の客人とおもひて。參らせてあるにうたてさよ。姫はは。はくもんわうが奪ひとり。らせつ國へ行きつらん。此米をぶくしたるによつて。神力を得て。鎖をもふみ切りたるぞとて。かたゞけふくも。大王御涙を流し給ふぞ。中納言肝たましひも身に添はず。とりあへず涙をおさへ。姫君の御ことを聞く。それはさる御ことにて候へども。御自筆の御判を賜はりて。天下に名をとゞめ。其のちこもかくも。罷りぞるべしと申させ給ひければ。きんさつに御判を遊ばし。中納言にたびたり。其後たれかある。草原國へ送り奉れとのたまへば。中納言おらぬ國とはおもへども。姫君の父の御許さおもへば。名殘惜しさは限ふし。遙々日本へ歸りても。姫君のおはしまさばこそ。賴みもあれと。涙に咽び給ひけり。梵天王もいとあはれにおぼしめして。さりとも姫も。そのいんおんふかるべきと。慰め仰せられける。くはんにん官人あまた門前まで送り奉り。はゞめの駒とまではありとも覺えざりけるが。まゐりて嘶えける。猶やくするは賴

もしくて。うち乘りたまふ。やゝありて。ろくちに駒はさびつきぬ。御目をひらき御覽ずれば。花の都。五條のやかたにきつ給ふ。すぐに內裏へ參內あり。梵天わうの目筆の判をまゐらせければ。不思議さよさて。ふいしやうれうのくらゐにをさめられけり。さて中納言わが御所へ歸り。御覽ずれば。たゞ其まゝにて。もしや中納言ふり來り給ふとて。女房たちはしりまはる。はゝもん王が入りたるあさも。さふがら女房たち。御乳母。中納言を見つけて。彌悲しくして。伏し沈みてぞふき給ふ。姫君のおはしましたる御座に。いまだ御枕も。ふるき衾もさふがらあり。夢かうつゝか。夢ふらば。さめてのけと。ふし沈みぞ給ひけり。ころは八月ふかはのころふれば。いつしか庭の落葉もそよめきて。松ふく風も閨寒く聞えつゝ。さらぬだに。あきはいかふる色。されば申しつたへたる。かふしさに。わが身ひとりのたぐひぞと。涙の露も所せくまで。うくばかりふり。よふ〳〵もまどろみ給ふ事ふければ。夢にだにもみたまはず。さる程に篠のをざゝの一ふしも。あくるかとおぼしくて。やもめがらすのうかれごゑ。森をはふるふけしきにて。ほの〴〵とみえければ。御もとゆひ切り給ひて。清水へぞ參られける。さもいとけふさ時よりも。月ごとに。七日のあさゆみをはこび奉りつる御利生に。今一度今生にて。姫にあはせてたび給へ。迚もの對面叶はずば。命をめして。後生の緣ごふしてたべと。涙と共に祈られけり。曉がたのことふるに。八十ばかりの老僧の。中納言の枕に立ち給ひて。汝姫君の行くへ聞きたく思はゞ。是より修行をして。筑紫の博多へ行き。便船こうて。千日と申すには。必。聞え候べしとあり。夢ともうつゝともたぼえず。則くわんおんの御つげぞと思ひ。すぐにつくしへ行くたうせんぶねにびんせんして。蒼海萬里の波路を經て。いづくをはかりともふくおもひ給ふ。御心のうちこそあはれふれ。此土を離れて。十三日と申すに。大かぜ吹きて波あらく。光もの飛びわたり。二十四艘の舟の帆あゆの綱も。吹き切りて。ちり〳〵にふりけれども。中納言のめされたる船をば。吹きも切らずして。らせつ國へぞ吹きつけたり。ある湊に上り。心ぼそく笛をぞ吹き給ふ。折ふし

此世の人とも覺えず。かしらは空へおひのぼり。いろ黑くせい高き者あまた集りて。吹きける物はおもしろやと。感にたへてぞ聞きにける。いか樣これは葦原國の人にて有るらんふんどゝいふ。此土はいづくと問ひ給へば。是こそらせつこく。此國の御ぬしは。はくもんわうとぞ申しける。

一年ばかりでんわうの。姫君をさらんとて。ばんでんへおはせしが。四天王のからめ捕り給ひて。おかれしに。大王のうちのよれを喰ひ。神力を得て牢をやぶり。姫を奪ひとり。一の后にあがめかしづき給ふ。此ごろは姫君の。御母けうやう（孝養）の爲とて。べちに內裏をたて。千日經を讀み給ふ。葦原國の者どもなれば。かたきと宣へば。此國へは入れぬふり。あひかまへてあしはらこくのものとばし。仰せ有るふ。修行者と申しける。まことにまめやかにかたりける。いかに修行者。わが身はもとは日本の丹後の國のものなるが。西かぜにおとされて。今此國にあるふり。日本はいづくの人にてましますぞ。御ふづかしやと申しけり。さん候。われ〳〵は。筑紫の者にて候が。遁世修行の者にてあり。いづくを住所と定めねば。宿ふきまゝの宿として。いくたび夢やさますらん。されば今生は。夢まぼろしの如くふり。さる程にわれらも御身のごとく。あく風に吹きおとされ。今この國に來りたり。さてはくもんわうの內裏は。いづくにて候ぞ。拜み奉つりたくとのたまへば。やすきほどの事。みづからが娘をば。しやこん女と申して。姫君の御方にさふらふふり

其外。はさら女。どんつう女。あくどう女。志やんしや女とて。數多の女房を后につけ申され候。其うへ修行者をば。はくもんわうも御寵愛候ぞ。參らせ給へとぞ申しける。さるほどに。はくもん王より御使あり。今宵ふしぎの鳴物あり。吹きつる者を。急ぎ內裏へまゐらせよとの仰せふり。すふはちだいりへ參りけり。はくもん王御覽じて。今宵吹きつる物を吹けとのたまへば。則ふき給ふ。おもしろしとの仰せふり。后の宮のあさ夕は。葦原國をこひ給ふ。御慰にとて志んけん殿へぞめされける。さる程にこゝをせにとぞふき給ふ。姫君は聞し召し。中納言の笛の音と。聞き知り

給へば。さてもいかやうにして。此所まではおはしましけんと。おぼし召して。まろび出で。とりもつかんとぞ。ちたびもたびも。おぼしめしけれども。あしかるべきことふれば。心ふかく聞き給ふ。じんつう女が申しけるは。此修行者が參りてより。后の例ふらずとぞはらたちける。中にもたやさこん女が申しけるは。さることもおはしますらん。葦原國には。笛を吹き。いやしき志づまでも。管絃の道をたしふむふり。又ぼんてんわうの池の汀に。あそぶ鴛鴦や。かれうびん。孔雀。鸚鵡といふ鳥は。皆くわんぼんの聲をまふふり。今この笛を聞き給ひて。ここそ古郷の。父大王もこひしくおぼえ給めし候らめ。御けしきのかはりたるも。ここわりぞかしと申せば。げにもこそ申しけれ。壺のうちの志らすにて。よごとともに。笛を吹きてぞおはしける。さるほどに。ぶらびの國の。けい志んこくのみかどは。りうき王とぞ申しける。はくもん王へ勅使を奉る。うけたまはるとて。一千人の勢にて三千里かける車に乘り。后には。修行者に笛をふかせ。御ふぐしみ候へとて。五十日と申さんには。必かへり參らせんとて。女房たち。后の御伽申すべし。もしさもふき物ふらば。八つざきにすべしとのたまひて。吹く風のごとくにて。らせつ國をうち出でゝ。けい志ん國へぞ御つきある。

ぶる程に。姫君のおはせには。真砂のうへの修行者は。ここそ冷えぬらめ。又みづかが母のけうやう（孝養）のために。七日笛を吹きて。くやうせんと思ふふり。皆々女房たちも。心をひとつにして。聽聞志給へと仰せければ。うけたまはるとぞ申しける。七日の間とけをすゝめ給ひける。女房たちも醒ひふしぬ。さるほどに。われこそ中納言よと名のりたくはおぼしけれども。いかにして。見え奉るべきやうもふかりしところに。折ふし風一とほり吹き。みすを吹き上げゝる。姫君と。目と目とみあはせ給ひけり。姫君夜更けぬれば。間の障子をあけ。いかにみづからなば。つれてぞちさせ給へとのたまへば。我もさこそおもへども。心にまかせぬ事ふれば。おちすまし候はん事。ふかく叶はぬもの故。とりかへされて。憂き目を見せ申さんこと。あしかるべし。わが身はさもかくも成りぬべし。たゞかくていつまでも笛を吹きて。きかせまゐらせんと

中も給へば。たゞつれておちさせ候へ。三千里かける車には。はくもん王が乘りてゆきぬ。二千里かける車あり。これにめされよとて。車寄にたちいで御袖をそひき給ふ。中納言は。夢うつゝともおぼえず。車に乘り給ふ。飛行自在のくるまとは申せども。はくもん王の車ふれば。ゆしの心をや憚りけん。更に飛ぶ事ふかりけり。二千里を飛びすましてこそ。徒歩はだしにもふるべけれ。いまだ二千里をだにすぎざれば。かゝるところに。はさら女とて。色くろくして。夜叉の如くふる女あり。人はゐれどもまゞろまず。笛のねも聞えず。姫君も御心もとなく思ひて。かつはと起きて。はしりまはりて見るに。后も修行者も見えざりけり。いかにせん。神通女。惡徳女。二三人起きあがりて。もし月も出でぬれば。みふみ二千里かける車もしら。はくもん王のいかばかり。怒り給はんずらん。われ〳〵うきめをみんずるかなしさよとさけびける。中にも夜叉女が申すやうは。自然の事もあらばとて。相圖の太鼓を。一里にひとつゝ置かせたりけるを。うたせばやと申して。

うちつゞけゝるほどに。けいたん國へのみちのほど。五百里の所ふり。四五百打ちつけゝれば。けいたん國へぞ聞えける。はくもん王きこしめし。らせつ國には。何ごとのいできたるらん。相圖の太鼓ふるとて。三千里かける車に乘りて。飛ばせければ。刹那が程にとびつきぬ。夜叉女はしりいで。ありのまに申しける。やすからぬものかな。爰にありつる修行者は。あしはら國の。中納言にてありけるぞや。さりながら。二千里かける車ふり。追ひつかんことやすきほどの事とて。われを思はんものどもは。供せよと怒りける。人の腹立をば。はくもん王のやうふるゞ申すに。まことにからみてんにすくみあがり。眼はしやりのごとくふり。はがみをして躍りあがり立ちける。さる程に。ほどふく姫君の車にとびつきぬ。中納言御らんじて。さばかり申しつる物を。わが身のことはともがくも。命はさらにをしからず。御身にうきめを。みせ申さんこそかなしけれとのたまへば。姫君は。今はいふこもかふふまじ。二世とかけたるちぎりふり。浪の底へ入りて。ひとつ道にと思ふふりと仰せける。かゝりけること

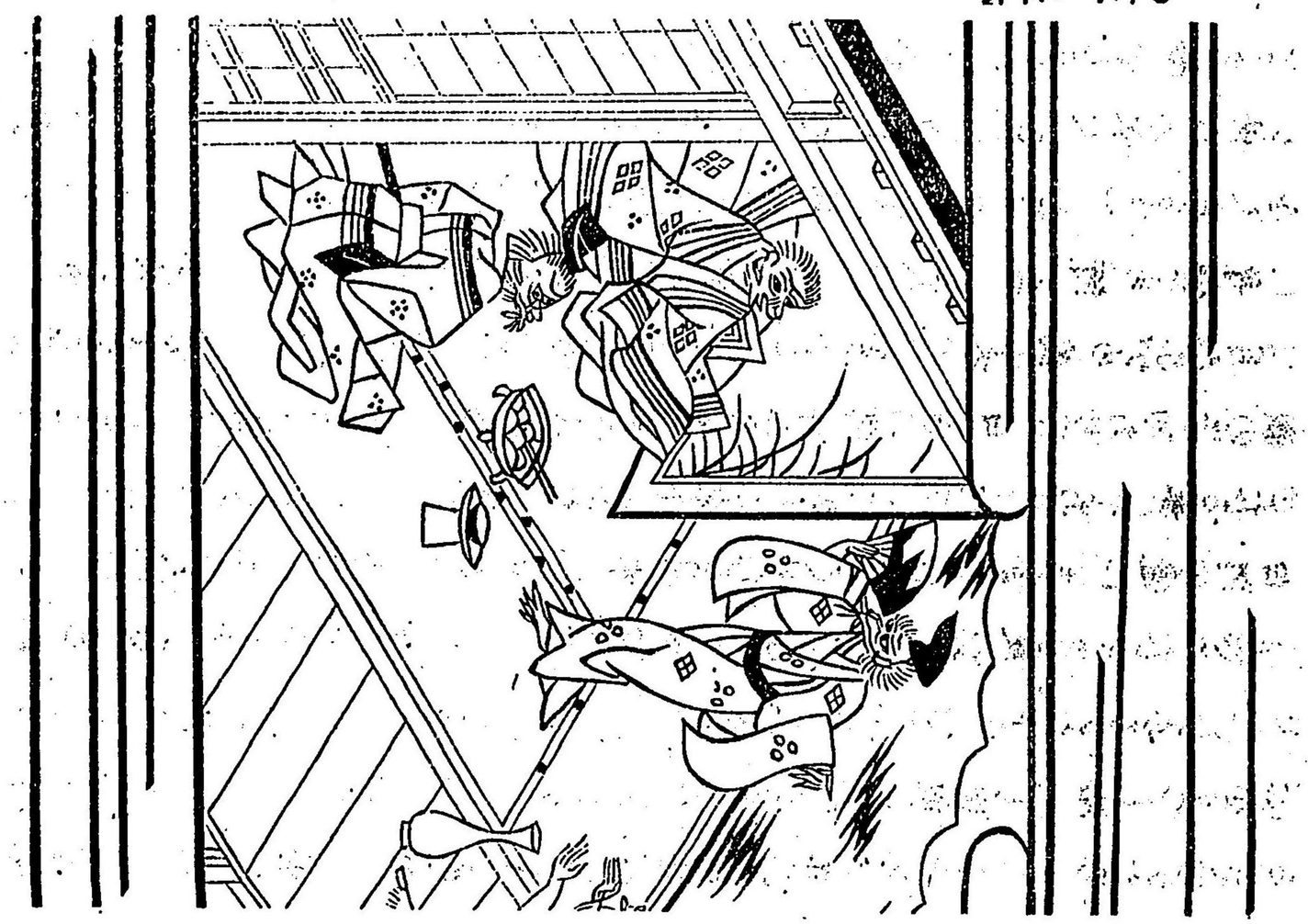
わに。内裏にて舞はせたりし。かれうびんが。孔雀の鳥。ふたつゞび來り。かれうびんがつゞきより。はくもん王が車をは。たゞ蹴のけたり。孔雀のゞりがつゞきより。姫君の御車をゞきへはたゞけやり。後には御車をゞきへ〳〵ゞけやりけり

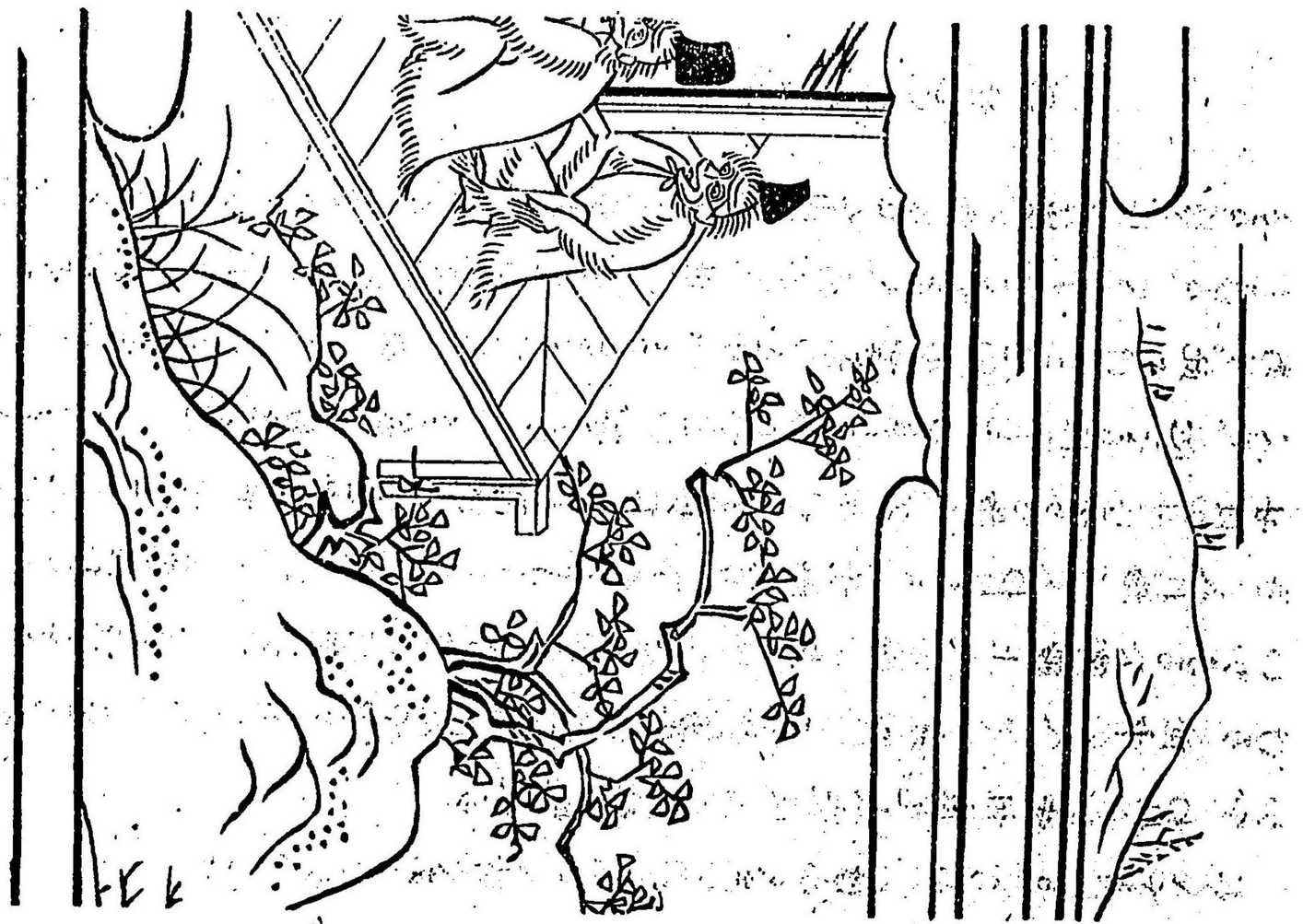
此鳥またひゞつにふり。はくもん王の車を。あふたゞふたへける程に。ふらくのそこまでけ入れたり。其後此鳥はかへりぬ。姫君の御車は。あしはら國に聞えたる。花のみやゞ。五條の橋につきにけり。さてもの二人の人には。わにの口をのがれ。きゞんの門を去つて。夢の道行くゞゞちして。五條の御所へぞおはしける。いつしか御所はあれはて。門はあれゞ扉ふし。庭には忘んせきみちたえて。軒にはあさがほ。志のぶまゞりの忘草。たれまつ風の音も。心ぼそゞそまさるらん。岩間をくゞるわすれ水。絶々つたひてふがれ行く。嵐はずだれをまきあげて。せいたい。きうたいかげみえて。いとゞあはれぞまさりける。やゝありて。奥の方よりも。人一人出でゝ。あやしげにゞがめける。中納言。やゝみすぢかにてあるぞ。物いはんゞのたまへば。御ころにおどろき。御まへにいりけり。御涙にむせびて。ゞいく仰せ出ださるゞゞもふし。藏人ゞ申しけるは。抑。若の御出家ありしより後。今日まで。六十六か國を。たづねまゐらせぬ所ふく候ひつるが。いづくにはしましけんゞぞ申しける。いそぎ内裏へまゐらんゞ。仰せければ。御車ふんゞ奉り。御參内あり。もゞの御身をかへずして。ぼんでん王の故に。らせつ國まで御らんゞけるゞゞ。ありがたき事ゞ。おぼしめすふり。ほんりやうふれば。丹後但馬の。兩國をくださるゞゞの宣旨ふり。中納言かゝる物うきみやゞに。あゞをゞぶめゞゞて。いそぎ丹後へくだり給ひて。御ゞしハ十ゞ申すに。ひめ君は。ふりあひのくわんおんゞあらはれ給ふ。中納言はゝせのゞのもんゞゆゞふり給ひて。衆生を濟度志たまふふり。かたゞけふしゞも。中々申すばかりはふかりけり。らせつ國にて。御やゞかしまゐらせし。むうぢうばは。ふりあひゞのかきゞりの。御ぜんこれふり。當代までもはやらせ給ふ。ふりあひのくわんおん。くせのゞのもんゞゆの御本地。すふはち此御事ふり

のせざる草子

さるほどに。丹波の國のせの山に年をへし猿あり。名をばましをのごんのかみと申しける。その子にこけまるどのとて。世に超えてちゑさいかく。藝能すぐれけるかたあり。此こけまるどの。あふぎおつとり一さしまうて入り給ふを。いかふるものもみるより。心そらにふし。おもしろからずといふ事ふし。さる間こけまるどの。やう〳〵廿ばかりにふらせ給ふ。父母いかふるかたよりも御嫁ごをご申させ給へども。耳にもきゝ入れ給はず。われにもふ子細あり。ふみ〳〵ふらんものを。いかでか妻にむかへん。いかふる公卿殿上人の嬢ぶらでは。ひさしからぬうき世に何かせんとおぼしめしける。世中の人たち。身のほどをしらぬ望されもひ給はんやからもあるべし。こともおろかや。われらが先祖猿丸太夫は。みふをしれる歌人ふり

むくやまにもみぢふみわけふくをしかのこゑきく時ぞあきはかなしき





ごよみ給ひしうたは。これを小倉の志きしの和歌に。定家も入れられしふり。其ほか世々の歌人の説にも。われをいふおほせごり。ましらのこゑぶごゝてよみむく和歌を人志らずや。おそらくは系圖にむきてはたれ人にか劣るべき。ふまゞひふるやからに身をそめ。何かせんごむぼしめし。常は岩のはざまにて花をみ。秋は木々の梢にて月をふがめ。萬の木のみを愛し。いとやさしきいろこのみてむはしける。去る間立願の子細ありて。日吉の御神にまゐらせ給ふが。をりしも都は柳さくらをこきまぜたる春にてありければ。こゝかしこ東山のあたりをふがめ ありかせたまふ。こゝに北白河の邊に。さもありげにつくりたる草木の御所あり。是はいかふる人のすみかやらんと。たちより霞のたえまよりふがめ給へば。うつくしきひめ君。琴ひきてゐ給へり。いかふるかたやらんと。心そらにふりつゝ。まだゝきもふくまほらせ給ふ。かやうに心をうつし給ふも道理かふ。うきぎのいきのかみごの。ひとりひめにてそむはしける。そのかたちゞんゞやうに。耳のあたりぬれ〳〵と色白く。世にはふらびふき御すがたにてぞありける。こけまるごのはつくゝゞみ給ひて。世の中の人には。かやうのすがたあらゞ。いかにしてつてもがふこ。それよりふむあしも志ごろにて。夢に道をたゞるやうにして。日吉の御社にまゐりて。鰐口うちふらし。きみやうちやうらい山王二十一もや。白河邊にてみし君のおもかげ。忘れやらで。今はつゆの命もきえうせぬんと思ふこの身をたすけ。かの姫にあはせてたび給へと。肝膽を碎き。ふみおふがちくごきたまひて。御まへをたゝせ給ふが。めもまひ心きえ〳〵ごふれば。ふるさとへかへらん事もふりがたく。木の葉かきよせ。枕ごして。こけぢのむしろにたふれふしぼれ〳〵ごしてあかさせ給ふ。志かる所に狐のゐふかごのまゐりあはせ給ひ。かのごけまる殿をつくゝづくごみて。御めもこてあしのゞんゞやうさよ。いかふる御かたふれば。かくてここにわたらせたまふぞ。定めて此みやしろへまうで給ふが。たびやつれにくたびれさせ給ふかと。打ちごけごひしかば。苔丸殿。いやこれは行へもふきまよ鶏の子にてさふらふこ答へさせ給ふに。ゐふかごの。いや〳〵それはそらごごこ

れもひまぬらする。いかさま此御神へまうでさせ給ふ人のふかに。たれぞの姫ぶごを御らんじて。ちづ心ふき戀にちづませ給ふとみ參らせ候。心のうちをのこさず語り給へと。たのもしげにちみ〻みご申しければ。苦丸殿涙をはら〳〵とふがし。物やれもふと人のさふまでこ。いふこのさふらふさて。御はづかしげに。顔をあからめさせ給ひ。うちふし給へば。その時ぬふかごの。色をも香をもちる人ぞしる。みづかちもかく候ちひし時は。さやうのこともこも候ひしふり。おもひも戀も。わかきときのふちひふり

つゝまず申させ給へ。いのちこともにたのまれ申さんといひければ。たのもしの人の詞やふ。かくできえふばつみふかし。今は何をかかくし參らせん。すぎにしころ。白河の花木のまをたごりしに。思ひもよらぬ君をみて。今はいのちの玉の緒の。たえふん後にたれ人か。つゆもあはれと思ふまゝきもしも此事叶はずは。さるさはの池へも身をふげて。ちふん命はをしからゝこと。たゞさめ〻〻こゝかりふり。ぬふかごのきゝ給ひて。さてはいきの守ごのゝひとりびめにてさふらふべし。心を碎きおぼしめすもこゝわりや。此君こ申すは。いきのかみ御ふたり四そちにふらせ給ふまで。子のふきこゝ悲しみて。八月十五夜の月に向ひていのらせたまへば。北のかたの右の袂へ月のやゝこらせ給ふこ。御知言あらたに蒙らせ給ひ。いでさせおはします姫にてましませば。うつくしきこゝは理ふり。御名をばたまよの姫こ申しさふらふ。いかふるかたのさまよりも。ふみたまづさのかよふ事。ふる雨より志げ〻〻しくさふらへども。女御きゝき。もしは公卿殿上人ふらでは。御婿にこらゝこて。秘藏ちち給ふ姫にてさふらふか。御こゝばたゞふらぬ御かたゝみ參らせ候まゝ。かふへてまぬらすべし御心やすくおぼしめせ。幸わらはが娘を。その姫君へ御宮仕に參らせ。けしやうのまひこめされさふらふ。みづからもさい〻〻。かの姫の御方へ參り候。御ふみあそばせ。ゝゝぶげてまぬらせんといへば。苦丸殿いとうれしくて

君ゆゑにかきあつめたる木のはゝものちりふんのちをたれかゝはまし

かやうにあそばしわたし給へば。ぬふかごの袂に入れ。やがてかたへまゐらせんとて。白河の御所へまゐりければ。ひめぎみつく〳〵と見させ給ひ。何とて此ほどは。うちたえ給ひしと。めきをあざむく御顔をもだげさせ給ひ。いとふつかしげにおほせさふらへば。ぬふかごの。御まへに人のふきをりをえて。ちか〳〵の御ふみとて。そばにおく。姫は耳をそばめ。愧かしげにうつぶき給へども。ぬふかごの。人たらしの上手にて。むかしよりつれふき人は。あさましくふりはて候。いたづらにふりし小野の小町がごとまでいひきかせければ。さすが心づよきもつみふかし。岩木にあらぬ身ふれば

なちごちのたづきも知らぬ山ざるのおぼつかふくもわれをとふかや

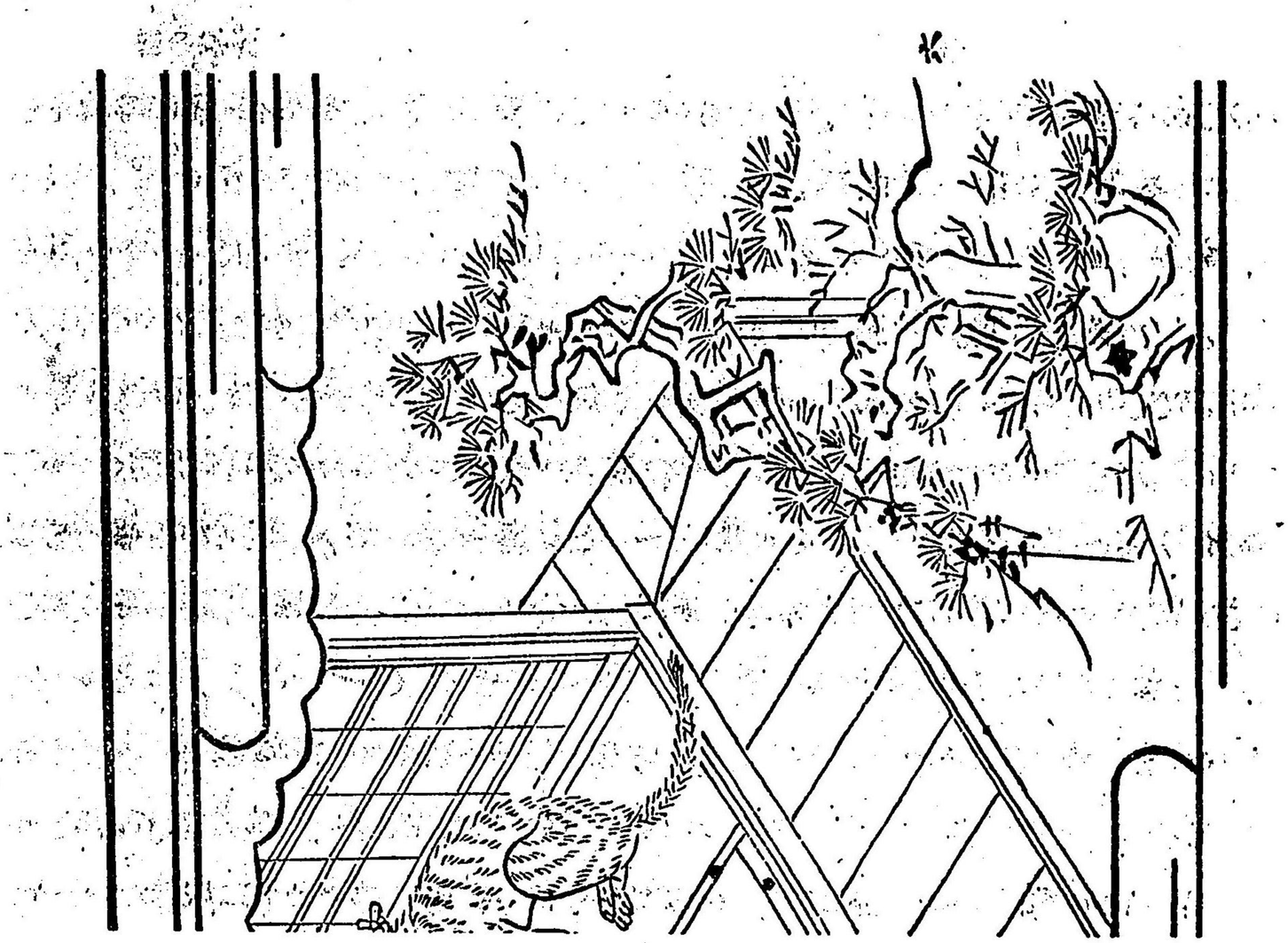
筆も志ごろにかきふがし。さしおき給ふな。とる手もうれしくて。やがてこん〳〵といひちらし。狐のぬふかはかへりけり。いそぎ苔丸どのにもちてゆき。みせければ。うれしくてふたおきあがり。三度いたゞきみて。うつくしの御手やと。むねにあて。顔にあて。それよりふほいやましに思ひつゝ。たび〳〵の御ふみをやりたまへば。ふたりのゆくすゑは。やがてあふせごふり給ふ。げにやをさのひとふしも。ふれての後は志のびに〳〵かよひつゝ。今はあさからぬ中とふらせ給ふ。父いきのかみ。北の方きゝ給ひ。げにも丹波のゝせのゝ。ましなのごんの守の苔丸殿は。聞き及びし色好み。いかふる公卿殿上人の中にもふさすがたふり。今は御げんざんとて。いろ〳〵みやまのくわしごりあつめてもてはやさせ給ふ。此事丹波のごんのかみきこしめし。此ごろいづかたへもわたらせ給ふぞきこえもひしに。さてはさやうの事にてありしを。志らざる事よとて。御むかひに馬のり物。このはざる共をたびたゞしくつかはし給ふ。こけまるどの。たまよの姫君をひきぐし丹波へ越え給ふ父母吉日をえらび。御げんざんありてみ給ふに。ふにはかゝるうつくしき姫君もあるかや。こけ丸の心をつくしつるもことわりやとて。さりはやさせ給ふ。その其御子あまたいできさせ給ひ。ずゐ繁昌にさかえさせ給ふ。むかしも今もかゝる御幸あらゞゝと。めでたき事かずかぎりふし

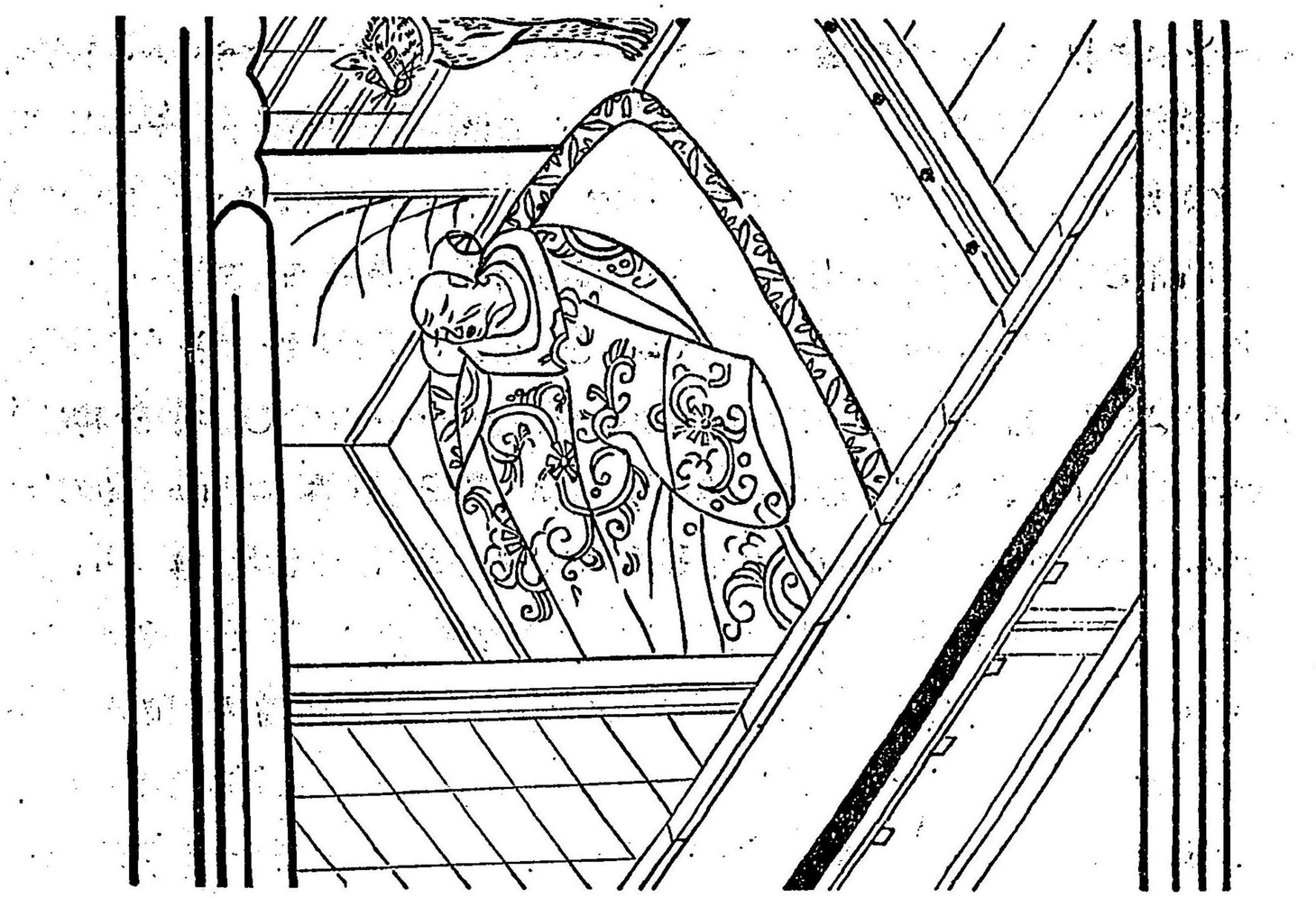
猫の草紙

天下太平國土安穩。かゝるめでたき御代にあふこゝ。人間は申すにおよばず。鳥類畜類にいたるまで。ありがたき御政道ふり。まことに堯舜の御代にもすぐれたるこゝふり。まづけうちやう（庠長）七年八月中旬に。洛中に猫のつふを解きて放ち給ふべき御沙汰あり。ひとしく御奉行より。一條の辻に高札を御たてあり。其おもてにいはく。一。洛中ねこの綱をとき。はふちがひにすべき事。一。同じく猫うりかひ停止の事。此むね相背くにおいては。かたく罪科に處せらるべきものふり。よつて件の如し。右かくのごとく御せいたうある上は。面々ひそうせし猫どもに札をつけて。はふち申せば。猫斜ふらずによろこびて。こゝかしこに飛びまはるこゝ。ゆさんといひ。鼠をとるにたよりあり。程ふく鼠慣ぢおそれて。にげかくれ。桁梁をもはしらず。ありくといへども。さふりもふく。六のびありきのていふり。かゝるきのうまき事ふし。願は

くば此御法度。つゝがなく懈怠する事なかれと。萬民かくの如し。爰にかみ京邊の人ふりしに。よにたつとき御發心者あり。惡を捨てゝ善にすゝみ。あしたには天長地久。夕には現世安穩。後生ぜんち志よのいたり。ほうかいびやうだうりやくと願ひしけうくわんのふたつあきらかなり。道俗男女。殊勝感涙をながす。誠に大日如來ともいひつべし。かゝる殊勝のだうりなば。鳥類畜類までも志りはんべるか。ある夜ふしぎの夢をみる。鼠の和尚とおぼしきが。すゝみ出でゝ申すやう。御僧樣へむかひことばをかはすこと。はゞかりに存じ候へども。御教趣のほどこれん〳〵院の志たにて。日夜朝暮御だんぎを聽聞仕り候に。懺悔に罪を滅すことおほせられ候について。まかり出でゝ候ふり。さんぎさんげをも仕り候はゞ。一句の御道理をも。御授あつてくだされ候へかしと申しければ。僧こたへていはく。汝らがふざいとして。かゝるやさしきことを申すものかなと。ふのめふらず思ひ。さうもく國土悉皆成佛とふれば。ひじやう草木も成佛すとみえたり。いはんや生ある物として。一念彌陀佛則滅無量罪。ゆいちんのみだ。こしんのじやうどふり。爰を去る事と遠らずと說き給へば。たとひ鳥類畜類たりといふとも。一念の理道によつて。成佛せずといふ事やある。とのたまへば。さらば懺悔の物がたりを申し候はんとて。鼠ふきのふんだを。おし拭ひ申すやうは。今度洛中の猫のつふをはふされ申すやう。我々一もん悉く影をかくし。或はにげ。或はほろび。今すこし殘り申すものども。けふあすの命と思ひ。心ぼそくいしずゑのかげ。椽の下にかゞむといへども。寸の油斷も候はず。又穴の住居を仕りてみるといへども。一日二日のことにもあらず。中にばかりも。いきともりてゐられ申さず。たま〳〵うきせけんへまかり出でんとすれども。志や取りておさへ。あたまより齒みひしがれ。志ゝむらを引きさかれ。かゝるいぶせきことにあひまつる事。前世の因果かふしうこそ候へと申せば。僧こたへていはく。汝らが志はたれていふ所いたはしく思ふふり。ことに一句をもさづけたれば。弟子同前に思ふふり。まづ〳〵くせごとに人にくまるゝ事を。かたつてきかすべし。わらはごときのひとり法師。た

ま〳〵傘をはりたて〻置けば。やがて志まもこをくひ破り。又だんふをもてふさんと て。いり豆ぜん豆をたしふみおけば。一夜のうちにみふにふし。袈裟衣ともいはず。あふぎ。物の本。はりつけ屏風。かき餅をもたまらせず。いかふる柔和にんにく のあ〻（阿闍梨）やりふりとも。命をたちたき事勿論ふり。いはんや。大そくの身にては道理志ごくせり。その時鼠こたへていはく。我らも御たこへのごとくぞんじて。わかき鼠ども に。いけんをふすこいへども。忠言耳にさかひ。らうやく（瓦鑿）口ににがしと申せば。中々聞きも入れず。ふほ〳〵惡逆つかまつらんと申す。そのふかにも。まづ第一。人ににくまるるこゝろふかれ。おひがしどの。むきたごの〻。あらひぼうしやうつきおひ。ちやこ。おはしたのまへだれ。かたびら。たび。また。袴。肩衣のはし。からうさのすみ。つゝみつぶらの中へこりこもりて。家を作り。餌食にもふらず。てがらにもふらざる物をくふこゝろふかれ。つぼのはたふごまはるふご。あかはだか。つけ紐の時よりも申しきかせ候へども。かぶきたるふりばかりを好み。人の枕もと。こも天 井ふる屋 根ふごをすみかとして。惡逆ばかりを仕り候事。せひふき聟こ。かたり申すうちに夢さめて。すでにその夜はあけにけり。又つぎの夜の夢に。こらげのねこ来り。げに〳〵しくかたり申すやう。御僧様たつときにより。鼠根性さて。人のにくむやつにて候。かゝるやつばらまゐりて。いろ〳〵のこゝを申すよし。やがてつげ志らするかたあり。總じてかの鼠と申すは。下道のうはもりふるべし。御僧の御慈悲をたれ給ひても。やがて物をひかん事必定ふり。又我らの系圖をあら〳〵談り申すべし。聞し召し候へ。筒様に申し候へば。鼠とたけくらべのやうに候へども。いはれを志ろしめされずば。いやしめ給はんまゝ。ねこぜふかにおしつくばひ。大のまふこに角をたて申すやう。われは是天竺たうどこに。おそれをふす。こらの子孫ふり。日本は小國ふり。國に相應して。これを渡さるゝその仔細によつて。日本に虎これふし。延喜の帝の御代より。御寵愛あつて。かしはぎのもこ。志た簾のうちにおき給ふ。又後白河の法皇の御時よりつふを付けて腰もこに置き給ふ。綱のつきたるゆゑに。一寸さきを鼠徘徊すこいへど



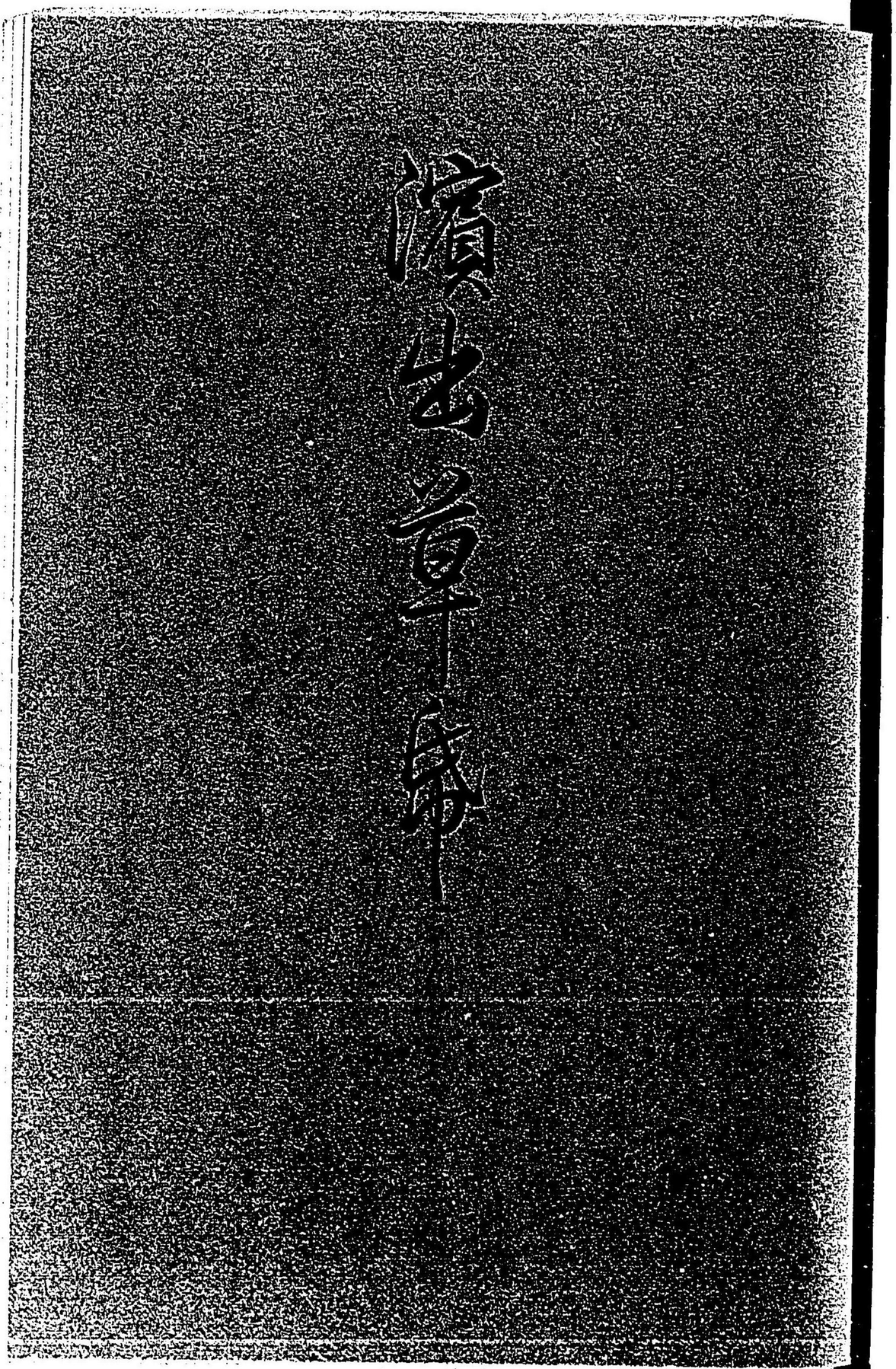


も心ばかりにて。とりつくことふらず。湯みづのたべたき時も。のどをふらし聲を出だして。たべたけれども。あたまをはり。いためらるればせひもふし。ことばを通ずといへども。天竺の本語ふれば。大和人の聞き知ることふし。たいりやくつぶぎころさるばかりふり。にふがくの御慈悲。くいうたいにて。志づが伏屋ふせやに月のやどり給ふがごとく。猫ふぜいまでに御心をつけさせ給ひ。網をとき。苦をゆるさることあり。ありがたき御ことふり。此君の御代。五百八十年の御齢をたもち給へと。朝日にむかつて餘念ふう。のんどをふらし拜み申すふり。僧こたへていはく。猫のいはれやう。近頃志んべうふり。ふんせんさんみやうのこころを思へば。きるともいかで。かへん。とりふがら。こゝにわび度事あり。出家の役にて。かやうのことをみてはおかぬ法ふり。あつかひに。入りたきとのことわりふり。殺生ばかりをするものは。因果車輪の如く。死にては生じ。志やうじては志ぬ。るてんにさんりんしては。其因果のがれ難し。一さいのこころを志らんにつて。志やうじもろ〳〵の諸惡をはふれ。三がひ六しゆりんを消滅して。すふはちけだつを解脫を得るとみえたり。殺生をやめられ候へ。其方の食物には。くゝにかつうをゝまぜてあたへ。またをり〳〵は。たつくりにしんからぜけふごを。朝夕のゑじきには。いかゞと問ひ給へば。御ぢやうのごとくにては候へども。まづ〳〵あんじてもの御らんぜられ候へ。人間はよれをもつてこそ。五臟六腑をとゝのへ。あして達者にりこうをものたまへ。山海の珍物は。はんをすゝめんがためふりとうけ給り候へば。われ〳〵もその如く。天道より。食物にあたへ下され候故に。鼠をたべ候へば。無病にして飛びありくことと。鳥にも劣るまじと存じ候ふり。またゆる〳〵とひるねをつかまつるも。鼠をたべんとそんずるためふり。志かるを今より堪忍のこと。同心申しがたし。御分別候へと申せば。さしも廣大無量の御僧ふれども。返答志かれ。感涙きもをけすばかりふり

夢さめて。曉がたにまどろめば。例の鼠きたつて申すやう。とかくこの躰にては。京中の堪忍ふりがたしとて。かみ京志も京の鼠どもよりあひ。ふれをまはし。にしら

ん組は舟岡山のすそ。小川ぐみは御りやうの藪。たちうりぐみは志やうこくじの藪。じやらくぐみは北野の森。下京ぐみは六角堂のうちへよりあひ〳〵談合す。其中に分別がほする鼠。すゝみ出でゝ申すやう。志よせん此躰ふらば。命と中たがひのほかはあるべからず。いかゞしてか此たびの命のびふんと。いろ〳〵評定ひやうちやうゝたりけり。はや都の御ふれ。五十日にふるといへども。魚の骨をひとつ齒にあてず。あぶらあげ。やき鳥のかゞをだにもかゞず。猫どのに參りあはねば。じねん自然にひ志にゝまかりふるふり

きつとあんじいだしたる事あり。此ほど聞きおよびしは。近江の國御檢地ありしかは。めんあひについて。百姓稻をからぬよし。慥に聞きとゞくるふり。まづ〳〵冬中はまかりこし。稻の下にめこ共をかゞませ。年をこえ暖にふらば。きたのこほり。木のもとの地藏をたのみ。やんでめでの山々。いかゞ山。おくだに山。おそろしけれど。膳吹山に關が原。さめがい揖斐山。たかのはた所の山。はくさんじ山。かみかまうのこふりのはた。ふさ山。布引山。觀音寺八幡山。鏡山。朝日山。こうの郡わしの尾の山。村々里々みかみ山。志がらき山いし山。あはづ。まつもと。うちでのはま。ふがら山をんじやう寺（園城寺）えんりやく寺（延暦寺）さかもと。かたゝ。ひらこまつ。白鬚の明神きんへん。うちおろし。いまづ。かいづ。志ふづ。志がのうら。便船あらばちくぶ島。ちやうめんじ。おきの島ふごへもおし渡り。ところわらびふごをほりくひ。一たん志んみやうをつふがんこそんじ候。何より心の殘り候は。やがて正月に。かゞみ。はふびら。煎餅。あられ。かき餅。おこし氷ふご。春雨の中徒然ふぐさみにかぶりくひて。ゞぶめいてあそばんこたくみしに。大敵のねこどのにおつたてられ。のき退くこそ無念ふれ。さりふがら猫どのも大さいふこはものに。あそこここをおひまはされ。つぢかはばたにたふれふし。あめつゆに志ほたれたるをみれば。むくいはありといさみつゝ。方々へのき退く。その中に公家門跡ふごに。久しくすみける鼠。三首のこしをれをつらねたり。



鼠とる猫のうしろに犬のゐてねらふものこそねらはれにけれ

あらざらん此世の中のおもひでに今一たびはねこふくもがな

じゝといへばきゝみゝたつるねこどのゝまふこのうちのひかりおそろし

僧。心に思ふやう。かゝることわざ人にかたるふらば。狂氣どや風聞せん。ふかくつゝ

むべしと思へども。まれゝる夢のたはぶれは。ちかき友に語り傳へ。わらひぐさかふ

さいへば。おほせのごとく。鼠うすくふり。物をもひかず。まくら本をもありかず。かや

うの御せいたうは。昔がいまにいたるまで。ありがたき御こゝろふり。君もゆたかに民

さかえ。久しくめでたきことばかりにて。心ゆるがせふるのみふり

濱出草帋

鼠とる猫のうしろに犬のゐてねらふものこそねらはれにけれ

あらざらん此世の中のおもひでに今一たびはねこふくもがな

じゝといへばきゝみゝたつるねこごのゝまふこのうちのひかりおそろし

僧。心に思ふやう。かゝることわざ人にかたるふらば。狂氣とや風聞せん。ふかくつゝむべしと思へども。まれふる夢のたはぶれは。ちかき友に語り傳へ。わらひぐさかふといへば。おほせのごとく。鼠うすくふり。物をもひかず。まくら本をもありかず。かやうの御せいたうは。昔がいまにいたるまで。ありがたき御ことふり。君もゆたかに民さかえ。久しくめでたきことばかりにて。心やるがせふるのみふり

濱出草紙

そもかまくらさ申すは。むかしは一あしふめば三ちやうゆるぐ。たいふのぬまにて候ひしを。わだ。はたけやま。そうぶぎやうを給はりしいしきり。つるのはしをもつて。たかきさころをきりたひらげ。たいふのぬまをうめ給ふ。上はつかい。中はつかい。下はつかいとて三つにわる。上はつかいは山。ちうはつかいはざいけ。下はつかいはうみふりけり。上はつかいの。一だんたかきさころには。源氏の氏神。正八幡大菩薩をあがめ祝ひ奉る。ちうはつかいのざいけを。かまくらやつ七江にそわられける。あらおもしろのやつ〳〵や。はるはまづさくうめがやつ。つぶきのさきに匂ふらん。ふつはすゞきあふぎがやつ。あきはつゆくさきさうめがやつ。ふゆはげにもゆきのした。かめがえやつこそひさしけれ

はるかの沖をみわたせば。船に帆かくるいふ村がさきさかや。いひしま。江のしま。つ

いたり。蓬萊宮と申すども。いかでこれには優るべき。かるがゆゑに名づけて。あゆみをはこぶともがらは。諸願かふらず満足せり。ていとうのつゞみのおと。さう〳〵のすゞのこゑ〳〵。ちはやのそでをふりかざす。神慮すゞしめの。御神樂のおとはひまもふし

かゝるめでたきをりふし。頼朝しやうらくまし〳〵て。大佛供養をのべさせ給ひ。御身はさこんの右大將に經あがらせ給ひ。兵衛づかさ十人。さゑもんづかさ十人。廿人のくわんどを申し給ひて。そのころちうの人々に。あておこふはせ給ふ。中にも左衛門づかさをば。かぢはらの平三かげときにくだされけるを。嫡子の源太にゆづる。源太つかさをたまはり。いそぎ國にくだり。此こゞひろう申さであるべきかと。大名小みやう。てうしやう申し。いつきかしづきたてまつる。まづ初番のざつしやうには。ほうらいの山をからくみ。中にかんろのさけをいれ。不死のくすりと名づけ。ふろがねの竿に。こがねのつるべをむすび。はねつるべにてこれをくむ。さけにあまたのいとくあり。うとき人さへちかづき。ふたしきふかはふほふたしむ。をちこちの。たづきもふちぬたび人に。ふるゝもさけのいとくふり。ほうらいの山のうへには。りふふんか。たちばふ。けんほのふし。さうぶのふひ。かゝぐるやさう。ふんせいのくりこかや。みふいろ〳〵にふりつれて。そのあぢはひはふゆみをふす。まことに不死のくすりぞと。あひをすゝめてまゐらずる。二日の日のざつしやうには。さかふのかずをあつめ。ちんのほたど。やかうのへそ。よろひ。はらまき。たち。かたふ。名馬のかずをそろへ。おもひ〳〵にひかれけり。三日の日のざつふやうには。江の島まうでにことよせて。御はまいでさきこゑける。かたゞけふくも。御れうの北の御方いでさせ給ふ。そのうへ人々のきたの方も。みふ御ともこそ聞えけれ。ふねのうへにぶたいをたかくかざりたて。ふたんくわりほくやりわたし。高欄ぎぼしみがきたて。ぶたいのうへにあやをしき。みづひきにしきをさげぬれば。浦吹く風に飄飄して。極樂淨土は。海のおもてに浮き出でゐるかとうたがはる。おん賀のまひあるべしとて。けんくわんのやくをそさこれ

けゐ。ちぶの六郎どのは。ふえのやくどぞきこえける。ふかぬまの五郎はさびやうしのやくぶり。かぢはらの源太かげすゑは。太鼓のやくどぞきこえける。御れんぢうにはゞびは三めん。こゝ二ちやう。きんのこゝのやくをば。きたの御かたひきたまふ。一あんのびはをば。ほうでうどのゝ御内様。かづさのすけの御内様。わごんを志らべ給ひけり。けんくわんいづれも名にしおうたるどーやうずぶり。ぶたいのうへの舞ちごに。ちぶどのゝ二男。ふぢいしどのゝ申して。十三にぶらせ給ふ。しくわうそだちのめいどうぶり。左の一だうけどりの。たかさかどのゝうるわかどの。そうどーてちごは十八人。九人づゝわかちて。左右のまひをまひ給ふ。いづれもまひはどーやうずぶり

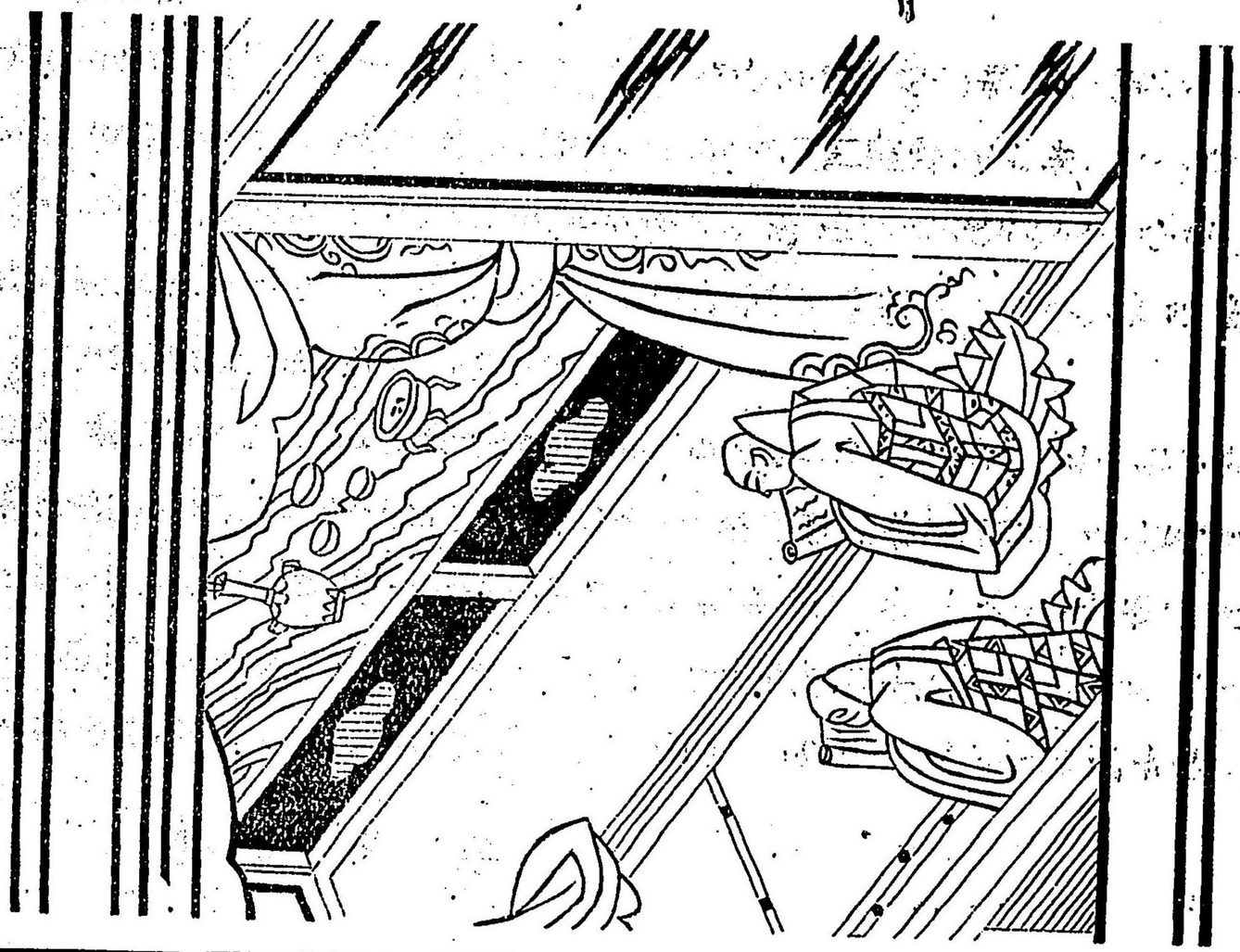
龍王に一をどりけんどーやうらくのさしあし。はどうのまひのはちかへし。りんたいはにはさすかひふ。せいがいいはにはゞ。ひらくてこざり志よに羽がへし。いづれも曲をもらさず。夜日三日そまうだりける。うつも吹くもかぶづるも。ぼさつのげうこれぶり。でんにんはあまくだり。りうどーんはうきあがり。ふねきやうたうにめぐるらん。けりんかくちのどもがら。うかれてこゝにたち給ふ。御まへの人々御志よりやう給はり。しょちを入るとこそきこえけれ

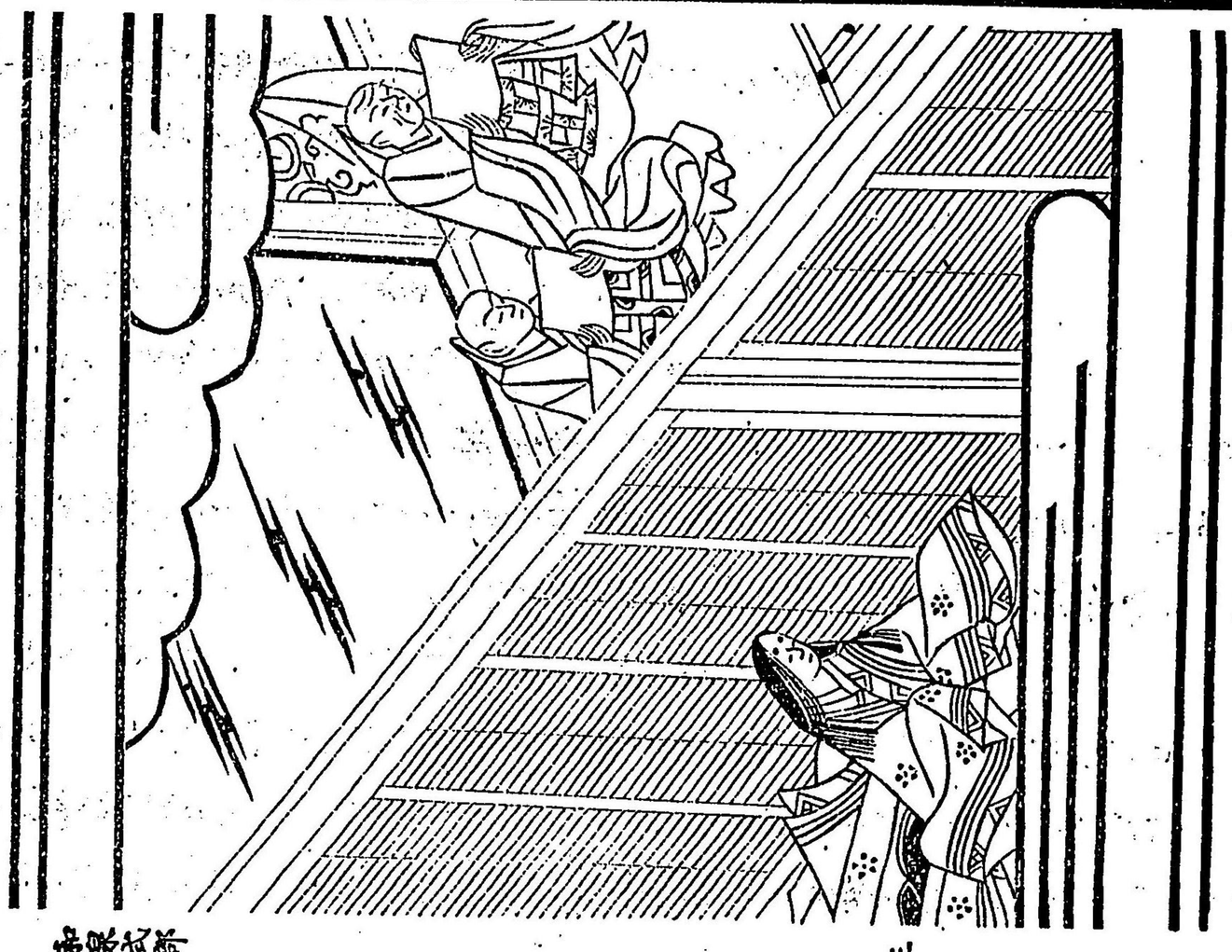
和泉式部

和泉式部

中ごろ花の都にて。一條の院の御時。和泉式部と申して。やさしき遊女あり。だいりに(内裏)橘保昌とて男あり。やすまさは十九。和泉式部は十三と申すより。ふしぎのちぎりをこめ。ふさけふかくして。十四と申す春の頃。若一人まうげ給ひ。あひの枕のふつごとに。はづかしとやおもひけん。五條の橋に捨てにけり。うぶぎぬあやめの小袖のつまに。一首の歌を書き。さやふさまもりがたふをそへてすてけるを。まちにん(町人)ひろひ養育して。比叡の山へのぼせけり

さる程に學問心ざしふかく。ふらびふく。みふ心をかけぬ法師もふく。其名總山にかくれふく。ふさけのいろもわりふさまふり。總山のもてあそびのみふらず。佛道のみちたのもしく。其名天下に廣まり。こうめい阿闍梨とて。世にかくれふくして。こうめい十八のとし。だいりの(内裏)はつかう(初講)をつとめ給ひし時。風ふきてつぼ





ねのみすを。二三度ふきあげて。年の程二十ばかりなる女房の。眉はこぼれてよし
ありて。論議聽問して。おもひ入りたる風情にておはしけるを。こうめいだに一め
みしよりも。あさからぬ身にあこがれて。わがやどに歸り。山にあがり給ひても。みし
人のおもかげ身にそひて。わすれぬは前世の宿業ぶり
又都へのぼりて。あこがれみし人のおもかげを。今一め見ばやと思ひ。柑子あき人に
ふりて。内裏にこし入りてかんしをうりけるに。彼のみし人のつぼねより。下女一
人出でゝ。おあし二十ばかりにて柑子をそかひにける。それは二十かぞへてうりける
が。詞にてはかぞへず。戀の歌にかぞへつゝかくぶん
一つとや。ひとりまろねのくさまくら。たもとぞばらぬあかつきもふし
二つとや。ふたへびやうぶのうちにねて。こひしき人をいつか見るべき
三つとかや。みても心のぶぐさまで。ぶどうき人の戀しかるらん
四つとや。よぶがに君をおもふらん。枕かたしくそでぞ露けき

五つとや。今や〳〵とまつ程に。身をかげろふにふすぞかふしき
六つとかや。むかびの野べにすむ志かも。つまやゐにこそふきあかしけれ
七つとや。ふき名のたつもつらからじ。君やゐふがすわが名ふりけり
八つとかや。やよひの月のひかりをば。おもはぬ君がやどにさゝめよ
九つとや。こゝであはずば極樂の。みだのじやうどであふよあるべし
十とかや。ごやをはふれしあらたかを。いつかわが手にひきすゑてみん
十一や。一どまことのあるふらば。人のこゝろのはうれしからまし
十二とや。にくしと人のおもふらん。かふはぬこゝにこゝろつくせば
十三や。このみふさけをふりすてゝ。ふさけは人のためにあらねば
十四とや。ふふんいのちもをしからず。君やゐふがすわが身ふりせば
十五とや。後世のさはりとふりやせん。身のはかふくもあはでとはてふば
十六や。ろく地の程をすぐるにも。君に心をつれてこそゆけ

十七や。七どまうでのたび〳〵も。君にあふよこいのりこそすれ
十八や。はつかしふがらいふことを。心づよくもあはぬきみかな
十九とや。くるし夜ごとにまちかねて。袖いたづらにくちやはてまし
二十とや。にくしと人のおもふらん。われふらぬ身をひとのこふれは
といひければ。かの下女是を聞きて。樹子よくほるべきにはあらねども。あまりに歌
の心の面しろさに。かんしひとうそへよこいへば。ひとつそへてかくふん
二十一と。一ごのふさけこめんさて。むほくのことはかたりつくしつ
とよみでんければ。彼下女とうめいをつくゞ〳〵とみて。かほゞやさしきわざをして。
かんしうり給ふそといひければ。ふり〳〵してことたへける
下女は心えず思ひける。さる間禁中此事をきこしめされ。たゞ今の商人の歸るさ
きみよとて。人をそへてみせ給ふに。とうめいの内裏を出で。心にもはれけるは。今日
は日もくれぬ。あすこそと思ひ。やどをこりけり。さる間下女やどをよく見おきて歸
り。此よしかくと申しあぐれば。禁中よりおほせけるやうは。彼の商人のいひつる
ことばを。よも忘らじ。伊勢が源氏をこひてよみしうたふり
君ごふる涙のあめに袖ぬれて。ほさんとすれば又はふり〳〵
といふ歌の心はべふりと。おほせごとありければ。彼の局の女房。さてはあさからぬこゝ
ろあこがれけるよと。つくゞ〳〵とおもひつゞけて。小野の小町は。わかざかりのすがた
ふきによりて。人に戀ひられて。其怨念をんねんとけざれば。無量のとがによりて。その因果
のがれず。遂に小町四位の少將おもひはふれず。いひすつるこゝのはまでも。ふさけ
あるふり。たゞいたづらに朽ちはつる身をといふ。歌の心をわすれずして。常に人に
わりふきふさけを。こめたき事にてさあんじつけて。下女一人つれて内裏をいで。さ
うめいがやどへ行きて。戸をほと〳〵とたゝきてかくふん
出でふほせこよひばかりの月かげに。ふり〳〵ぬらすこひのたもとを
とよみ給ひければ。とうめいうちにて是をきゝ。夢のごとちして。おもての戸をあけて。

ごらばそこへも出でずして。かこちがほふるふぜいして。かくばかり
出でずとも。こころのあらばかげさして。やみをばてらせあり明の月
とよみて。うちほれたるふぜい。もとより彼の女房ふさけふかきにより。うちにさし入
りて。其夜は鴛鴦のふすまのしたに。比翼の契をこめ。夜もやう〳〵ふけ。きぬ〴〵
ふりしをりしも。とうめいがもちけるまもりがたふを。ふごやらん。心にかけ給ふけし
きにて。おほせけるやうは。女房の身こそあれ。男のまもりがたふをかけたるためし
は。いかにとおほせければ。とうめいこれはよしあるかたふにて候。いかにと申すに。わ
れは是五條のはしのすて子にて候を。やうしの父のそだて。人とふされ候ふり。
まだわれに此かたふをそへて。捨てられしかたふれば。これを母と思ひ。身をもばふ
たずもちたると申しければ。女房ふほあやしく思ひ。さては御身はいくつにふり給
ふぞと問ひ給へば。とうめい。子にて捨てられ候よしうけ給はり候。今ははや大にふ
り候とかたりければ。うぶぎぬは何にて候と問ひ給へば。あやめの小袖のつまに。一
首のうたを書きたり。いかにとおほせければ。やがてとうめい。かくとあり

もゝとせに又もゝとせはかさねども。七つ〳〵の名をばたえじふ

とよみ候歌ふりといへば。和泉式部は捨てし時。さやをばとめ給ひて。是をばわが
みのかたみとおもひし故に。身をはふたずもちたりしほどに。さやをとり出だしてあ
はすれば。うたがひもふきもこのさやふり。こは何事ぞおや子をたらであふ事も。かゝ
るうき世にすむもあふり。是を菩提のたねとして。都をいまだよぶかに出でゝ。をのへ
の手のうらつたひ。ひぶきは何とたかまがた。かすみをたのぎ雲をわけ。はりまの國書
寫上り。たやうくう上人の御弟子とふり。六十一のとし德心し給ひけるとき。たゝ
よしやの鎮守のはしらに。御歌を書きつけ給ひ。かくばかり

くらきよりくらきやみぢにうまれきて。さやかにてらせ。山のはの月

とよみて。かきつけ給ひけるによりて。歌の柱といふことは。播磨の國たゝよしやよりこ
そはじまりたれと申すふり

一寸法師

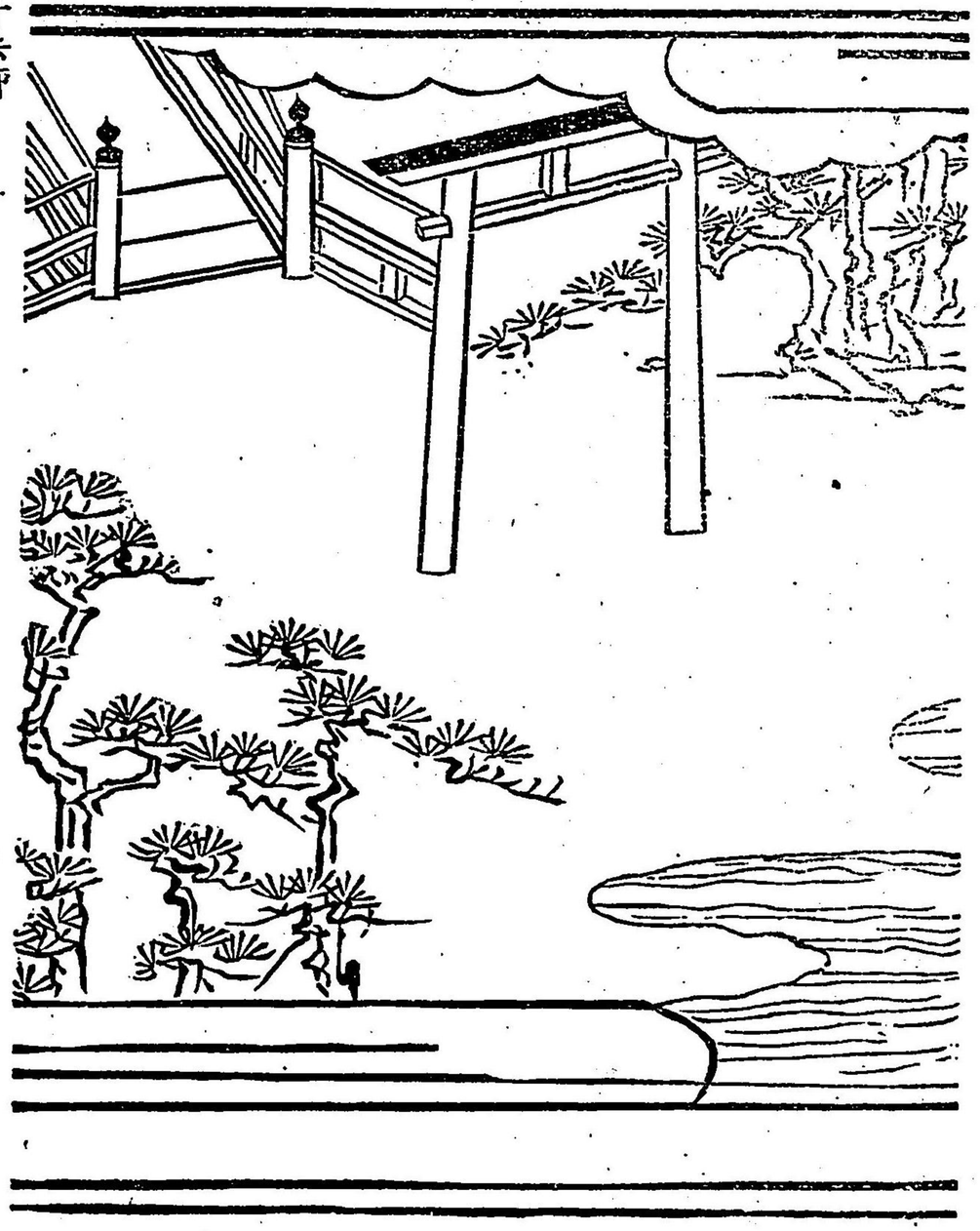
十

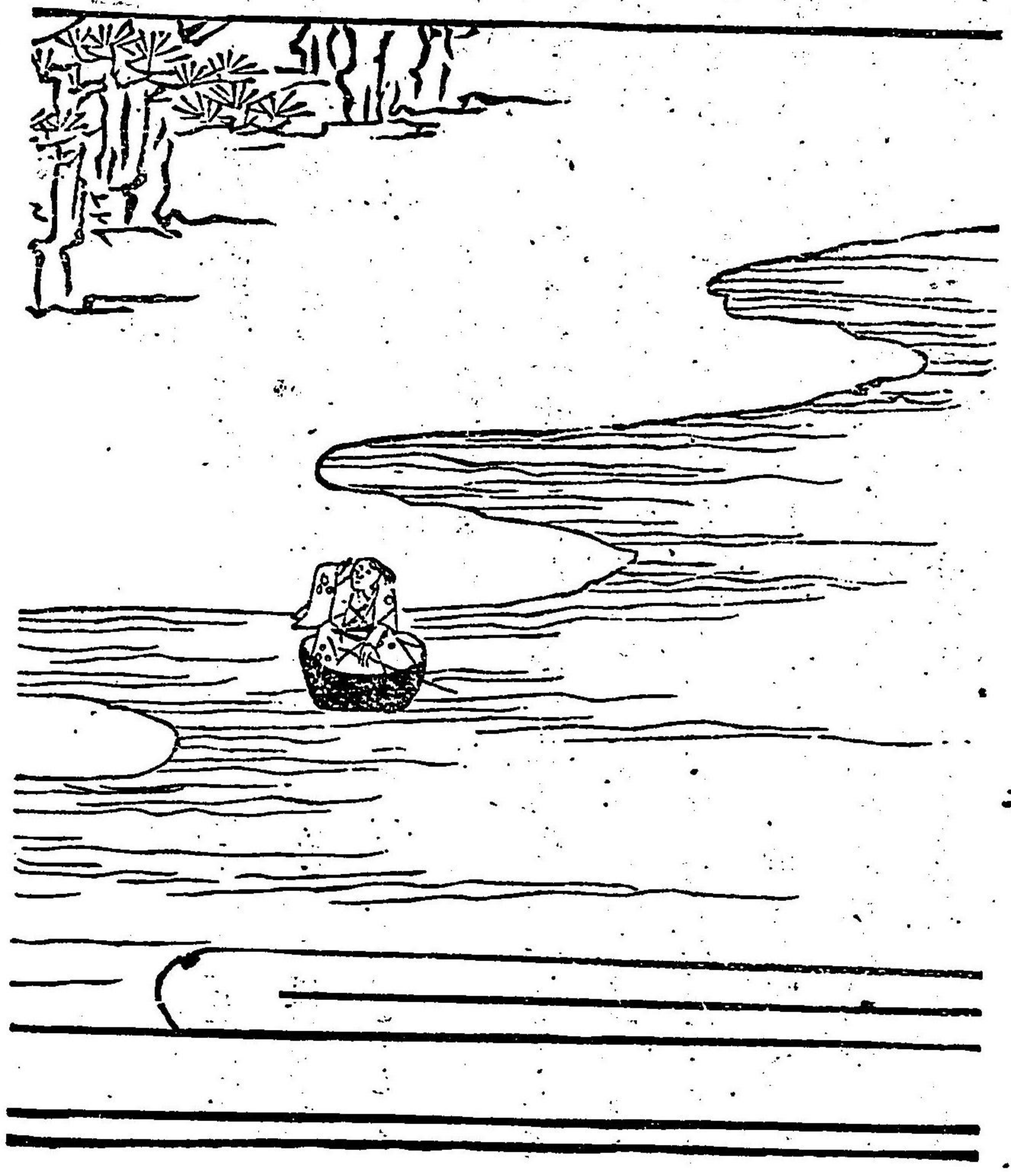
一寸法師

中頃のことなるに。津の國難波の里に。おうちと。うばと侍り。うば四十に及ぶまで。子のふきことを悲しみ。住吉にまゐり。ふき子を祈り申すに。大明神あはれとおぼしめして。四十一と申すに。たゞふらずふりぬれば。おうち。よろこびかぎりなし。やがて十月と申すに。いつくしきをのこをまうけけり

さりながら。生れおちてより後。せい一寸ありければやがて其名を。一寸ぼうしとふづけられたり。年月をふるほどに。はや十二三にふるまでそだてぬれども。せいも人ふらず。つくづくと思ひけるは。たゞものにてはあらず。たゞけ物ふぜいにてこそ候へ。われいかなる罪のむくいにて。かやうのものをば。住吉より給はりたるぞや。あさましさよと。みるめも不憫なり。夫婦思ひけるやうは。あの一寸法師あを。いづかたへもやらばやと思ひけると申せば。やがて一寸法師。此よしうけ給り。おやにも

一寸法師





かやうに思はるゝも。くちをしき次第かな。いづ方へもゆかばやと思ひ。かたふふく
てはいかゞと思ひ。針を一つうばに乞ひ給へば。とりいだしたびにける。すゝはちむき
はらにてつかさやをこしらへ。都へのぼらばやと思ひしが。去ぜん舟ふくてはいかゞあ
るべきとて。又うばに。ごきゞ。はしとたべと申しうけ。ふごりをしくゝむれども。たち
出でにけり。住吉の浦よりごきを舟としてうち乘りて。都へぞのぼりける

すみふれし難波のうらをたちいでゝ。都へいそぐわがこゝろかな

かくて。鳥羽の津にもつきしかば。そこもとにのり捨てゝ都にのぼり。こゝやかしこと
みるほどに。四條五條の有様。心も詞にもおよばれず。さて三條の宰相殿と申す
人のもとにたちよりて。物申さんといひければ。宰相殿はきこしめし。おもしろき
こゑと聞き。椽のはふへたち出でゝ。御覽ずれども人もなし。一寸法師かくて人にも
ふみ殺されんとて。ありつる足駄の下にて。物申さんと申せば。宰相殿ふしぎのこ
とかな。人はみえずして。おもしろき聲にてよばはる。出でゝみばやとおぼしめし。そ

こゑるあしだはかんとめされければ。あしだの下より。人ふふませ給ひそと申す。ふ
しぎにおもひてみれば。いつきやうふるものにて有りけり。宰相殿御覽ずて。げにも
おもしろきものかなとて。御わらひふされけり
かくて年月おくるほどに。一寸法師十六にふり。せいはもとのまゝふり。さる程に
宰相殿に。十三にふらせ給ふ姫君おはします。御かたちすぐれ候へば。一寸法師
姫君をみたてまつりしより。おもひとふり。いかにもしてあんをめぐらし。わが女房
にせばやと思ひ。ある時みつものゝうちまきとり。茶袋に入れ。ひめぎみのふしておは
しけるに。はかりごとをめぐらし。姫君の御口にぬり。さてちやぶくろばかりも
ちてゝかきぬたり。宰相殿御らんゞて。御たづねありければ。姫君の。わらはがこのほ
どとりあつめておき候うちまきを。とらせ給ひ御まゐり候と申せば。宰相殿大にい
からせ給ひければ。あんのごとくひめぎみの御口につきてあり。まことは偽ふらず。か
くるものをみやこにおきて何かせん。いかにも失ふべしとて。一寸法師に仰せつけら

る。一寸法師申しけるは。わらはが物をさらせ給ひて候程に。ここにかくにもはからひ候へとありけるとて。心のうちにうれしく思ふ事かぎりなし。ひめぎみはたゞ夢の心ちして。あきれはてゝぞおはしける。一寸法師さく〳〵とすゝめ申せば。やみへとほくゆくふぜいにて。都を出でゝ。足にまかせてあゆみ給ふ。御心のうち。おしはからひてこそ候へ。あらいたはしや。一寸法師は。姫君をきにたてゝぞ出でにける。宰相殿はあはれ此ことをとゞめ給ひかしとおぼしけれども。まゝはゝ（繼母）のことなれば。さしてとゞめ給はず。女房たちもつきそひ給はず。姫君あさましき事におぼしめして。かくていづかたへもゆくべきならねど。難波の浦へゆかばやとて。鳥羽の津より舟にのり給ふ。折ふし風あらくして。きやうがるしまへぞつけにける。舟よりあがりみれば。人すむともみえざりけり。かやうに風わろく吹きて。かの島へぞふきあげける。とやせん。かくやせんと思ひ煩ひけれども。かひもなく舟よりあがり。一寸法師はこゝかしことみめぐれば。いづくともなく鬼二人來りて。一人はうちでのこづちを持ち。いま

一人が申すやうは。のみてあの女房とり候はんと申す。くちよりのみ候へば。めのうちより出でにけり。鬼申すやうは。是はくせものかな。くちをふさげば目より出づる。一寸法師は鬼にのまれては。めよりいでゝ飛びありきければ。鬼もおぢおのゝきて。是はたゞ者ならず。たゞ地獄に亂こそいできたれ。たゞにげよといふまゝに。うちでのこづち。杖をもつ。ふにに至るまでうち捨てゝ。極樂浄土のいぬゐの。いかにもくらき所へ。やうやうにげにけり。さて一寸法師は是をみて。まづうちでのこづちをらんばうし。われ〳〵がせいをおほきにふれさせ。どうさうち候へば程なくせいはほきにふり。さて此ほゞつかれにのぞみたるこゝろふれば。まづ〳〵めしをうちいだし。いかにもうまさうなるめし。いづくともなくいでにけり。ふしぎなり。仕合こゝろにけり。其後金銀うちいだし。姫君ともに都へのぼり。五條あたりにやどをとり。十日ばかりありけるが。此事かくれなければ。内裏にきこしめされて。いそぎ一寸法師をぞめされける。すなはち參内つかまつり。太王御らんじて。まことにいつくしきわらはにて侍

る。いかさまこれはいやしからず。先祖をたづね給ふ。おうぢは堀河の中納言と申す人の子ぞり。人の讒言により。流され人どぞりたまふ。ゆふかにてまうけし子ぞり。うばは。伏見の少将と申す人のこぞり。幼きときより父母に後れ給ひ。かやうに心もいやしからざれば。殿上へめされ。堀河の少将にぞし給ふこそめでたけれ。父母をも呼びまゐらせ。もてぞしかしづき給ふ事。よのつねにてはぞかりけりさる程に少将殿中納言にぞり給ふ。心かたちはじめより。よろづ人にすぐれ給へば。御一門のおぼえいみじくおぼしける。宰相殿きこしめしよろこび給ひける。そのち若君三人いできけり。めでたくさかえ給ひけり

住吉の御ちかひに。末繁昌にさかえたまふ。よのめでたきためし。これにすぎたることはあらじとぞ申し侍りける

さいわひ本

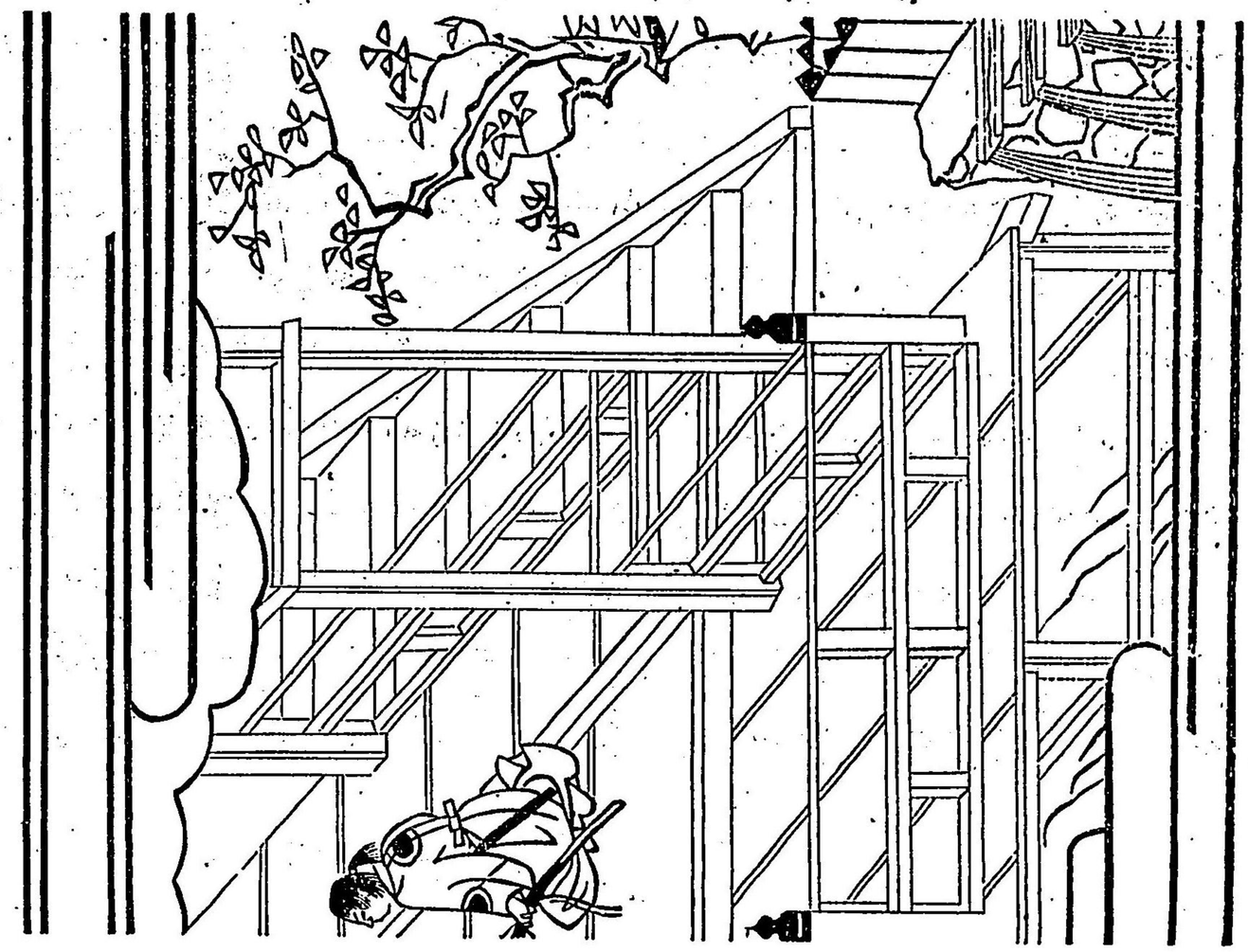
る。いかさまこれはいやしからず。先祖をたづね給ふ。おうぢは堀河の中納言と申す人の子ぞ。人の讒言により。流され人ぞとぞ聞きたまふ。ゆゑかにてまうけし子ぞ。うばは。伏見の少将と申す人のこぞ。幼きときより父母に後れ給ひ。かやうに心もいやしからざれば。殿上へめされ。堀河の少将にぞし給ふこそめでたけれ。父母をも呼びまゐらせ。もてなしかしづき給ふ事。よのつねにてはなかりけりさる程に少将殿中納言にぞ給ふ。心かたちはじめより。よろづ人にすぐれ給へば。御一門のたぼえいみじくおぼしける。宰相殿きこしめしよろこび給ひける。そのゝち若君三人いできけり。めでたくさかえ給ひけり

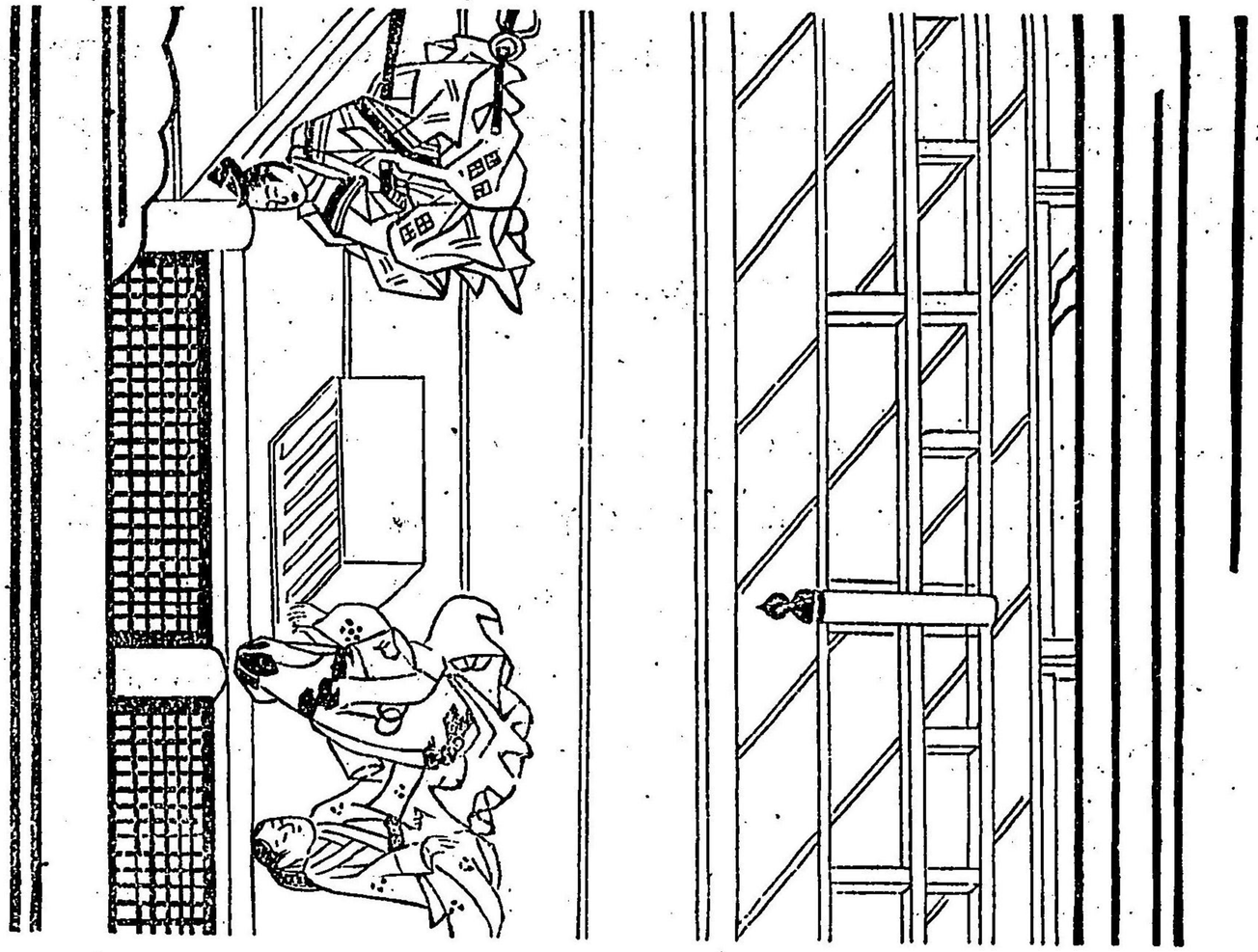
住吉の御ちかひに。末繁昌にさかえたまふ。よのめでたきためし。これにすぎたることはあらじとぞ申し侍りける

ちくぶの笠

さかき

豊前の國。うだの佐伯と申す人。一族に所領をとられ。京都へ上り沙汰するといへども。更にみちもかずして。年月をおくれどもかひなし。かくてはかなはじと思ひ。清水にまゐりて。一七日こもりて。御夢相にまかせ。どこにもかくにもふらんとおもひたち。竹松と申すわらはを一人ぐしてまゐり。祈念をふかく申せども。さしたる御夢相もふかりけり。あたりをきつとみてあれば。年のほど二十ばかりの女房の。見めかたち世にすぐれて。ひすゐのかんざしは。せいたいかたていたにからすみをかけたるにことならず。かつらのまゆずみあをうして。たんくわのくちびるうつくしくして。ほうたんのかさねをにことならず。三十二相のかたちは。月をねたみ花をそねむばかりなる女房の。みふ水晶のじゆずをつまぐり。念誦半ばみえけるに。佐伯こころにおもふやう。おふじ人間にすむならば。かやうの人と一夜の枕をならぶるよしも





がふと。あまりこゝろのたへかねて。ことばをかけんと思ひ。たちより御こもり候かと申せども。きかぬ顔にて候ひし程に。もし主はしあたりにあるやらんと。志づこゝろもふかりけり。扨夜もやう〳〵あけければ。けうがる下女に包を持たせ。ふたいをさして出でられける程に。あまりのふごりをしさに。たちよりたもとをひかへて。一首かくふん

わかるればわれこそうけれ。あか月のさりはふにしにれをばふくらん

きてみてぞやどのつらさも志られける。君ゆゑぬるゝ袖とおもへば

かやうによみければ。女房もうちあんじ。歌の返事せぬものは。舌ふきものにうまるときけば。ふりかへりてふん

われもたゞおふどこゝろにたびころも。きてこそやどのつらさをもしれ

か様によみ捨てゝかへりければ。あまりのふごりをしさに。竹松をよびて。いまの女房のあとに行きて。宿を見てかへれよといひければ。此わらはみえがくれに行きければ。四條高倉にて。さもいうふる所へいりけるほどに。つゞきていりみれば。ひろえんにうちあがり。妻戸へいらせ給ひけるが。うしろを見給へば。わらはの來りしを。つく〳〵とみ給ひて。うちゑみてたゝせ給ひける程に。此わらはさしよりければ。この女房の給ひけるやうは。汝が志うには「もずのくさぐき」といへばかりにて。うちへいらせたまひけり

いそぎ歸り。ありのまゝに申しければ。佐伯聞き給ひて。うちあんじつゝ。暫くありて。さてはうれしきものかな。歌の本歌にさる事あり

物かげにありとみえふばをきふせそ。こよひすぐすな。もずのくさぐき

此歌の意ふりと思ひて。こゝどんじやうに出で立ちて。彼の宿所へぞいそがれける。もとよりがの女房も。今宵こいひし事ふれば。今やいつやとまちぬたり。去程に佐伯。このうちへつか〳〵と入るほどに。とかくの事もふく。偖老同穴のかたらひあさからず。此女房は世にある人にて。きんちうさまへも。だい〳〵さんらうかんを參らせ給ひける程に。佐伯の本領もほどふくみちぬきて。豊前へくだらんとの王ひてこゝ

しらべられけり。此女房。すこしの間もたちはふれん事を悲しみつゝ。くだりかねてそありしが。あるとき此女房に申されけるは。たゞ今もつれまゐらせて。下りたくは侍れども。竹松一人候へば。とかくの事にもおよび候はず。やがて御むかひにのぼせ候べし。それまで離れがたく思ひまゐらせ候べとの給ひ。たかみに御こゝろもひとつにてやく。道すがらのこともたしはからせ給ひて。御忘れもせずおぼしめし給はゞ御むかひをまゐらせんまで。是をかたみに御らんじて。御待ち候へと。鬢の髪をすこしきりて。女房に參らせけり。女房も離れがたくおもはれけれども。こばかりの給ひけり

かくて筑紫につきければ。安堵のよろこびかぎりなし。日々夜々のらつふ。さかもりびゝしき事かぎりなし。かくて日數をおくりしかば。三とせにぶりけれどもむかへものぼせず。京の女ばうは。今やいつやとまちけれどもおとゝもせず。そよゝ風のふくも。此おとづれかとまちかねて。餘のくるしさに。清水にまゐりて此いのりをぞ申されける。あるとき鎌倉へくだりける僧のありけるに。ふみ一つかきてことづて。くださんとかたらひければ。此僧やすきほどの御事ぶりとありければ。うれしく思ひてふみをかきて此御僧に奉る。御僧はふみうけとりて。行脚の事にて候ほどに。屆け參らせ候はんずれども。御返事までは本望候まゝと申し給へば。此ふみたゞとゞきて候はゞ。よろこび入りまゐらせ候べしとて。さめ〳〵とふき給へば。僧もあはれに思ひ給ひて。いかゞる御事の御ふみにて候やらん。いたはしやと思ひて。いそぎゆく程に。ほどなく豊前の國佐伯の館にたづねいり。此ふみ都より。御ことづて候とありければ。折ふし佐伯は。たが野に出で。二三日もかへられず。たしかにとゞけて。僧はすゝはちかへられけり

内の女房此ふみをとりてみてあれば。びんぎよろこび申しまゐらせ候。さてもく御くだりのその後は。よものなぎはら霜がれて。たよりの風の音もふし。下葉の露も秋すぎて。むさゞころふきくずのはを。うらみんとすれどもかれ〳〵の。かつらばか

りの身にそひて。志がらむ今のわが心。せめておもひも慰むと。傾く月をみおくれども。ふがむる人のあらざれば。空しき夜はのあか月は。志たしき寝屋にたちかへり。あくるも遅きこひ衣。君が姿を夢にても。せめてみはやと思へども。ねられぬ夜はのくせとして。夢さへうすくふりにけり。かたしく袖のひとりねは。くもゐの雁のひとつらも。つがはぬ鴛鴦のこゝちして。志もさむしろのたづがねは。あふとみる夜の夢もふし。思ふ心のおもかげは。身にそふばかりますかゞみ。みてさ申す人もあらばこそ。さふがら夢の心地して。空飛ぶ鳥の一つがひ。うはのそらふる事までも。ちぎりさけばうらやまし。行きがた志らぬあま小舟。獨物をやこがるらん。野寺の鐘の入相も。心つきぬるうき身かふさかきて。あまのみるめもはづかしや。いそぎ煙さふし給へと。おくに歌あり

見るたびに心づくしのかみふれば。うさにぞかへす。もゝのやしろへ

とかゝれたり。佐伯くだりの時。かたみとて。一ふさきりて置きつる髪の髪を。まきそ

へてあり。うちの女房是を見て。あらうつくしや。おもしろや。かゝるいうふる女房を。よばてはいかゞあるべきぞ。かほど福人ふる男に。かくと物いはばいかゞあるべき。たばかりごとをいひてみんと思ひて。佐伯たか野よりかへりけるに。女房いふやうは。みづからが妹都に人にたのめられて。此程候ひしが。をつとの心のうたてさは。とあるちやうに思ひつき。いとまを出だして候程に。萬事たのみて下り候はんと。ふみをこさづてくだし候へば。むかへをのぼせたび候へといひければ。やすきほどの事ふりとて。いそぎむかへをのぼすべしといひて。やがていひつけて。人をのぼせんとありしかば。その時此女房は。そらやみをして。文をかきえず候。殿に一筆あそばして御やり候へといひければ。ともかくもとてかゝれけり。ひさしく御おとづれも申し候はで。心より外に候處に。御ふみ給はりうちおきがたく。御うれしくふがめ入候。すゝはちの御むかへまゐらせ候まゝ。急ぎ御下り候べく候。くはしくはさても御みづからにてとかゝせたり。さるほどに程ふくむかへは京へ上りつきけり。その間にうつくしく御

所をたて。待たれけり。京にはうれしく思ひて。やがて下られける間。程ふく豊前の國につき給へり。御下りさておの〳〵ひしめき。やがて新宮へいれ奉りて。女房いであひて。あらいつくしの女房や。李夫人楊貴妃衣通姫小野小町ぞ聞きつたへしも。是にはいかでまさるべき。われだにみれば。あまりのうつくしさに。たちども更に覺えず。かほどうつくしき人をさへ。いひ出だす事もふし。まして わらはがごとき は。年月ふが〳〵の在京に。一度もおもひ出だすまゝ。かほどふとくしんふる男をたのみし。われこそあさましけれとて。かみ剃り落し出家せんと。たゞ一すぢにおもひ定めし。女房の心のうちこそやさしけれ。かくて夫にいふやうは。是迄京のまれ人をよびくだして候うへは。いそぎ御げざん候へかしといひければ。すふはちもんどうへぞうつりける

其あとに女房は。髪をきりふみにそへおき。やがて家をぞ出でにける。京の女房此よしを聞き。やさしやふ。たかきもいやしきも。妬むふらひの候に。かやうにやさしき人を。いかでか一人おくべきぞ。佐伯に二たびげざんして。すぎにし戀をはれつるも。偏に彼の本妻のふさけのふかきやゑふれば。共に出家せんとて。やがてかみ切り捨てゝ。おふゞ庵室にとぢ籠り。行ひすましてゐたりけり

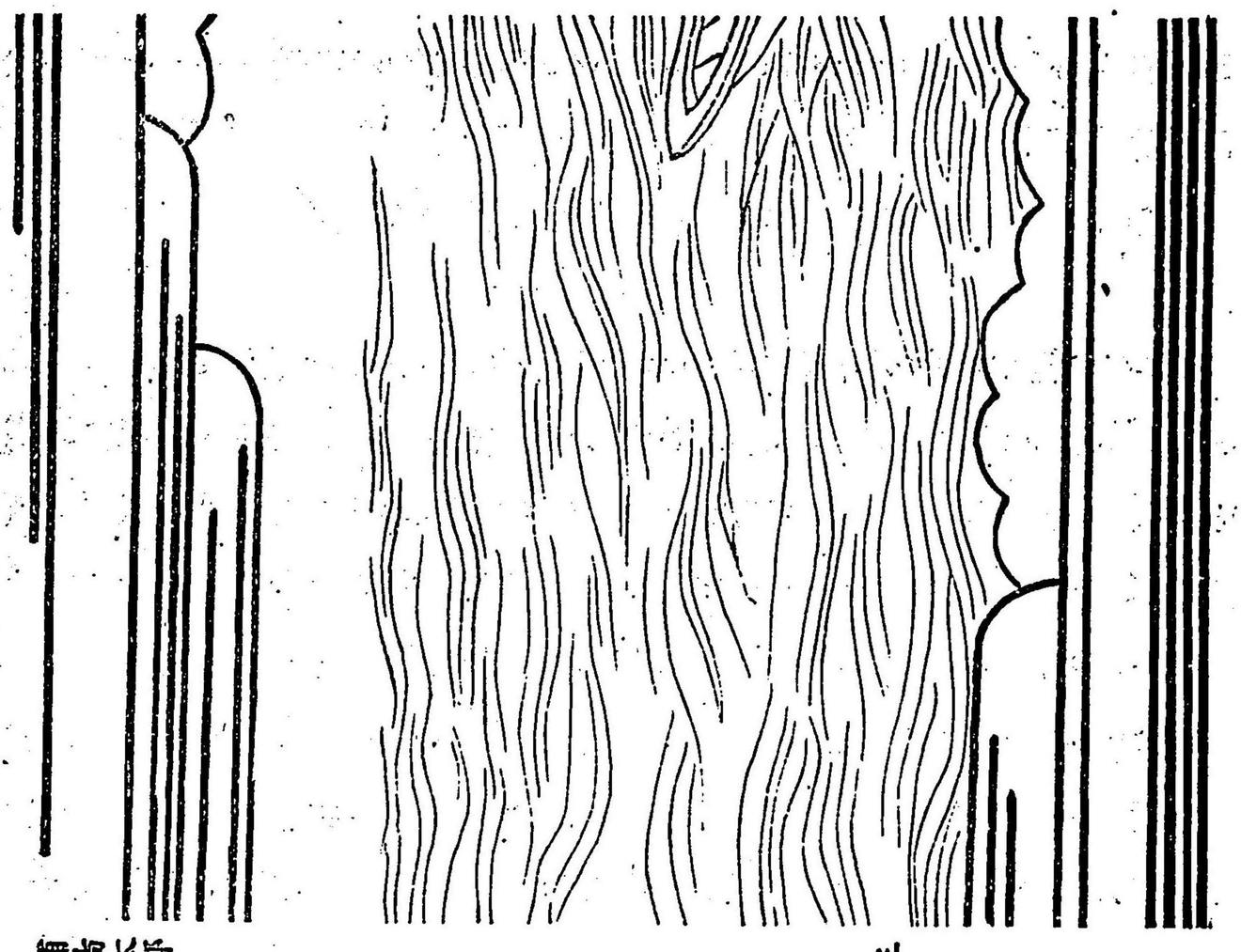
佐伯は二人の女房に捨てられて。あるにかひなき身のほどとて。髪きりて西へふけ。高野山へぞ登りける。是清水の觀音の御方便にて。三人ともに救ひとらせ給ひて。いづれも行ひすまして。往生の素懷をとげ。彌陀觀音せいしきあらはれ。三尊是ふりといへり。誠にありがたく。たつとかりけるめぐみふり

浦島太郎

浦島太郎

昔丹後の國に浦島といふもの侍りしに。其子に浦島太郎と申して。年のよはひ二十四五の男ありけり。あけくれ海のうろくづを取りて。父母を養ひけるが。ある日のつれ〴〵に釣をせんとて出でにけり。浦々しま〴〵入江々々。至らぬ所もふく。つりをし。貝をひろひ。みるめをかりふごしける所に。ゑじまが磯といふ所にて。龜をひとつ釣り上げゝる。浦島太郎此龜にいふやう。汝たやうあるものゝ中にも。鶴は千年龜は萬年とて。いのち久しきものなり。たちまちここにて。命をたゝん事。いたはしければ。助くるなり。常には此恩を思ひいだすべしとて。此龜をもとの海にがへしける

かくて浦島太郎。其日はくれて歸りぬ。又つぐの日。うらのかたへ出でゝ釣をせんと思ひみければ。はるかの海上に。小船一艘浮べり。あやしみやすらひみれば。うつ



川

浦島太郎

くしき女房只ひとり波にゆられて。しだいに太郎がたちたる所へ着きにけり。浦島太郎が申しけるは。御身いかふる人にてましませば。かゝるおそろしき海上に。たゞ一人乘りて御入り候やらんと申しければ。女房いひけるは。されはさるかたへ便船申して候へば。なりふし浪風あらくして。人あまた海の中へはね入れられしを。心ある人ありてみつからをば。此はし舟にのせてはふされけり。悲しく思ひ鬼の島へやゆかんと。ゆきかたしらぬなりふし。たゞ今人にあひまゐらせさふらふ。此世ふらぬ御縁にてこそ候へ。されば虎狼も。人をえんとこそしさふらへとて。さめざめと泣きにけり。浦島太郎も。さすが岩木にあらざれば。あはれこれもひ綱をさりてひきよせにけり

さて女房申しけるは。あはれわれらを。本國へおくらせ給ひてたび候へかし。これにて棄てられまゐらせば。わらはゝ何處へ何とふりさふらふべき。すて給ひ候はゞ。海上にてのもの思ひも。おふゞ事にてこそ候はめと。かきくどきさめ〳〵とふきければ。浦島太郎もあはれと思ひ。おふゞ船にのり沖の方へこぎ出だす。かの女房のをしへに從ひて。はるか十日あまりの船路を送り。ふるさとへぞ着きにける。さて船よりあがり。いかふる所やらんと思へば。志ろがねの築地をつきて。黄金の甍をふらべ。門をたて。いかふるてんゞやうの住居も。これにはいかでまさるべき。此女房のすみ所。ことばにも及ばれず。中々まうすもおろかなり。さて女房の申しけるは。一樹の影に宿り。一河の流を汲むことも。皆これたしやうの縁ぞかし。ましてやはるかの波路を。はるゞゝとおくらせ給ふ事。偏にたしやうの縁ふれば。何かは苦しかるべき。わらはと夫婦の契をもふし給ひて。おふゞ所にあかしくらし候はんやと。こまごまとかたりける

浦島太郎申しけるは。ともかくも仰せに志たがふべしとぞ申しける。さて偖老同穴のかたらひも淺からず。天にあらば比翼の鳥。地にあらば連理の枝とふらんと。互に鴛鴦のちぎりあさからずして。あかしくらさせ給ふ。さて女房申しけるは。こ

れは。龍宮城と申す所ぞり。此所に四方に四季の草 木をあらはせり。いらせ給へ。みせ申さんとて。ひきぐして出でにけり。まづ東のとをあけてみければ。春のけしきと覺えて。梅や櫻の咲き亂れ。柳の糸も春風に。ふびく霞のうちよりも。黄鳥の音も軒近く。いづれの木ずゑも花ふれや。南おもてをみてあれば。夏の景色とうちみえて。春をへだつるかきほには。卯花や。まづさきぬらん。池のはちすは露かけて。みぎはすゞしきさゞなみに。水とりあまた遊びけり。沐々の梢も茂りつゝ。空に鳴きぬる蟬の聲。夕だち過ぐる雲間より。聲たてゝとほるほとゝぎす。ふきて夏とは志らせけり。西は秋とうちみえて。四方の梢もみぢして。まぜのうちふる白菊や。霧たちこもるのべのすゑ。まさぎが露をわけ〳〵て。聲ものすごき鹿のねに。秋とのみこそ知られけれ。さて又 北をふがむれば。冬の景色とうちみえて。四 方の木ずゑも 冬がれて。枯葉におけるはつ霜や。山々はたゞ白 妙 の雪にうもるゝ谷のとに。心ぼそくも炭がまの煙に志るき賤がわざ。冬と志らする景 色かな。かくておもしろき事ごもに。心を慰め。榮華に誇り。あかしくらし。年月をふるほどに。三年にふるは。ほどもふし。浦島太郎と申しけるは。我に三十日のいとまをたび候へかし。ふるさとの父母をみすて。かりそめに出でゝ。三年を送り候へば。父母の御こゝを心もとなく候へば。あひ奉りて。心やすくまゐり候はんと申しければ。女房おほせけるは。三 とせがほどは。鴛 鴦のふすまの志たに比翼のちぎりをふし。かたときみえさせ給はぬだに。とやあらん。かくやあらんと 心 をつくし 申しに。今わかれふは。又いつの世にかあひまゐらせ候はん。二 世の緣と申せば。たとひこの世にてこそやめまぼろしの契にてさぶらふとも。必來世にては。ひとつはちすの緣 とうまれさせおはしませとて。さめ〳〵とふき給ひけり。又 女房申しけるは。今は何をかつゝみさふらふべき。みづからは。この龍宮城の龜にて候が。ゑゞまが磯にて。御身に命をたすけられまゐらせて候。その御恩ほうゞ申さんとて。かく夫婦とはふりまゐらせて候。また是はみづからがかたみに御らんゞ候へとて。ひだりの脇よりいつくしき。笥をひとつとりいだし。

あひかまへて。このはこをあけさせたまふなとてわたしけり

ゐしやちやうりのふらひとて。あふものにはかふらず別るゝは知りふがら。こゝめがたくてかくふん

日かずへてかさねしよはのたび衣。たちわかれつゝいつかきてみん

浦島返歌

わかれやくうはのそらふるから衣。ちぎりふかくばまたもきてみん

さて浦島太郎は。互にふこりをしみつゝ。かくてあるべきこゝとふらねば。かたみのはことを取りもちて。ふるさとへこそかへりけれ。わすれもやらぬこしかたゆく末の事ども思ひつゞけて。はるかの波路をかへるとて。浦島太郎かくふん

かりそめにちぎりし人のおもかげを。わすれもやらぬ身をいかゞせん

さて浦島は。ふるさとへ歸りみであれば。人跡絶えはてゝ。虎ふす野邊とふりにけり。浦島これをみて。こはいかふる事やらんと思ひける。かたはらをみれば。柴の庵のありけるに。たち物いはんといひければ。内より八十はかりの翁いであひ。たれにてわたり候ぞと申せば。浦島申しけるは。此所に浦島のゆくへは候はぬかといひければ。翁申すやう。いかふる人にて候へば。浦島の行方をば御たづね候やらん。ふしぎにこそ候へ。その浦島とやらんは。はや七百年以前のことゝ申し傳へ候と申しければ。太郎大きに驚き。こはいかふることゝそこて。そのいはれをありのまゝにかたりければ。翁もふしぎのおもひをふし。涙をふがし申しけるは。あれにみえて候。ふるき塚。ふるきせきたうこそ。その人の廟所と申しつたへてさふらへとて。指をさしてをしへける

太郎はふく〳〵。草ふかく露ちげき野邊をわけ。ふるきつかにまゐり。涙をふがし。

かくふん

かりそめに出でにしあとをきてみれば。こらふすのべとふるぞかふしき

さて浦島太郎は。一もとの松のこかげにたちより。あきれはてゝぞぬたりける。太郎

思ふやう。龜があたへしかたみの箱。あひかまへてあけさせ給ふなといひけれども。今は何かせん。あけて見ばやと思ひ。みるこそくやしかりけれ。此箱をあけてみれば。中より紫の雲三筋のぼりけり。是をみれば。二十四五のよはひもたちまちかはりはてにける

扨浦島は鶴にふりて。虛空に飛びのぼりける折。此浦島が年を。龜がはからひとして。箱の中にたゝみ入れにけり。さてこそ七百年の齡をたもちけれ。あけてみるふとありしを。あけにけるこそよしなけれ

君にあふ夜はうら志まが玉手ばこ。あけてくやしきわがふみだかふ

と歌にもよまれてこそ候へ。しやうあるもの。いづれもふさけをもらぬこいふこゝろなし。いはんや人間の身として。恩をみて恩を知ぬは。木石にたとへたり。情ふかき夫婦は。二世のちぎりと申すが。寔にあり難き事ゞもかな。浦島は鶴にふり。蓬萊の山にあひをふす。龜は甲に三せきの祝をそふへ。萬代をへしとふり。扨こそめでたきためしにも。鶴龜をこそ申し候へ。只人には情あり。情のある人は行末めでたき由申し傳へたり。其のち浦島太郎は。丹後の國に浦島の明神と顯はれ。衆生濟度し給へり。龜もおなじ所に神とあらはれ。夫婦の明神とふり給ふ。めでたかりけるためしとぞ

酒類臺工

酒顛童子

むかし。わが朝のことふるに。天地開けしこのかたは。神國といひながら。又は佛法盛にて。人皇の始より延喜の帝に至るまで。王法ともに備はり。政事すほにして。民をも憐み給ふこと。堯舜の御代とても。これにはいかでまさるべき。然れども世の中に。不思議の事の出できたり。丹波の國大江山には鬼神の住みて。日暮るれば。近國他國の者までも。數を忘らず執りて行く。都のうちにてさる人は。みめよき女房の十七八をかしらとして。是をも數多とりてゐく。いづれもあはれはおとられども。ここにあはれをとゞめしは。院に宮づき奉る。池田の中納言くにたかとて。御龍幸おぼえめでたくし。寶は内に滿ちて。富貴の家にてましますが。ひとり姫を持ち給ふ。三十二相の形をうけ。美人の姫君を見聞く人。心をかけぬものはなし。二人の親の御寵愛斜ならず。かほどにやさしき姫君を。或日のくれ方の